

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第347集

狭山市

八木上遺跡 III

首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア(仮称)建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2007

東日本高速道路株式会社
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 道跡遠景



2 道跡全景

八木上遺跡の紹介

八木上遺跡は、狹山市の西端、入間市との市境近くにあります。遺跡から南南西約1.5kmに西武池袋線仏子駅があります。

八木上遺跡の発掘調査は、一般国道299号バイパスや首都圏中央連絡自動車道(圏央道)の建設の際にも行われ、今回で6回目となります。調査は、圏央道狭山パーキングエリア(仮称)建設に伴うものです。縄文時代前期後葉(約6,000年前)の竪穴住居跡や集石土坑が発見され、これまでの調査成果に、貴重な資料が追加されました。

序

近年、首都圏を中心とした交通環境施策として、いわゆる「3環状9放射ネットワーク構想」による高速道路網の整備が進められておりますが、これは、埼玉県が推進する「体系的な道路網の整備」による「時間が読める道づくり」と軌を一にするものであります。特に、日本各地に向けた放射道路を環状にネットワークする圏央道は、首都圏に流入する交通の分散化や産業活力の向上を図るうえで重要であるばかりでなく、埼玉県南地域における東西方向への移動時間の大幅な短縮や混雑緩和も期待されております。

この度、圏央道の利用促進や地域の活性化に資する施設として狭山パークングエリアの建設が計画され、その事業予定地が含まれる八木上遺跡の取り扱いについて、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、東日本高速道路株式会社の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡や集石土坑のほか多数の土坑・溝跡などの遺構が検出されました。特に、縄文時代前期後葉に属する竪穴住居跡は県内での調査例も少なく、また、集石土坑の一つからは炭化したクルミの種実が検出されるなど、貴重な成果をあげることができました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、東日本高速道路株式会社、狭山市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、狭山市笹井に所在する八木上遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
 2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

八木上遺跡第6次 (BCGU2)

埼玉県狭山市笹井2446番地他
平成18年6月26日付け 教生文第2-22号
埼玉県狭山市笹井2368番地1他
平成18年11月2日付け 教生文第2-43号
 3. 発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア(仮称)建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、東日本高速道路株式会社関東支社さいたま工事事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
 4. 各事業の委託業務名は、下記のとおりである。

発掘調査事業
「平成18年度首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア(仮称)埋蔵文化財発掘調査業務」
整理報告書作成事業
「平成19年度首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア(仮称)埋蔵文化財発掘調査業務(整理)」
 5. 八木上遺跡の発掘調査報告書は以下のとおり刊行されている。

八木上遺跡 1990 事業団報告書第91集
八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂 1996 事業団報告書第165集
 6. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。調査は、平成18年6月1日から平成18年11月30日まで実施し、担当者は以下のとおりである。

小野美代子 (平成18年6月から7月)
田中広明 (平成18年7月から9月)
 - 加藤隆則 (平成18年7月から8月)
宅間清公 (平成18年8月から10月)
細田 勝 (平成18年8月から9月・11月)
坂野和信 (平成18年9月から11月)
- 整理報告書作成事業は、平成19年4月9日から平成19年9月30日まで、岩瀬謙が担当して実施し、平成19年11月30日に事業団報告書第347集として印刷・刊行した。
7. 発掘調査における基準点測量は株式会社東京航業研究所に、空中写真・空中写真測量は中央航業株式会社に委託した。

出土種子の放射性炭素年代測定、種子・果実の同定、土壌の炭素・窒素同位体分析は株式会社パレオ・ラボに委託し、黒曜石の蛍光X線分析は大塚道明が行った。
 8. 発掘調査時の写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は岩瀬が行った。
 9. 出土品の整理・図版作成は岩瀬が行い、赤穂浩一、西井幸雄、瀧瀬芳之、黒坂祐二、上野真由美の協力、矢田美知子の補助を受けた。
 10. 本書の執筆は、I-1は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、V-1はパレオ・ラボAMS年代測定グループ、V-2は新山雅広、V-3はパレオ・ラボ、VIは細田、縄文土器は黒坂、石器とIV-4・V-4は矢田、他は岩瀬が行った。
 11. 本書の編集は岩瀬が行った。
 12. 本書に掲載した資料は、平成19年12月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 13. 発掘調査・本書の作成にあたり下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略)
狭山市教育委員会
石塚和則

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅳ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各種図に記した方位はすべて座標北を示している。

S-15グリッド北西杭の座標は、X=-16390.000m、Y=-42190.000m。北緯35°51′04″、東経139°21′58″である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、西から東方向にアルファベット（A・B・C…）、北から南方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせて、例えばK-12グリッド等と呼称した。なお、アルファベットのZ以降はAA・AB・AC…とした。

4. 本書の本文・挿図・表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ 竪穴住居跡	SC 集石土坑
SK 土坑	SD 溝跡
SX 性格不明遺構	P 小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全体図	1:400	1:1000	1:1500
遺構図	1:60		
遺構拡大図	1:30		
須恵器・陶磁器・鉄滓	1:4		
土器拓刷図・石器	1:3		

小型石器 2:3

金属製品 1:2

6. 実測図の表記方法は以下のとおりである。

断面を黒塗りにしたものは須恵器。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。

8. 遺構図中の網掛けは、以下のとおりである。



9. 遺物観察表の表記方法は次のとおりである。

・長さ・幅・厚さ・口径・器高・底径はcm単位で、重さはgである。

・（ ）内の数値は推定値・残存値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを略号で示した。

石：石英 長：長石 白：白色粒子

黒：黒色粒子

・焼成は良好、普通、不良の3段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No等を記した。

10. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図、狭山市都市計画図1/2,500を使用した。

11. 土層および土器類の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	5. 性格不明遺構	106
1. 発掘調査に至る経過	1	6. ピット	106
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	7. グリッド出土遺物	110
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	V 自然科学分析	117
II 遺跡の立地と環境	4	1. 放射性炭素年代測定	117
1. 地理的環境	4	2. 八木上遺跡から出土した炭化種実	119
2. 歴史的環境	4	3. 集石土坑内土壌の炭素・窒素同位体比測定	121
III 遺跡の概要	9	4. 黒曜石の蛍光X線分析	123
IV 検出された遺構と遺物	23	VI 調査のまとめ	124
1. 竪穴住居跡	23	1. 縄文時代の土器	124
2. 集石土坑	29	2. 遺構の分布と遺物の出土傾向	127
3. 土坑	33		
4. 溝跡	40		

写真図版

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第36図	土坑(8)	51
第2図	周辺の遺跡	6	第37図	土坑(9)	53
第3図	八木上遺跡の各調査区位置図	8	第38図	土坑(10)	55
第4図	八木上遺跡全体図	10	第39図	土坑(11)	57
第5図	全体図区割り図	12	第40図	土坑(12)	59
第6図	八木上遺跡全体図(1)	13	第41図	土坑(13)	62
第7図	八木上遺跡全体図(2)	14	第42図	土坑(14)	65
第8図	八木上遺跡全体図(3)	15	第43図	土坑(15)	67
第9図	八木上遺跡全体図(4)	16	第44図	土坑(16)	69
第10図	八木上遺跡全体図(5)	17	第45図	土坑(17)	72
第11図	八木上遺跡全体図(6)	18	第46図	土坑(18)	74
第12図	八木上遺跡全体図(7)	19	第47図	土坑(19)	77
第13図	八木上遺跡全体図(8)	20	第48図	土坑(20)	79
第14図	八木上遺跡全体図(9)	21	第49図	土坑(21)	81
第15図	八木上遺跡全体図(10)	22	第50図	土坑(22)	83
第16図	第1号住居跡	24	第51図	土坑(23)	86
第17図	第1号住居跡出土遺物	25	第52図	土坑(24)	88
第18図	第2号住居跡	26	第53図	土坑出土遺物	90
第19図	第2号住居跡遺物出土状況	27	第54図	内廻り地区溝跡位置図	92
第20図	第2号住居跡出土遺物	28	第55図	溝跡土層断面図(1)	94
第21図	第1・2号住居跡出土石器	28	第56図	溝跡土層断面図(2)	95
第22図	第1号集石土坑	29	第57図	溝跡土層断面図(3)	96
第23図	第2号集石土坑	30	第58図	溝跡出土遺物	101
第24図	第4号集石土坑出土石器	31	第59図	外廻り地区溝跡位置図	102
第25図	第3号集石土坑	31	第60図	溝跡土層断面図(4)	104
第26図	第4号集石土坑	32	第61図	溝跡土層断面図(5)	105
第27図	第5号集石土坑	32	第62図	性格不明遺構	107
第28図	集石土坑・土坑出土遺物	34	第63図	ビット(1)	108
第29図	土坑(1)	36	第64図	ビット(2)	109
第30図	土坑(2)	39	第65図	グリッド出土遺物(1)	111
第31図	土坑(3)	40	第66図	グリッド出土遺物(2)	112
第32図	土坑(4)	43	第67図	グリッド出土石器(1)	113
第33図	土坑(5)	45	第68図	グリッド出土石器(2)	114
第34図	土坑(6)	47	第69図	グリッド出土石器(3)	115
第35図	土坑(7)	49	第70図	グリッド出土遺物(3)	116

第71図	暦年校正結果	118	第74図	本線調査時の出土土器	126
第72図	炭素・窒素同位体測定比のプロット図	122	第75図	上位段行面の遺構分布	128
第73図	出土土器の分類	125			

表 目 次

第1表	第1・2号住居跡出土石器観察表	29	第10表	ビット計測表	109
第2表	第1号集石土坑石材別重量組成表	29	第11表	グリッド出土石器観察表	116
第3表	第2号集石土坑石材別重量組成表	30	第12表	グリッド出土遺物観察表	116
第4表	第3号集石土坑石材別重量組成表	32	第13表	測定資料及び処理	117
第5表	第4号集石土坑出土石器観察表	33	第14表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	117
第6表	第4号集石土坑石材別重量組成表	33	第15表	出土した炭化種実	120
第7表	第5号集石土坑石材別重量組成表	33	第16表	炭素・窒素同位体比測定結果	122
第8表	土坑出土遺物観察表	90	第17表	八木上遺跡黒曜石産地推定表	123
第9表	溝跡出土遺物観察表	101			

写 真 図 版 目 次

巻頭図版1	1 遺跡遠景	3 第3号集石土坑炭化クミ出土状況 (4)
	2 遺跡全景	4 第3号集石土坑炭化クミ出土状況 (5)
図版1	1 遺跡全景	5 第5号集石土坑
図版2	1 内廻り地区全景	図版10
	2 外廻り地区全景	1 第5号土坑
図版3	1 第1号住居跡	2 第108号土坑
	2 第1号住居跡遺物出土状況	3 第108号土坑断面
図版4	1 第2号住居跡	4 第114号土坑
	2 第2号住居跡遺物出土状況	5 第115号土坑
図版5	1 第2号住居跡跡跡1	6 第120号土坑
	2 第2号住居跡跡跡2	7 第132号土坑
図版6	1 第1号集石土坑	8 第135号土坑
	2 第1号集石土坑遺物出土状況	図版11
図版7	1 第2号集石土坑	1 第139号土坑
	2 第2号集石土坑遺物出土状況	2 第142号土坑
図版8	1 第3号集石土坑	3 第143号土坑
	2 第3号集石土坑炭化クミ出土状況 (1)	4 第146号土坑
図版9	1 第3号集石土坑炭化クミ出土状況 (2)	5 第147号土坑
	2 第3号集石土坑炭化クミ出土状況 (3)	6 第148号土坑
		7 第151号土坑
		8 第152号土坑

図版12	1	第156号土坑	2	第5～8号溝跡
	2	第157号土坑(1)	図版17	1 第9号溝跡
	3	第157号土坑(2)	2	第15号溝跡
	4	第160号土坑	図版18	1 第24・25・30～34号溝跡
	5	第186号土坑	2	第39号溝跡
	6	第187号土坑	図版19	1 第42・43号溝跡
	7	第189号土坑遺物出土状況(1)	2	第46～49号溝跡
	8	第189号土坑遺物出土状況(2)	図版20	1 第46～48・50号溝跡
図版13	1	第190号土坑遺物出土状況	2	第1～3号性格不明遺構
	2	第197号土坑	図版21	1 第1号住居跡出土土器
	3	第198号土坑	2	第1号住居跡出土土器
	4	第199号土坑	図版22	1 第1号住居跡出土土器
	5	第200号土坑	2	第2号住居跡出土土器
	6	第202号土坑	図版23	1 集石土坑・土坑出土土器
	7	第206号土坑	2	集石土坑・土坑出土土器
	8	第207号土坑	図版24	1 集石土坑・土坑出土土器
図版14	1	第223号土坑	2	グリッド出土土器
	2	第225号土坑	図版25	1 グリッド出土土器
	3	第226号土坑遺物出土状況(1)	2	グリッド出土土器
	4	第226号土坑遺物出土状況(2)	図版26	1 グリッド出土土器
	5	第226号土坑遺物出土状況(3)	2	グリッド出土土器
	6	第231号土坑	図版27	1 グリッド出土土器
	7	第236号土坑	2	グリッド出土土器
	8	第237・245号土坑	図版28	1 第1・2号住居跡・グリッド出土土器
図版15	1	第242号土坑	2	第1号住居跡出土土器
	2	第275号土坑	図版29	1 第4号集石土坑・グリッド出土土器
	3	第277号土坑	2	グリッド出土土器
	4	第285号土坑	図版30	1 グリッド出土土器
	5	第1・10～12・24・26・29～33号溝跡	2	金属製品
図版16	1	第1・10～12・29号溝跡	図版31	1 出土した炭化種実

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5か年計画21」に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、「県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進」を重要施策としている。こうした中で首都圏中央連絡自動車道におけるパーキングエリア建設もその完成が待望されるものである。

埼玉県教育委員会では、首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア（仮称）の建設に係る埋蔵文化財の保護について、平成17年度より道路公団（当時）と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

狭山パーキングエリア建設予定地については平成17年4月21日付け東建用管第644号で日本道路公団東京建設局長（当時）から「埋蔵文化財分布調査について」依頼がなされた。これに対し、県教育委員会では同年夏に試掘調査を実施し、八木上遺跡（22-022）の所在及び取扱いについて東日本高速道路株式会社関東支社長あてに回答した。（平成17年10月19日付け教生文第1651号）

その後、工事用道路部分について、平成18年4月26日付け東高関支さ工第38号で東日本高速道路株式会社関東支社さいたま工事事務所長から「埋蔵文化財の分布調査について」依頼がなされた。これに対し県教育委員会では試掘調査を実施し、遺跡の所在及び取扱いについて回答した。（平成18年7月28日付け教生文第1054号）

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、さいたま工事事務所、県教育委員会の3

者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。平成18年5月22日付けで上記3者による「一般国道468号首都圏中央連絡自動車建設事業地内468号首都圏中央連絡自動車道狭山パーキングエリア（仮称）建設事業予定地に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。その後、工事用道路建設用地にかかる変更が生じたことから、平成18年7月29日付けで協定書の一部変更を行った。

発掘調査期間は平成18年6月1日～平成18年11月30日である。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が、東日本高速道路株式会社関東支社さいたま工事事務所長から平成18年4月24日付け東高関支さ工第37号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は、平成18年5月9日付け教文第3-79号で行った。また、工事用道路部分に関する文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は、同事務所長から平成18年7月29日付け東高関支さ工第197号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は、平成18年8月22日付け教文第3-536号で行った。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成18年6月26日付け教生文第2-22号

平成18年11月2日付け教生文第2-43号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

八木上遺跡第6次調査は、平成18年6月1日から平成18年11月30日まで実施した。調査面積は24,900㎡である。発掘調査は、当初10月31日までの予定で開始したが、調査面積の追加等により1ヶ月延長した。

調査は、現在開通している首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の本線を扶んで西側の外廻り地区と、東側の内廻り地区の2地点で行った。

6月より事務手続き、調査事務所等の設営を行った。7月上旬に外廻り地区から重機による表土除去作業を開始した。続いて補助員による作業に着手し、遺構確認作業、遺構精査を実施した。内廻り地区は8月に重機による表土掘削を開始し、9月から補助員による作業に入った。遺構確認の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡、集石土坑、土坑、中世から近世の土坑、溝跡、ピット等が検出された。

外廻り地区は遺構精査の後、土層断面図・遺物出土状況図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行った。平成18年8月に空中写真撮影を実施し、遺構の調査終了後、10月上旬に事務所の撤去を行った。

内廻り地区は遺構精査の後、土層断面図・遺物

出土状況図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、11月に空中写真撮影・空中写真実測を実施した。11月下旬、遺構の調査終了後、事務所撤去・事務手続きを行い調査は終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成事業は、平成19年4月9日から平成19年9月30日まで実施した。

4月当初から出土遺物の水洗・註記を行い、続いて遺物の接合・復元作業、集石土坑出土の石の分類・計量を行った。並行して全体図・遺構図面は、図面修正を経て第二原図を作成し、スキャナーで取り込んだものをコンピューターでデジタルトレースを行った。遺物は復元が終了したのから実測作業に入り、順次トレース・採拓を開始した。

8月に遺物の写真撮影、図面・写真の割付、原稿執筆を進め報告書の編集を開始した。9月に印刷会社を決定し入稿、3回の校正を経て、11月末に報告書を刊行した。

入稿後に本報告書で扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成18年度（発掘調査）

理 事 長	福 田 陽 充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部		調 査 監	坂 野 和 信
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 部 副 部 長	小 野 美 代 子
総 務 課 長	高 橋 義 和	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
		主 査	田 中 広 明
		主 事	加 藤 隆 則
		主 事	宅 間 清 公

平成19年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	岩 瀬 謙

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

八木上遺跡は、埼玉県西部の狭山市笹井2446番地他に所在する。狭山市西端の入間市との市境近くにあたり、北約1kmでは飯能市となる。最寄りの西武池袋線仏子駅から直線距離で、北北東に約1.5kmにある。遺跡の南側には大きく蛇行する入間川が東流している。

入間川は、上流を名栗川とも呼ばれ、外秩父山地の伊豆ヶ岳、武川岳等を水源とし、幾つかの小河川を合流して山間部を南東に流れる。飯能市か

ら入間市付近で加治丘陵に阻まれる形で、流れを北東に変え、やがて川越市付近で荒川に合流する。その間に流路にあたる武蔵野台地を開析し、兩岸に河岸段丘を発達させている。

八木上遺跡は、入間川左岸河岸段丘の最上位段丘面を含めた3段の段丘面に立地する。今回の第6次調査はこの段丘面の上位段丘面と中位段丘面にあたり、標高は上位段丘面が83~85m、中位段丘面が80m前後である。

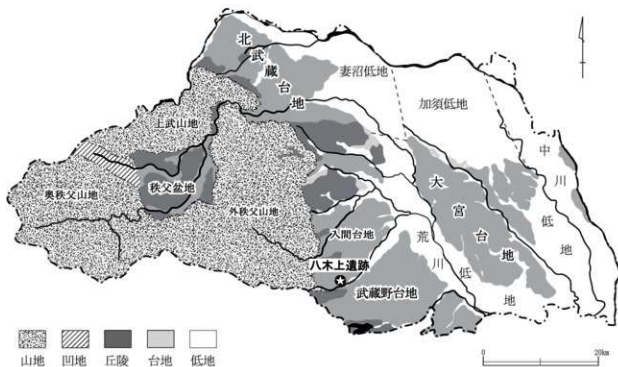
2. 歴史的環境

八木上遺跡では縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑が検出された。遺跡の所在する狭山市やその周辺では縄文時代の遺跡が多数知られており、ここではそれらを中心に概観したい。

旧石器時代は、久保川流域の上中原遺跡(28)

からナイフ形石器が、入間川左岸の西久保遺跡(13)からはナイフ形石器を主体とした石器集中や礫群が検出されている。

狭山市内の縄文時代の遺跡は草創期から後期後半までが確認されているが、その主要な時期は、



第1図 埼玉県の地形

前期及び中期中葉から後期前半にかけてとされている。

草創期は、飯能市小岩井渡場遺跡 (30) では隆起線文系と多縄文系の土器群が出土し、入間川左岸の西久保遺跡や上広瀬ノ原遺跡 (15)、下双木遺跡 (8)、狭山市丸山遺跡 (4) から有舌尖頭器が出土している。

早期は、高根遺跡 (7) から押型文系の破片が出土し、近接する日高市向山遺跡 (9) では住居跡 6 軒が検出されている。入間川左岸の西久保遺跡、今宿遺跡 (14) や右岸の中原遺跡 (27) では縄文系の土器が出土している。

前期では、何れも遺構に伴ったものではないが今宿遺跡で花植下層式が、宮原遺跡 (5) で関山式の土器が採集されている。入間川左岸の八木前遺跡 (19) では黒浜式期～諸磯 a 式期の住居跡と方形須列土坑群が検出され、本遺跡 (1) においても過去の調査で黒浜式期～十三菩提式期にかけての集落が調査されている。八木遺跡 (18) では黒浜式期の住居跡が検出され、金井上遺跡 (16) で諸磯 c 式期～十三菩提式期の土器群が出土している。対岸の揚楯木遺跡 (26) では黒浜式期の集落が、入間市金堀沢遺跡 (20) では諸磯 b 式期の集落が検出されている。また、加治丘陵東縁部の入間市坂東山西遺跡 (21) でも黒浜式期の住居跡が検出されている。これらのことから該期の集落が入間川の両岸に展開したことが窺われる。

中期になると遺跡数は増大し、縄文時代の中で最も多くなる。入間川左岸では、本遺跡の東側に隣接する宮地遺跡 (17) で勝坂式期～加曾利 E 式期を主体とする大集落が調査され、敷石住居跡が検出されている。智光山公園付近を水源とする小河川流域では、狭山市丸山遺跡で勝坂式期～加曾利 E 式期の集落が確認されている。日高市宿東

跡 (2) では 160 軒に及ぶ住居跡が調査され、拠点的な集落と考えられている。また、南小堀川流域の飯能市芦荻場遺跡 (12) においても住居跡が調査されている。

入間川右岸では、揚楯木遺跡で前期の住居跡の他に加曾利 E 式期の敷石住居跡が検出された。入間市坂東山西遺跡 (22) では加曾利 E I～II 式期の住居跡が 170 軒調査され、拠点的な集落遺跡と考えられている。同じ入間市内の霞川遺跡 (25)、水宿遺跡 (23)、金堀沢遺跡でも勝坂式期～加曾利 E 式期の集落が調査されている。

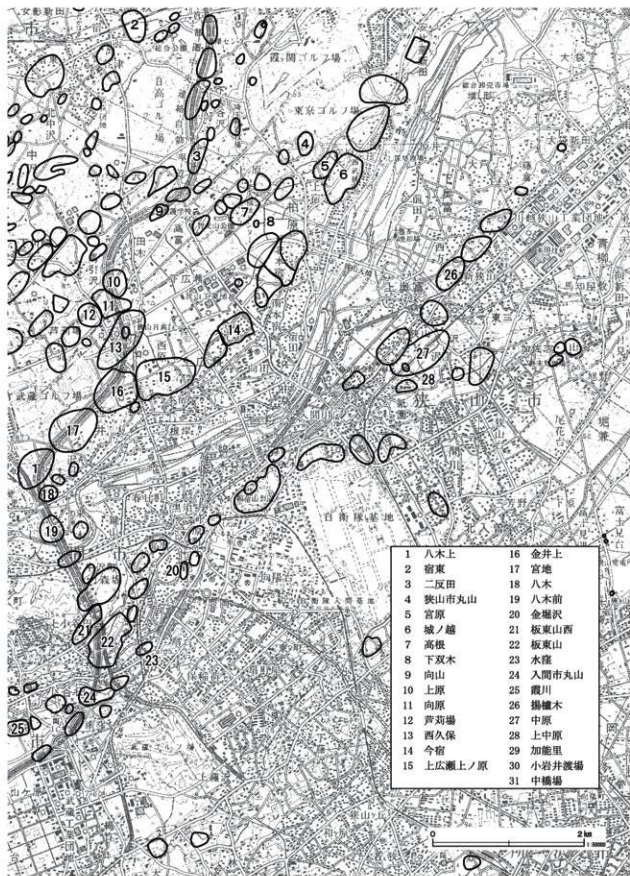
首都圏中央連絡自動車道 (圏央道) 関係の調査においても該期の遺跡は多く、日高市二反田遺跡 (3)、向山遺跡、上原遺跡 (10)、向原遺跡 (11)、入間市丸山遺跡 (24) 等で住居跡が検出されている。

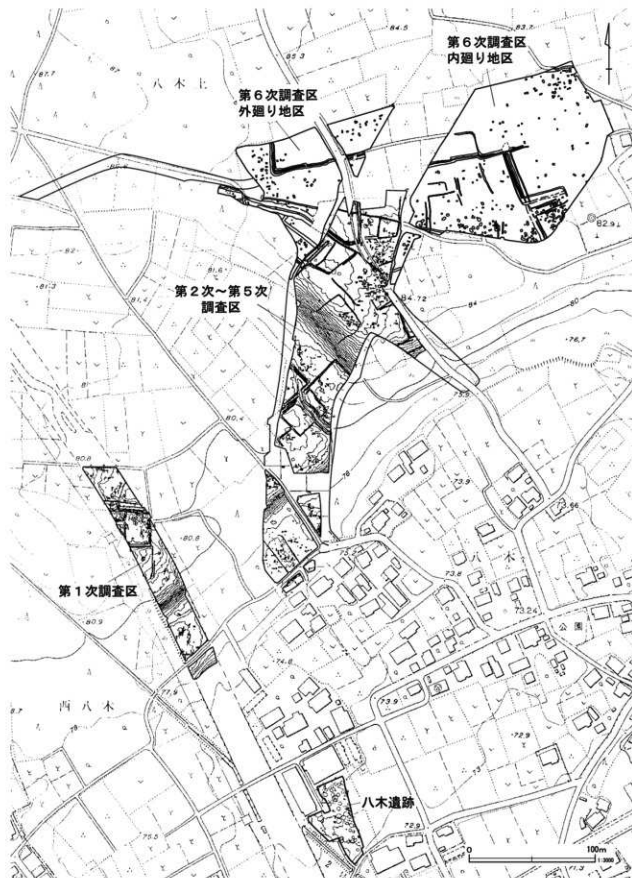
後期・晩期に入ると遺跡の分布が希薄となる。後期では、八木前遺跡で称名寺式期の土坑が 1 基調査された。入間川左岸の高根遺跡では後期初頭～前半の住居跡や埋甕、土坑が調査されている。また、宮原遺跡で堀之内式期の住居跡や埋甕が確認され、加曾利 B 式期の土器が採集されている。入間市坂東山西遺跡では称名寺式期の土器棺墓が検出されている。

晩期では、入間川左岸の飯能市加能里遺跡 (29) で安行 3 a～3 c 式期の集落が検出され、周辺では数少ない調査例となっており、同市中橋場遺跡 (31) も安行式期の遺跡とされている。狭山市内では晩期の遺跡は確認されていないが、入間川左岸の城ノ越遺跡 (6) の平安時代の遺構覆土から安行 2 式の土器の口縁部が確認されており、隣接する宮原遺跡がこの時期まで継続する可能性を示唆している。



第2図 周辺の遺跡





第3図 八木上遺跡の各調査区位置図

Ⅲ 遺跡の概要

八木上遺跡は狭山市笹井に所在し、入間川中流域左岸の河岸段丘上に立地する。今回の発掘調査は第6次調査となるものである。調査区は河岸段丘の上位段丘面と中位段丘面にあたる。標高は、上位面が83～85m、中位面が80m前後で、遺構が検出されたのは上位面のみである。

第1次調査から第5次調査までは既に報告書も刊行されている。

第1次調査は、昭和63年度に一般国道299号線バイパス工事に先立つ調査として実施され、調査面積は4,500㎡である。平成元年度、事業団報告書第91集として刊行されている。

調査区は、河岸段丘の中位段丘面にあたる。検出された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡3軒、縄文時代の土坑10基、中・近世の土坑38基、溝跡14条等であった。住居跡は縄文時代前期中葉の黒浜明のもので、長方形もしくは細長い台形状をしていた。縄文時代の土坑は、2段掘り込みの袋状土坑が1基検出された。

第2次調査から第5次調査は、平成2年度から平成4年度にかけて断続的に実施され、調査面積は26,000㎡である。首都圏中央連絡自動車道（圏央道）建設に伴う発掘調査で、平成7年度に事業団報告書第165集として刊行されている。

河岸段丘の上位段丘面から下位段丘面にかけて調査され、縄文前期の竪穴住居跡6軒、土坑119基等が検出した。また、上位段丘面では縄文時代前期最終期の遺構と十三普提式段階の土器の分布が特定範囲に集中して見られること。中位段丘面では、縄文時代前期の土器は黒式土器が主体であること。下位段丘面では、遺物の全重量は少ないが、諸磯c式土器が主体を占めること、などが確認されている。

第6次調査は、既に開通している首都圏中央連絡自動車道（圏央道）のパーキングエリア建設に

伴う発掘調査で、調査面積は24,900㎡である。

調査区域は、圏央道本線を挟んで東側と西側に分かれており、東側を「内廻り地区」、西側を「外廻り地区」と呼称した。本線部分が第2次～第5次調査区である。

検出された遺構は、縄文時代前期後葉の竪穴住居跡2軒、縄文時代前期の集石土坑5基、土坑26基、近世以降の土坑304基、溝跡46条、性格不明遺構3基、ピット30基である。

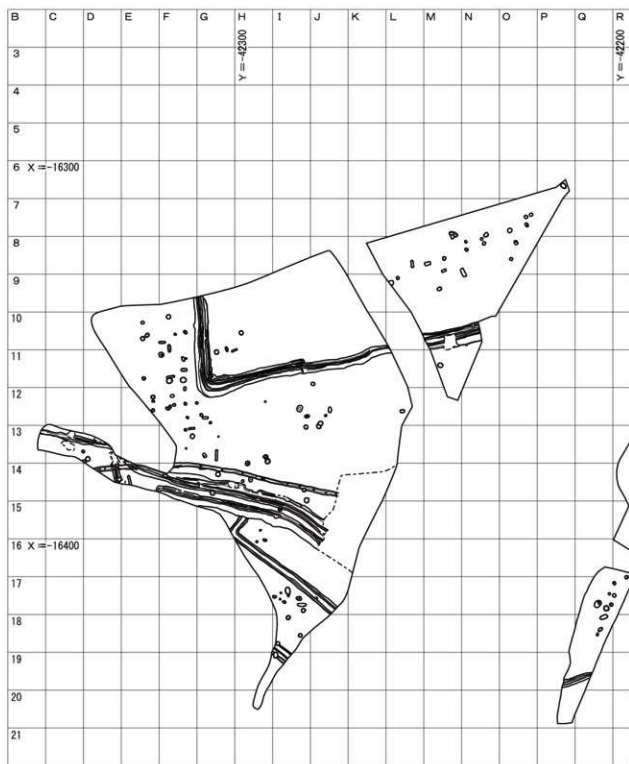
住居跡は、2軒とも内廻り地区で検出された。1軒は調査区の南東端で検出され、全体の約半分が調査された。もう1軒は内廻り地区の南西端近くで検出され、ほぼ全体が明らかとなった。両者の距離は110m以上離れている。

集石土坑は、外廻り地区でのみ検出された。4基がまとまって検出されており、1基は約80m北東に離れて検出された。この内の1基から炭化したクルミが出土している。

縄文時代の土坑は、大半が内廻り地区で検出された。内廻り地区では、南側にその多くが検出されているが、落とし穴状のやや深めの土坑は7基あり、調査区全体に散在している。外廻り地区で検出されたのは1基で、落とし穴状の土坑である。

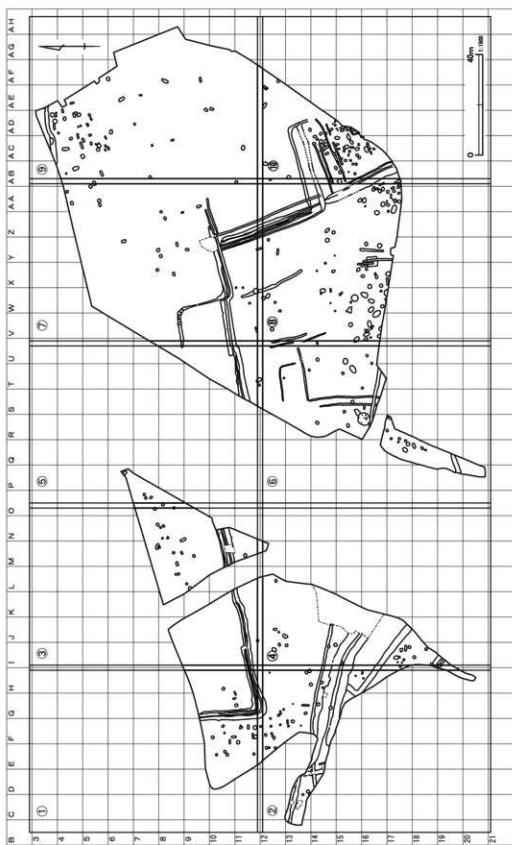
縄文時代以外の土坑は、内廻り地区、外廻り地区共に調査区全体に分布しているが、両地区共にやや中央付近が散漫になる傾向がある。多くの土坑は出土遺物がない。また、縄文土器が出土しているも平面形、覆土の状況や、近世陶器と共に出土するなど、縄文時代の所産とは考えられず、時期を確定できないものが多い。

溝跡は、調査区全体で検出され、大半が区画溝と考えられる。一部の溝跡は、第2次調査区から第5次調査区で検出された溝跡に繋がるものと考えられる。

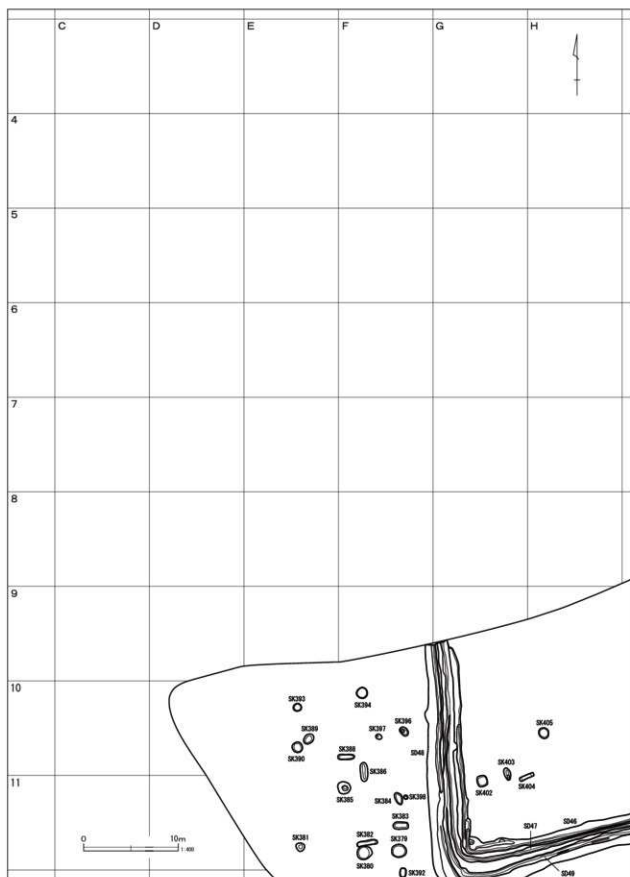


第4図 八木上遺跡全体図

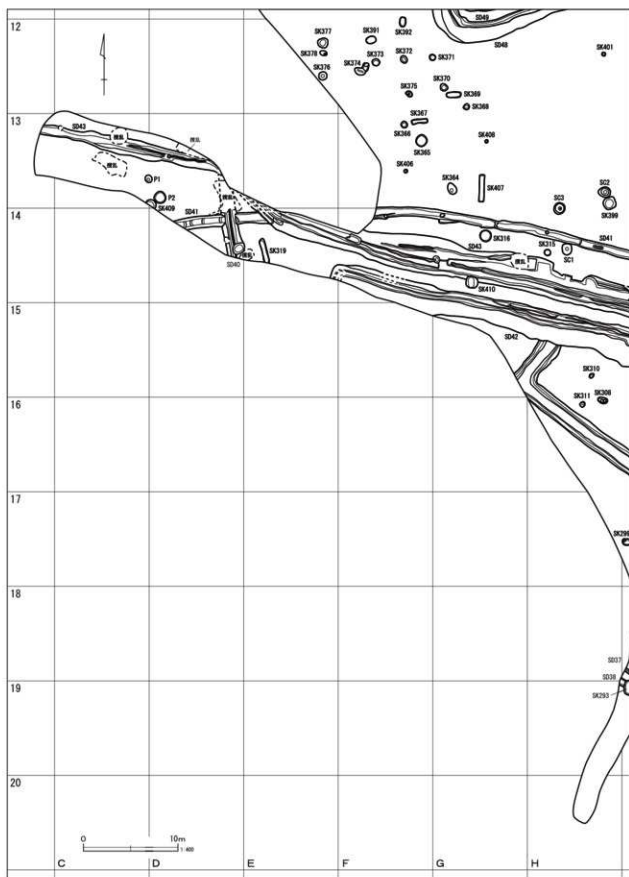




第5図 全体园区割り図



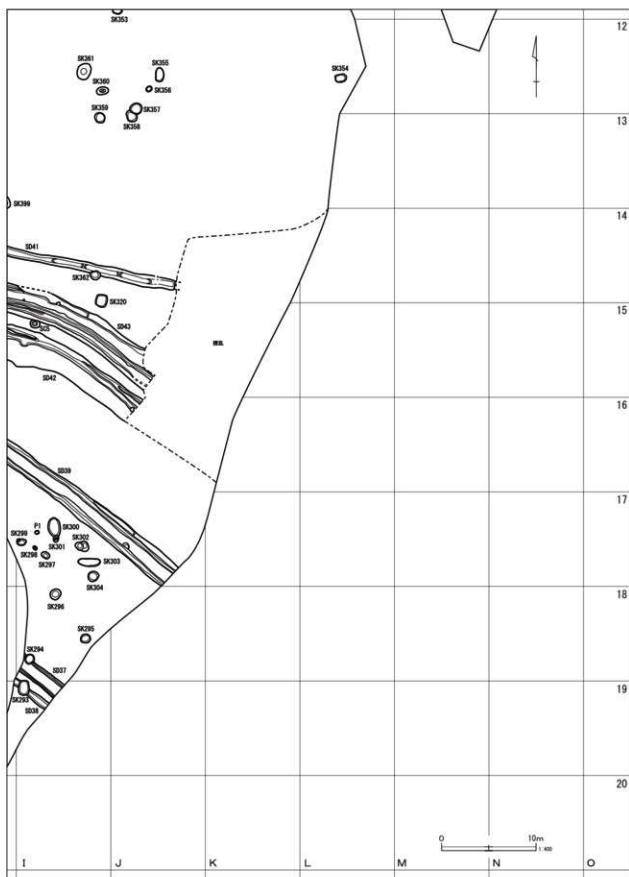
第6图 八木上遺跡全体图(1)



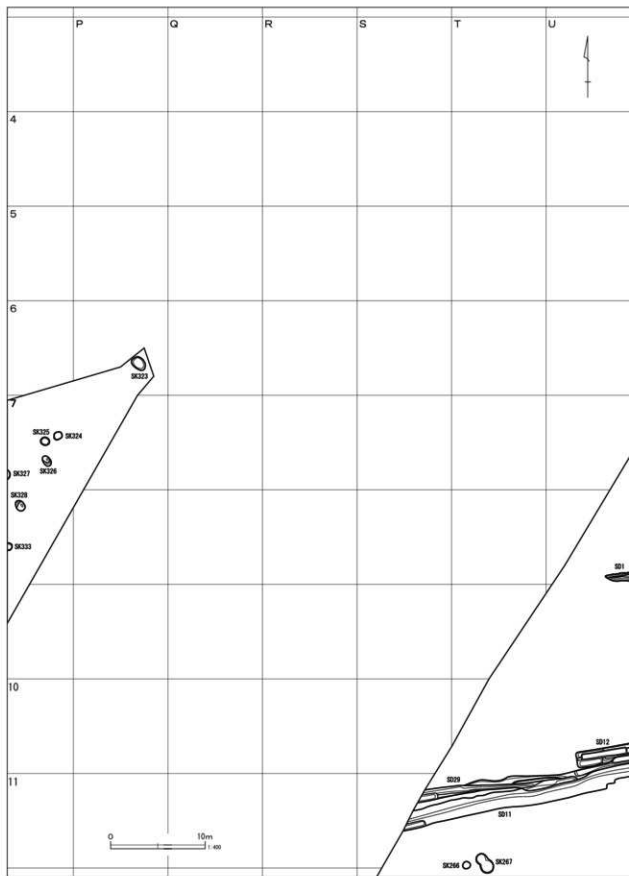
第7图 八木上遺跡全体图(2)



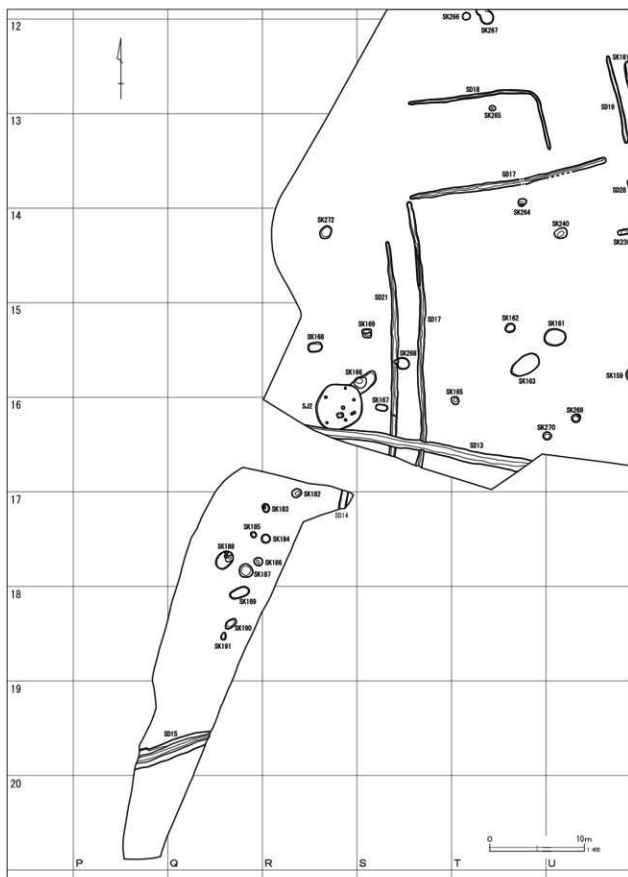
第8図 八木上遺跡全体図(3)



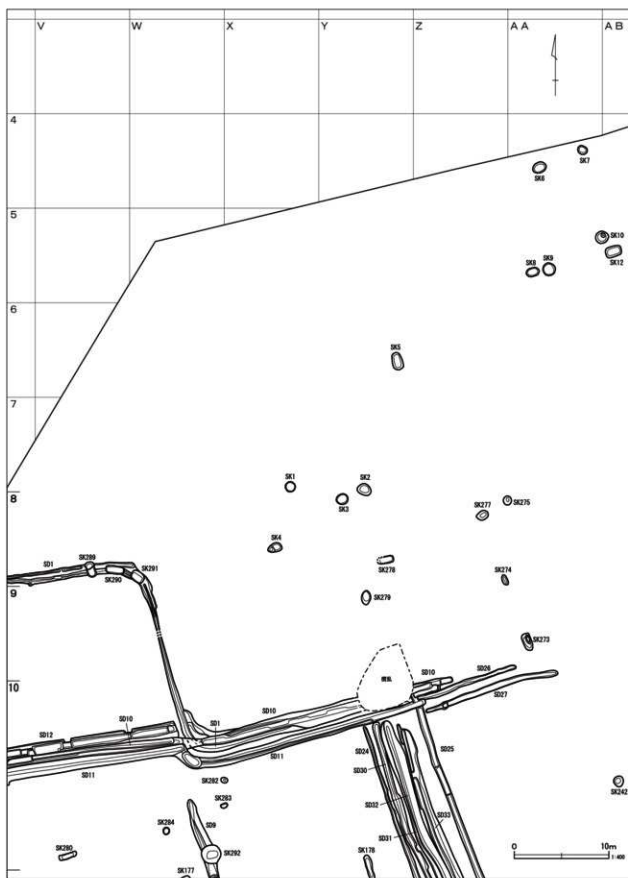
第9図 八木上遺跡全体図(4)



第10図 八木上遺跡全体図（5）



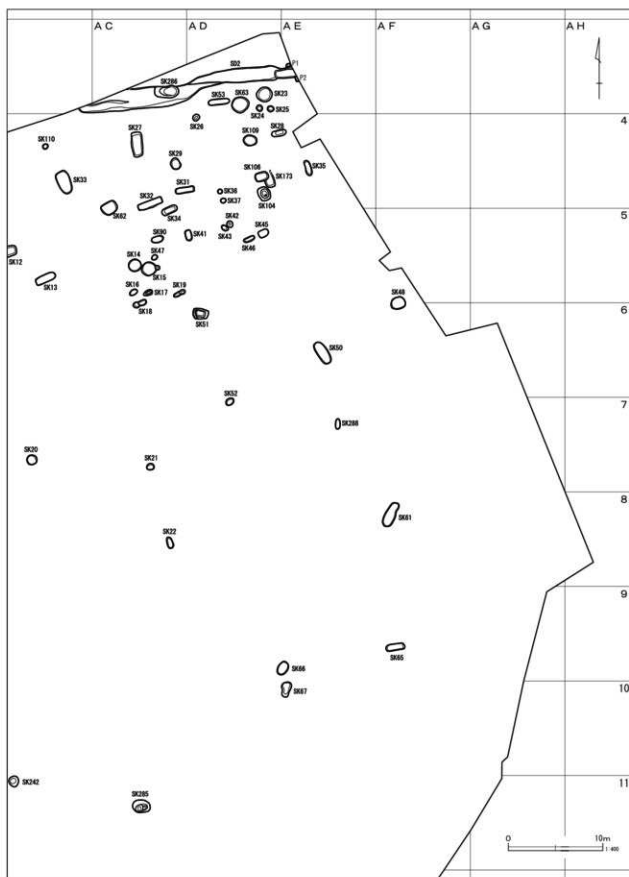
第11图 八木上遺跡全体图(6)



第12図 八木上遺跡全体図（7）



第13図 八木上遺跡全体図(8)



第14図 八木上遺跡全体図(9)



第15图 八木上遺跡全体图 (10)

Ⅳ 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡(第16図)

内廻り地区のAD-15グリッドに位置する。重複する他の遺構はないが、南半は調査区域外にある。平面形は方形あるいは長方形になると考えられる。検出された規模は北壁3.05m、西壁2.82m、確認面からの深さは0.36-0.47mである。カ跡を基準とした主軸方位はN-22°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、西壁近くを除いて床材が認められた(第14層)。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は概ね6層で、自然堆積と考えられる。壁溝は検出された部分では全周し、幅10-23cm、深さ3-13cmである。

カ跡は2箇所検出された。カ跡1は調査区際内にあり、東側を2基のピットで壊され、南側は調査区域外になる。80×100cm程度になると考えられ、深さは3cm前後と浅い。カ跡2は北側中央でP1とP2の中間に位置する。規模は32×38cmで、深さは5cmに満たない。底面中央に焼土が残存していた。

貯蔵穴はカ跡1の西側で検出され、南側は調査区域外である。一辺90cm程度の方形になるのだろうか。深さは84cmである。但し、貯蔵穴としては位置的に不自然であり、土層断面では観察できなかったが、より上層から掘り込まれた土坑の可能性も考えられる。

ピットは4基検出された。深さはP1から順に78cm、60cm、65cm、18cmである。位置的にP1とP2は柱穴になるものと考えられる。P3とP4はカ跡1を壊して掘られ、P3はP1・2と同等の深さである。

遺物は住居跡中央付近と考えられるカ跡1周辺から多く出土した。しかし、全体の形が判明するものはなく、すべて小破片である。

第1号住居跡出土遺物

土器(第17図1-39)

出土土器は、前期後半の竹管文系土器が主体であるが、1は1点のみ確認できた黒浜式土器である。2以下が竹管文系で、2・3は幅広い口縁部文様帯に櫛状工具で山形文、あるいは肋骨文を描く。

これに対し、4-15は爪形文を施文する破片である。すべての構成を類推できるものはないが、大波状縁を伴う無文地の口縁部に曲線を主体とする爪形文が展開する5・9・10などや、直線の展開で終始するらしい6、地文縄文が入り込む13・14などがある。

同じ縄文地であるが、16・17・19などは、竹管による平行沈線のみで施文するもの、20-22は浮線文を貼付している。また、18は、胴中に鋭い屈曲をもつ鉢形土器で、口縁部には磨消を伴う木の葉文を展開させている。

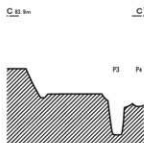
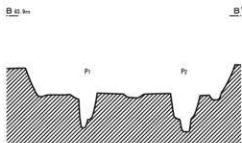
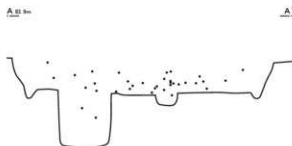
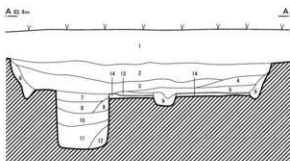
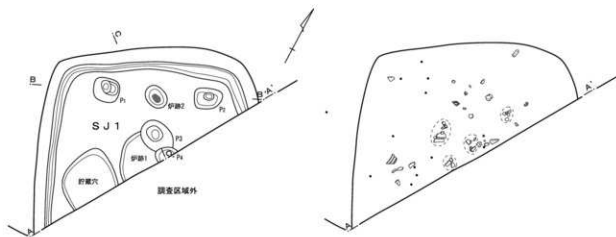
23-39は縄文のみが観察できるものであるが、一部は上記器種の胴部となる可能性もある。25-32は単節縄文RLを施文しているが、32は底部近くで斜位施文に転じているため、条が縦に走る。

一方、33-39は、単節縄文LRを押捺するものである。このうち、35・36は1段2条で施文原体を製作しており、附加条縄文のようにみえる。

石器(第21図1・2)

1はチャート製の石鏃である。薄手の剥片の周辺部に僅かに調整加工を施されており、基部に浅い抉りをもつ。

2は台石である。半分を欠損する。扁平鏢の平坦面に僅かに磨跡がみられ、石皿として機能していた可能性もある。

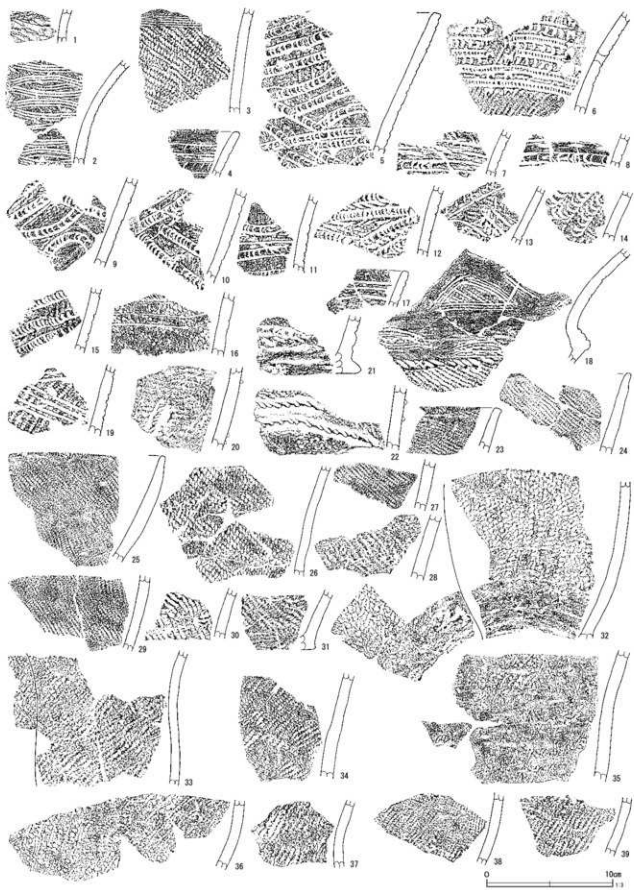


第1号住居跡

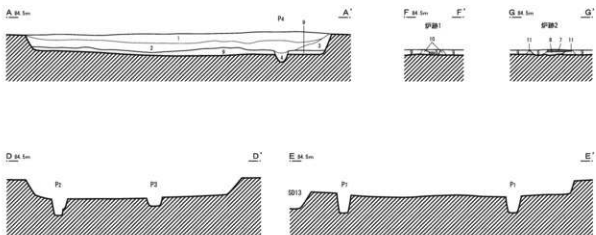
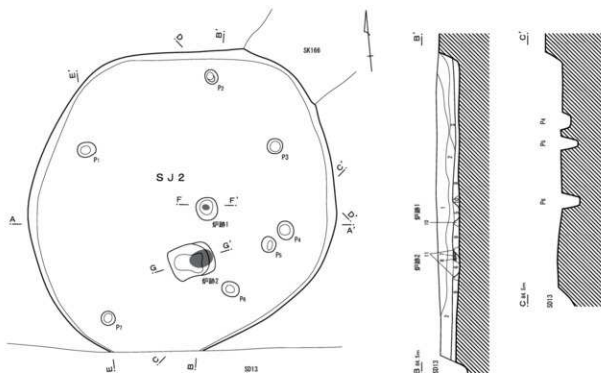
- 1 黄土層 表土層
- 2 赤褐色土 ローム粒子やや多量 炭化物少量 焼土粒子微量 しまり強
- 3 赤褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量 しまり極強
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量粒径大 炭化物微量 しまり強
- 5 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック しまり弱
- 6 暗褐色土 硬砂層土 ローム主体層 しまり弱
- 7 赤褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量 しまり極強
- 8 赤褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・炭化物 しまり強
- 9 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・ローム粒子・ロームブロック しまり強
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック現状 有機質由来の黒色炭灰 しまり強
- 11 赤色土 ローム粒子・ロームブロック多量 有機質由来の黒色 しまり弱
- 12 暗褐色土 硬砂層土 ローム粒子・ロームブロック主体 黒色土混入 しまり強
- 13 赤褐色土 伊壁土 焼土粒子多量 ローム粒子少量 しまり極強
- 14 暗褐色土 粘土 ロームブロック主体層 焼土ブロック しまり強



第16図 第1号住居跡



第17图 第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡

- 1 黄褐色土 ローム粒子少量 炭化物散在 しまり強
- 2 緑褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量 しまり強
- 3 緑褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック混入 部分等に硬質層
- 4 褐色土 ローム粒子多量 炭化物散在 しまり強
- 5 褐色土 焼土粒子・焼土ブロック (砂礫)
- 6 褐色土 焼土粒子 しまり強 (砂礫)
- 7 黄褐色土 硬質粘土層
- 8 褐色土 焼土粒子・灰白色の硬質ローム 砂の混り方
- 9 緑褐色土 自然凝結 ローム粒子・ロームブロック多量 しまり強 割れ有り
- 10 褐色土 ローム粒子散在 砂礫の一部
- 11 黄褐色土 焼土粒子少量 焼土ブロック混入 砂を相成時の最下部の黄褐色土 粘状土の一部

0 2 m

第18図 第2号住居跡

第2号住居跡 (第18・19図)

内廻り地区のR-15・16、S-15・16グリッドに位置する。第166号土坑、第13号溝跡と重複し、その何れよりも古い。平面形は隅丸の歪んだ五角形に近い。規模は、東西4.92m、南北は南端を第13号溝跡に壊されており4.75m検出された。確認面からの深さは0.22~0.32mである。

床面には起伏があり、全体に貼床が観察された(第9層)。壁は開きながら立ち上がる。覆土は概ね3層で自然堆積と考えられる。

竈跡は2箇所検出された。竈跡1は住居跡中央よりやや東側にあり、33×38cmの円形で、深さは9cmである。底面中央に焼土が残存していた。竈跡2は竈跡1の南に位置し、52×70cmの隅丸長方形で、深さは10cmである。底面の東寄りに焼土が残存していた。竈跡1・2共に貼床構築時、土を

ドーナツ状に盛り上げて竈の周囲を囲んでいるのが観察された(第10・11層)。

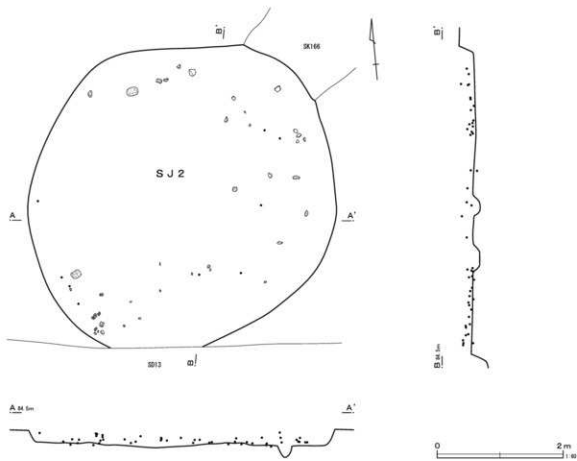
ピットは7基検出された。深さはP1から順に26cm、25cm、12cm、20cm、27cm、30cm、31cmである。位置的にP1~3とP6・7の5本柱穴あるいはP2を除いた4本柱穴になるものと考えられる。

遺物は住居跡中央からの出土は少なく、周囲からが大半である。出土量は少量で、すべて小破片である。

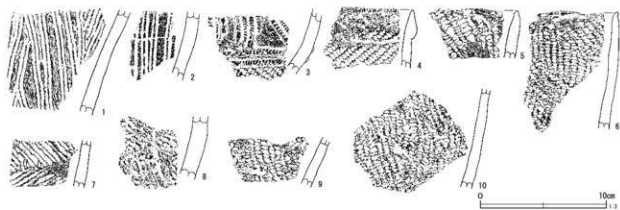
第2号住居跡出土遺物

土器 (第20図1~10)

遺物の出土数は少ないが、前期後葉の土器がまとまって検出されている。1~3が有文の破片であるが、1・2は緩い弧状、あるいは縦位の集合沈線を展開させるものである。沈線は、集合沈線としてはためて、全面にこれが展開するものと考



第19図 第2号住居跡遺物出土状況



第20図 第2号住居跡出土遺物

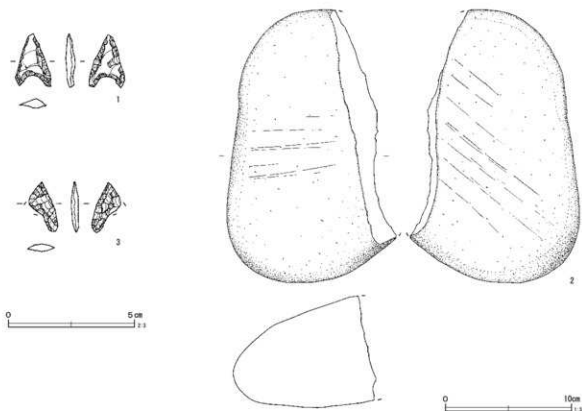
えられる。また、3は結節浮線文が並列して施されている。下位に縄文が見えることから、鉢形器形の胴中位と判断できる。

これに対し、4～10は縄文のみが残るもので、7・8が無節斜縄文、その他が単節斜縄文を施文している。口縁肥厚帯直下の4、そして羽状をする7は整然とした横位施文であるが、他の個体は

条が縦位に並ぶよう、RLの原体を斜位に施文している。

石器 (第21図3)

3は、黒曜石製の石鏃である。脚部が片方欠損する。基部の挟りは深く、入念な押し剥離を行っている。



第21図 第1・2号住居跡出土石器

第1表 第1・2号住居跡出土石器観察表 (第21図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.4	0.6	SJ 1 №15
2	台石	砂岩	21.6	(13.3)	8.8	3296.2	SJ 1 №13
3	石鏃	黒曜石	2.0	(1.2)	0.3	0.4	SJ 2 №6

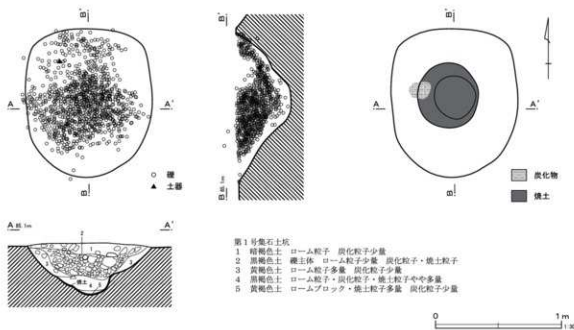
2. 集石土坑

第1号集石土坑 (第22図)

外廻り地区のH-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.17m、短径0.98m、深さは0.42mである。壁面中位に緩やかな段を持ち、段以下の壁面は焼土化し、炭化物が検出された。礫

は覆土下層と壁面近くには少なく、中央部に密集する。礫の総重量は69.6kgで、砂岩とチャートがほぼ半数ずつを占める。

僅かに縄文土器の極小片が出土した。



第22図 第1号集石土坑

第2表 第1号集石土坑石材別重量組成表

石材	赤化 (kg)	黒色付着物 (kg)	赤化・黒色付着物両方有 (kg)	赤化・黒色付着物 無 (kg)	合計 (kg/%)
砂岩	3.77	1.37	0	27.00	32.14/46.2
チャート	0.64	1.86	0	34.26	36.76/52.8
ホルンフェルス	0	0	0	0.20	0.20/0.3
安山岩	0.11	0	0	0.39	0.50/0.7
合計 (kg/%)	4.52/6.5	3.23/4.6	0/0	61.85/88.9	69.60/100

第2号集石土坑 (第23図)

外廻り地区のH-13グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.29m、短径1.09m、深さは0.35mである。壁面中位に緩やかな段を持って

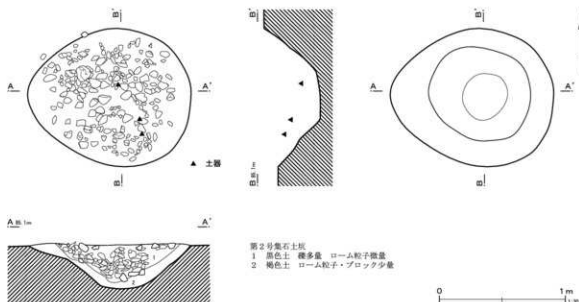
る。覆土は2層に分けられ、礫は上層に集中し、下層には含まれない。礫の総重量は86.14kgで、砂岩とチャートがほぼ半数ずつを占める。

僅かに縄文土器が出土した。

第2号集石土坑出土土器 (第28図1)

図示できたのは1点のみである。1は、竹管による刺突文を、破片の範囲内では、くの字に並列

施文している。胎土は前期後葉の破片に類似しており、この刺突が全面に施され、上位で幾何文を描くと考えられる。



第23図 第2号集石土坑

第3表 第2号集石土坑石材別重量組成表

石材	赤化 (kg)	黒色付着物 (kg)	赤化・黒色付着物両方有 (kg)	赤化・黒色付着物 無	合計 (kg/%)
砂岩	5.53	2.06	0.45	36.97	45.01/52.3
チャート	1.80	1.15	0	37.59	40.54/47.0
ホルンフェルス	0	0	0	0.32	0.32/0.4
安山岩	0.12	0	0	0.15	0.27/0.3
合計 (kg/%)	7.45/8.7	3.21/3.7	0.45/0.5	75.03/87.1	86.14/100

第3号集石土坑 (第25図)

外廻り地区のH-13・14グリッドに位置する。平面形は円形で、長径1.25m、短径1.15m、深さは0.37mである。壁面上位に緩やかな段を持ち、底面の中心部は浅い小ピット状になっている。覆土最下層は炭化物層となっており、その層から炭化したクルミや縄文土器片、炭化材が検出された。礫は第1層の中央部に集中する傾向が窺える。最下層には親指大の小礫が含まれていた。礫の総重量は79.21kgで、砂岩の割合が高く約62%を占める。僅かに縄文土器が出土した。

第3号集石土坑出土土器 (第28図2・3)

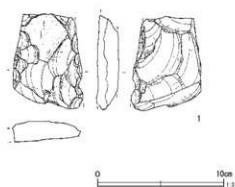
縄文施文の同一個体2点のみが図示できた。口縁部片である2の存在から、無節RとLの結束羽状縄文が全面に施される個体と考えられる。

第4号集石土坑 (第26図)

外廻り地区のN-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.91m、短径0.77m、深さは0.27mである。覆土は2層に分けられ、礫は上層に集中するが、少量だが下層にも見られる。上層下面から炭化物が、底面にやや大形の礫が検出された。礫の総重量は43.33kgで、やや少なめであ

る。砂岩が60%を占めている。

打製石斧が1点出土した。



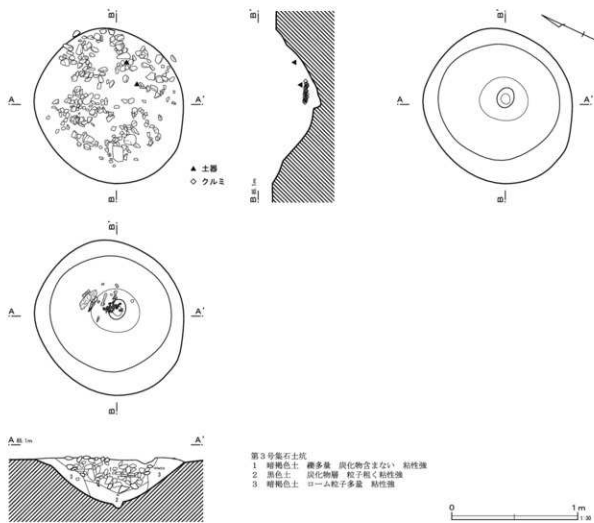
第24図 第4号集石土坑出土石器

第4号集石土坑出土石器 (第24図1)

第4号集石土坑出土の打製石斧である。石材は黒色頁岩を用い、上下端と左半分が欠損しているが、折れ面を刃部として再利用した痕跡がみえる。

第5号集石土坑 (第27図)

外廻り地区の1-15グリッドに位置する。北側を第43号溝跡に壊されている。平面形は楕円形である。長径1.02mで、短径は0.81m検出したが0.9m程度と思われる。深さは0.28mである。壁面中位に段を持っている。礫は覆土上層に集中する。礫の総重量は79.64kgで、砂岩の割合が約72%と高い。土器、石器は出土しなかった。

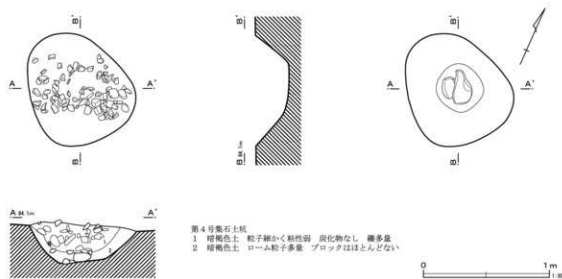


第25図 第3号集石土坑

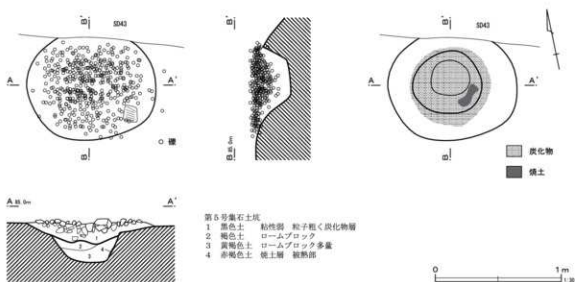
- 第3号集石土坑
- 1 暗褐色土 礫多量 炭化物含まない 粘性強
 - 2 黒色土 炭化物層 粒子粗く粘性強
 - 3 暗褐色土 コーム粒子多量 粘性強

第4表 第3号集石土坑石材別重量組成表

石材	赤化 (kg)	黒色付着物 (kg)	赤化・黒色付着物両方有 (kg)	赤化・黒色付着物 無 (kg)	合計 (kg/%)
砂岩	1.27	0.96	0	46.96	49.19/62.1
チャート	0.49	1.11	0	25.94	27.54/34.8
ホルンフェルス	0	0	0	0.88	0.88/1.1
安山岩	0	0	0	1.60	1.60/2.0
合計 (kg/%)	1.76/2.2	2.07/2.6	0/0	75.38/95.2	79.21/100



第26図 第4号集石土坑



第27図 第5号集石土坑

第5表 第4号集石土坑出土石器観察表 (第24図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	打製石斧	黒色頁岩	(7.6)	(5.4)	1.8	91.4	SC4

第6表 第4号集石土坑石材別重量組成表

石材	赤化 (kg)	黒色付着物 (kg)	赤化・黒色付着物両方有 (kg)	赤化・黒色付着物 無 (kg)	合計 (kg/%)
砂岩	3.64	4.10	4.63	13.78	26.15/60.4
チャート	2.19	0.83	0.95	12.43	16.40/37.8
ホルンフェルス	0	0	0	0.78	0.78/1.8
安山岩	0	0	0	0	0/0
合計 (kg/%)	5.83/13.4	4.93/11.4	5.58/12.9	26.99/62.3	43.33/100

第7表 第5号集石土坑石材別重量組成表

石材	赤化 (kg)	黒色付着物 (kg)	赤化・黒色付着物両方有 (kg)	赤化・黒色付着物 無 (kg)	合計 (kg/%)
砂岩	2.38	2.14	0	52.43	56.95/71.5
チャート	0.72	0.29	0	20.45	21.46/26.9
ホルンフェルス	0.19	0.12	0	0.92	1.23/1.6
安山岩	0	0	0	0	0/0
合計 (kg/%)	3.29/4.1	2.55/3.2	0/0	73.80/92.7	79.64/100

3. 土坑

土坑は発掘調査時、内廻り地区で292基、外廻り地区で118基に遺構番号が付けられ、それぞれの地区が第1号土坑から開始していた。整理作業時に改めて土坑の番号を付ける際に、内廻り地区は発掘調査時に付けられた土坑番号をそのまま使用し、続けて外廻り地区の土坑に新たな番号を付けた。ただし混乱を避けるため、外廻り地区の土坑の順字は変更せず、両地区共に欠番はそのままとした。したがって、第1号土坑から第292号土坑は内廻り地区で検出されたもので、第293号土坑以降は外廻り地区で検出された土坑である。

出土遺物は少なく、縄文土器と陶磁器類の小さな破片が大半である。遺構の状況から混入も多いと思われる。

第1号土坑 (第29図)

X-7グリッドに位置する。平面形は直径1.08mの円形で、深さは0.08mと浅い。遺物は、縄文土器の極小片が1点出土した。

第2号土坑 (第29図)

Y-7・8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.52m、短径1.20m、深さは0.21mである。長軸方位はN-80°-Wを指す。遺物は縄文土器の極小片が2点出土した。

第3号土坑 (第29図)

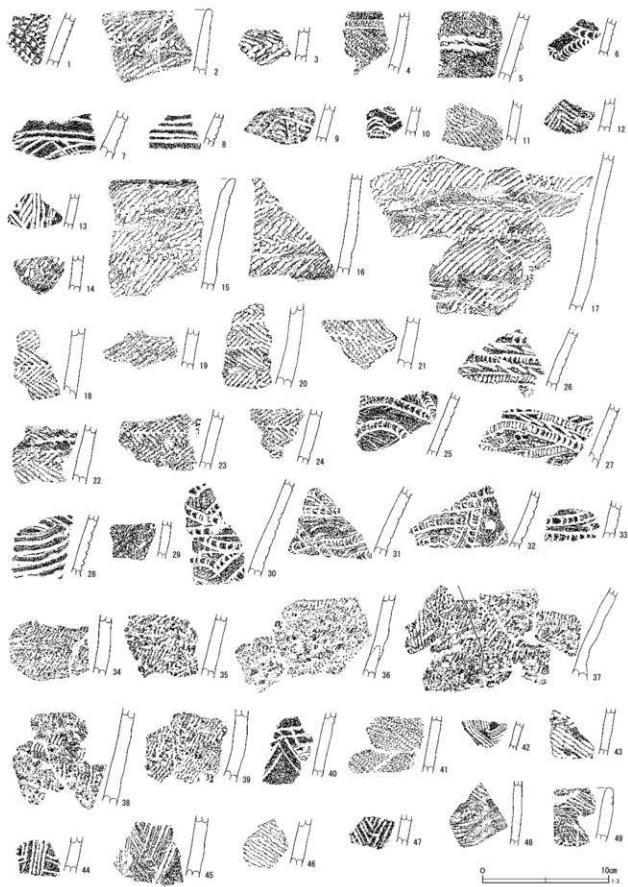
Y-8グリッドに位置する。平面形は直径1.28mの円形で、深さは0.12mである。遺物は須恵器塚の口縁端部小片が1点出土した。

第4号土坑 (第29図)

X-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.56m、短径0.94mである。西側がビット状に深くなっており、深さは0.09~0.24mである。長軸方位はN-76°-Eを指す。遺物は須恵器環と思われる極小片が2点出土した。

第5号土坑 (第29図)

Y-6グリッドに位置する。平面形は隅丸長方



第28图 集石土坑·土坑出土遺物

形で、長軸1.86m、短軸1.08m、深さは0.73mである。長軸方位はN-10°-Wを指す。覆土は5層に分かれ、全体にロームブロックやローム粒子を含んでいた。遺物は縄文土器が1点出土した。落とし穴状の土坑で、形態や出土遺物から縄文時代の所産と考えられる。

第5号土坑出土土器 (第28図4)

下位縄文施文の爪形文系土器の小片が図示できたのみである。

第6号土坑 (第29図)

AA-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.48m、短径1.10m、深さは0.14mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。遺物は縄文土器小片が1点出土した。

第7号土坑 (第29図)

AA-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.05m、短径0.90m、深さは0.30mである。長軸方位はN-72°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第8号土坑 (第29図)

AA-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.42m、短径0.90m、深さは0.15mである。長軸方位はN-76°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第9号土坑 (第29図)

AA-5グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.34m、深さは0.24mである。遺物は出土しなかった。

第10号土坑 (第29図)

AA・AB-5グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.32m、北側がピット状になっていた。深さは0.30mで、ピットの深さは底面から12cmで

ある。遺物は出土しなかった。

第11号土坑 欠番

第12号土坑 (第29図)

AB-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.72m、短軸1.12m、深さは0.21mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第13号土坑 (第29図)

AB-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.24m、短軸0.80m、深さは0.25mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第14号土坑 (第29図)

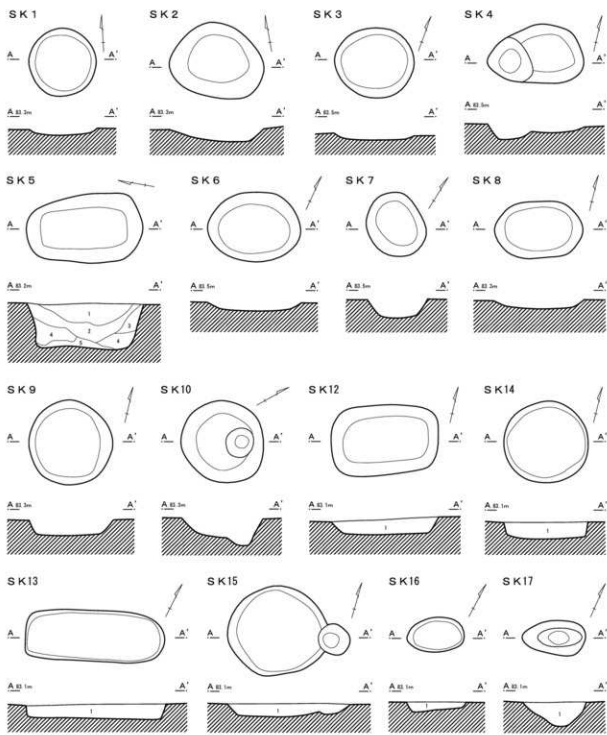
AC-5グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.36m、深さは0.26mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第15号土坑 (第29図)

AC-5グリッドに位置する。平面形は直径1.45mの円形の土坑の東端にピットが付く形となっている。深さは0.20mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第16号土坑 (第29図)

AC-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.92m、短径0.56m、深さは0.16mである。長軸方位はN-62°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は縄文土器の極小片が2点出土した。



- 第5号土坑
 1 灰褐色土 ローム粒子やや多量 ロームブロック微量
 2 褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子極微量
 3 赤褐色土 ローム粒子多量
 4 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子多量
 5 黄褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子極多量

- 第12号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり面

- 第13号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり面

- 第14号土坑
 1 灰褐色土 ロームブロック多量 しまり面

- 第15号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり面

- 第16号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり面

- 第17号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり面

第29図 土坑(1)

第17号土坑 (第29図)

AC-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、中に緩やかな段がある。長径1.02m、短径0.55m、深さは0.39mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第18号土坑 (第30図)

AC-5・6グリッドに位置する。平面形は楕円形の土坑が2基重なったような形だが、断面観察では2基と判断できなかった。長軸1.50m、短軸0.62m、深さは0.14~0.18mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第19号土坑 (第30図)

AC-5グリッドに位置する。楕円形の土坑とピットが重なったような形で、長軸1.34m、短軸0.50m、深さは0.11~0.32mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第20号土坑 (第30図)

AB-7グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.10m、深さは0.13mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第21号土坑 (第30図)

AC-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.82m、短径0.70m、深さは0.18mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第22号土坑 (第30図)

AC-8グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、長軸1.24m、短軸0.64m、深さは0.09mである。長軸方位はN-29°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第23号土坑 (第30図)

AD-3グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.68m、深さは0.41mである。覆土は3層で、全体にロームブロックを含んでいた。遺物は出土しなかった。

第24号土坑 (第30図)

AD-3グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ円形で、直径0.68m、深さは0.10mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第25号土坑 (第30図)

AD-3グリッドの第24号土坑の東側に位置する。平面形はやや歪んだ円形で、直径0.70m、深さは0.09mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第26号土坑 (第30図)

AD-4グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径0.78m、短径0.64m、深さは0.13mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第27号土坑 (第30図)

AC-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸2.68m、短軸1.18m、深さは0.55mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。

遺物は出土しなかった。

第28号土坑 (第30図)

AD・AE-4グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.60m、短軸0.64m、深さは0.20mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第29号土坑 (第30図)

AC-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.28m、短径0.94m、深さは0.37mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第30号土坑 欠番

第31号土坑 (第30図)

AC・AD-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸2.02m、短軸0.62m、深さは0.50mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第32号土坑 (第30図)

AC-4・5グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸2.72m、短軸0.80m、深さは0.59mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。縄文土器の極小片2点と近世の陶磁器小片が1点、鉄釘片1点(第53図2)が出土した。

第33号土坑 (第30図)

AB-4グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.50m、短軸1.38m、深さは0.06mと浅い。長軸方位はN-23°-Wを指す。覆土は暗

褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第34号土坑 (第31図)

AC-4・5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.72m、短軸0.72m、深さは0.34mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第35号土坑 (第31図)

AE-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.68m、短径0.64m、深さは0.17mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第36号土坑 (第31図)

AD-4グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.48m、深さは0.61mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

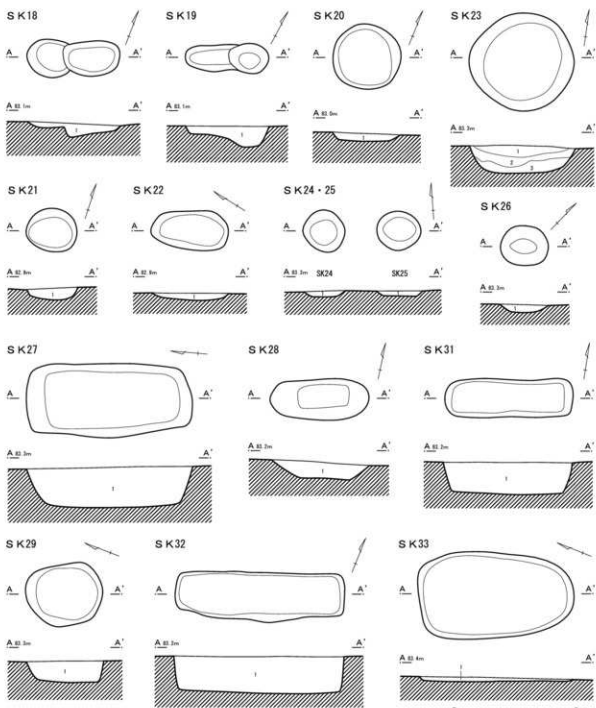
第37号土坑 (第31図)

AD-4グリッドの第36号土坑の南側に位置する。平面形は円形で、直径0.58m、深さは0.61mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第38～40号土坑 欠番

第41号土坑 (第31図)

AC・AD-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.18m、短軸0.68m、深さは0.10mである。長軸方位はN-13°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

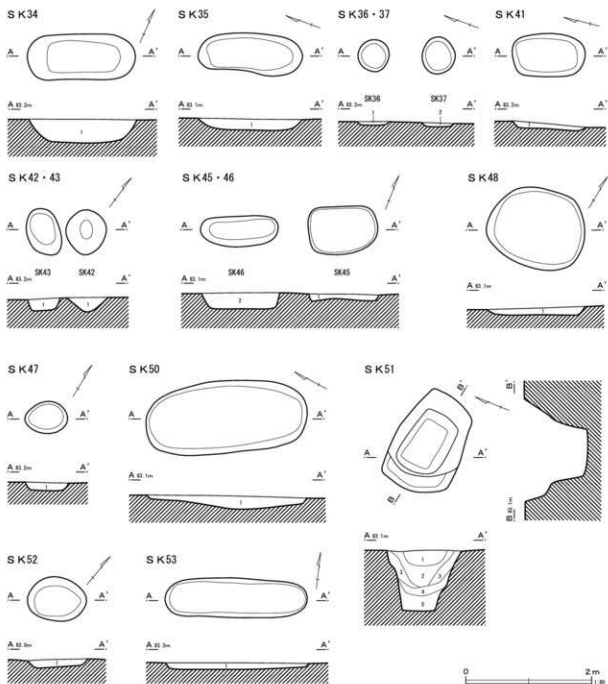


- 第18号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第19号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第20号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第21号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第22号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

- 第23号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
2 暗褐色土 ロームブロック主体 1層が混じる
3 黒褐色土 1層と似た ロームブロック(φ2cm)
- 第24・25号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第26号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第27号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第28号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

- 第29号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第31号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第32号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第33号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり強く固い
やや明るい色調

第30図 土坑(2)



- 第34号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第35号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第36・37号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
2 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第41号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第42・43号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

- 第45・46号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
2 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第47号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第48号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第50号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

- 第51号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり弱
2 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
白色粒子多量 しまり強
3 褐色土 硬質礫土 ロームブロック
しまり弱
4 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土多量
しまり強
5 黄褐色土 ローム主体 ロームブロック
しまり強
- 第52号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第53号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

第31図 土坑 (3)

第42号土坑 (第31図)

AD-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.70m、短径0.64m、深さは0.22mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は近世あるいは近代と思われる磁器小片が1点出土した。

第43号土坑 (第31図)

AD-5グリッドの第42号土坑の西側に位置する。平面形は楕円形で、長径0.78m、短径0.52m、深さは0.17mである。長軸方位はN-60°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第44号土坑 欠番

第45号土坑 (第31図)

AD-5グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.12m、短軸0.72m、深さは0.08mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第46号土坑 (第31図)

AD-5グリッドの第45号土坑の西側に位置する。平面形は楕円形で、長径1.24m、短径0.48m、深さは0.26mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第47号土坑 (第31図)

AC-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.68m、短径0.50m、深さは0.13mである。長軸方位はN-59°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は土師器甕の胴部小片1点、須恵器杯の極小

片が2点出土した。

第48号土坑 (第31図)

AF-5・6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.55m、短径1.28m、深さは0.67mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第49号土坑 欠番

第50号土坑 (第31図)

AE-6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.60m、短径1.14m、深さは0.17mである。長軸方位はN-36°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第51号土坑 (第31図)

AD-6グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ長方形で、中に段を持っている。長軸1.64m、短軸1.16m、深さは0.98mである。長軸方位はN-81°-Wを指す。覆土は大きく5層に分けられる。遺物は出土しなかったが、落とシ穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第52号土坑 (第31図)

AD-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.98m、短径0.70m、深さは0.11mである。長軸方位はN-51°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第53号土坑 (第31図)

AD-3グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.28m、短軸0.62m、深さは0.12mである。長軸方位はN-81°-Eを指す。覆土は暗

褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第54～60号土坑 欠番

第61号土坑 (第32図)

AF-8グリッドに位置する。平面形は歪んだ隅丸長方形で、長軸2.80m、短軸1.14m、深さは0.27mである。長軸方位はN-31°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第62号土坑 (第32図)

AC-4・5グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、東西1.70m、南北1.24m、深さは0.21mである。長軸方位はN-59°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第63号土坑 (第32図)

AD-3グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.88m、深さは0.16mである。遺物は出土しなかった。

第64号土坑 欠番

第65号土坑 (第32図)

AF-9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.02m、短軸0.72m、深さは0.25mである。長軸方位はN-82°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第66号土坑 (第32図)

AD・AE-9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.54m、短径1.06m、深さは0.30mである。長軸方位はN-27°-Eを指す。覆土は暗

褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第67号土坑 (第32図)

AE-10グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、長径1.64m、短径1.04m、深さは0.30mである。長軸方位はN-14°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第68・69号土坑 欠番

第70号土坑 (第32図)

AE-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.43m、短径1.02m、深さは0.11mである。長軸方位はN-61°-Wを指す。遺物は縄文土器が出土した。

第70号土坑出土土器 (第28図5)

浮線土器1点を示した。現存する浮線は横位の1本のみであるが、下に間隔をあけてもう1本、上位では禿状に浮線が剥落した痕跡が残る。

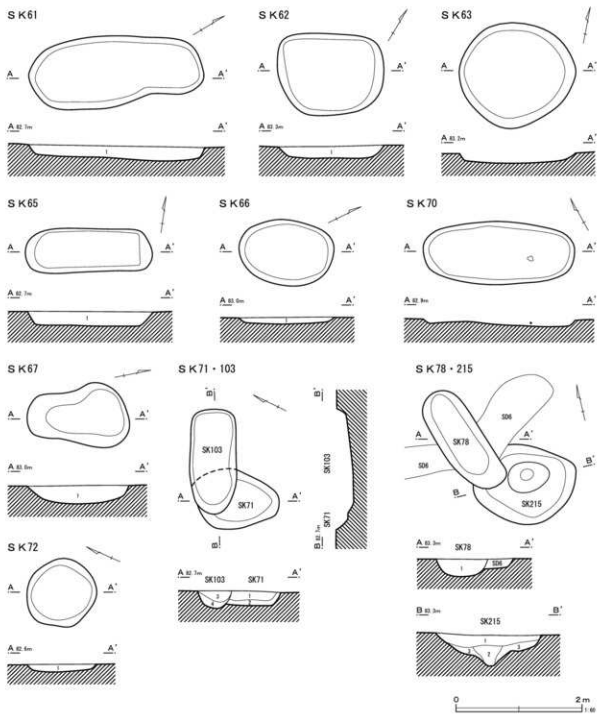
第71号土坑 (第32図)

AE-12グリッドに位置する。北側を第103号土坑によって壊されている。平面形は楕円形と思われる。検出された規模は、長径1.35m、短径0.94m、深さは1.24mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。覆土は2層で、ロームブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

第72号土坑 (第32図)

AF-12グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.12m、深さは0.13mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第73～77号土坑 欠番



- 第61号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり強く固い
やや明るい色調
- 第62号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第65号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第66号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 暗い色調
- 第67号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量 しまり弱

- 第71・103号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック多量
2 黒褐色土 ローム土塊 褐色粒子
3 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
4 褐色土 ロームブロック多量 黒褐色粒子
- 第72号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第78号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第215号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(φ1cm以下) しまりなし
2 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程度)少量 1層にくらべ暗い・硬い
3 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりあり

第32図 土坑(4)

第78号土坑 (第33図)

AC-14グリッドに位置する。第215号土坑、第6号溝跡と重複し、その何れよりも新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸1.80m、短軸0.68m、深さは0.33mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第79号土坑 (第33図)

AB-14・15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.43m、短径0.95m、深さは0.20mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第80号土坑 (第33図)

AB-15グリッドに位置する。平面形は不整形で、東西1.95m、南北1.78m、深さは0.25mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ロームブロックを多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第81～83号土坑 欠番

第84号土坑 (第33図)

AC-15グリッドに位置する。第219号土坑と重複し、本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸1.39m、短軸0.75m、深さは0.48mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。遺物は須恵器甕の頭部かと思われる小片が1点出土した。

第85号土坑 (第33図)

AB・AC-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.96m、短径0.66m、深さは0.20mである。長軸方位はN-22°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第86号土坑 (第33図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は楕円形

で、長径1.75m、短径1.03m、深さは0.18mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。遺物は縄文土器小片が1点出土した。

第87号土坑 欠番

第88号土坑 (第33図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.66m、短径1.17m、深さは0.13mである。長軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第89号土坑 欠番

第90号土坑 (第33図)

AC-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.32m、短径0.69m、深さは0.10mである。長軸方位はN-74°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

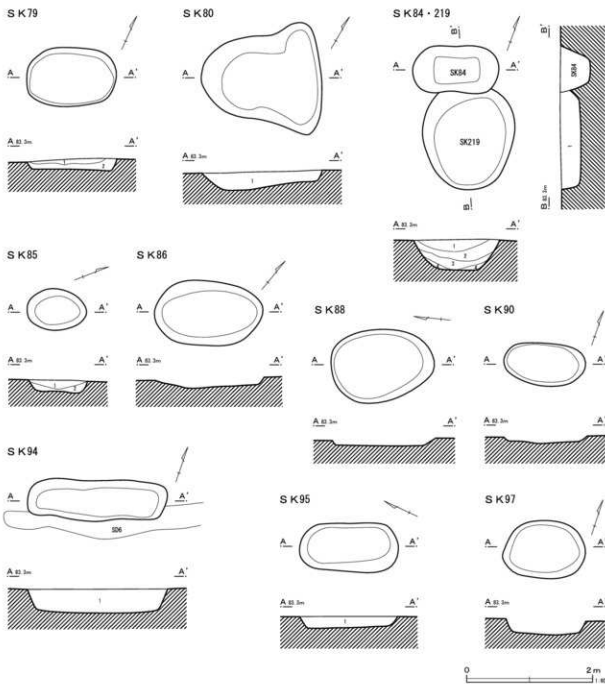
第91～93号土坑 欠番

第94号土坑 (第33図)

AB-14グリッドに位置する。第6号溝跡と重複し、新旧関係は判断できなかった。平面形は隅丸長方形で、長軸2.23m、短軸0.66m、深さは0.39mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第95号土坑 (第33図)

AC-14グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.59m、短軸0.78m、深さは0.17mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は、近世と思われる陶器片と炭化物が出土した。



- 第79号土坑
 1 黄褐色土 ローム粒子少量 しまり弱
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 暗褐色土やや多量 しまり弱
- 第80号土坑
 1 原褐色土 ロームブロック多量 しまり弱
- 第84号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子・ブロック(φ2~5mm)多量
 2 暗褐色土 ローム粒子・ブロック(φ2~5mm)やや多量
 3 暗褐色土 1層より上面に少量の暗く硬い砂層
 4 暗褐色土 ローム粒子・ブロック主体 原褐色土
 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 第219号土坑
 1 暗褐色土 褐色土との混土 ローム粒子多量 しまり・粘性強

- 第86号土坑
 1 黄褐色土 ローム粒子少量 しまり弱
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 暗褐色土やや多量 しまり弱
- 第84号土坑
 1 原褐色土 ローム粒子少量 やわら5%~
- 第85号土坑
 1 原褐色土 ローム粒子少量 やわら5%~

第33期 土坑(5)

第96号土坑 (第34図)

AD-15グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.74m、短軸0.68m、深さは0.38mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。覆土は2層で、ロームブロック、ローム粒子を多量に含んでいる。遺物は鉄製の釘片が出土した(第53図3)。

第97号土坑 (第33図)

AD-13・14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.32m、短径0.92m、深さは0.21mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。縄文土器片が出土した。

第97号土坑出土土器 (第28図6)

出土土器は少なく、爪形文系統の個体小片1点を示せたにすぎない。

第98号土坑 (第34図)

AC・AD-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.54m、短径0.90m、深さは0.23mである。長軸方位はN-6°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。縄文土器が出土した。

第98号土坑出土土器 (第28図7)

竹管平行沈線による鋸歯状文で口縁部文様帯を形成する個体と考えられる。

第99号土坑 (第34図)

AC-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.94m、短径0.66m、深さは0.14mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。縄文土器が3点出土した。

第100号土坑 (第34図)

AC-14グリッドに位置する。第5号溝跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は楕円形で、長径1.24m、短径1.04m、深さは0.23mである。長軸方

位はN-8°-Wを指す。遺物は縄文土器が5点出土した。

第100号土坑出土土器 (第28図8)

竹管による平行沈線のみが残る破片であるが、施文は深く、管内痕が認められることから、竹管文系でも前半に相当すると思われる。

第101号土坑 (第34図)

AD-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.56m、短径0.84m、深さは0.44mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

第102号土坑 (第34図)

AC・AD-15グリッドに位置する。平面形は不整形で、東西2.44m、南北1.10m、深さは0.43mである。長軸方位はN-74°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

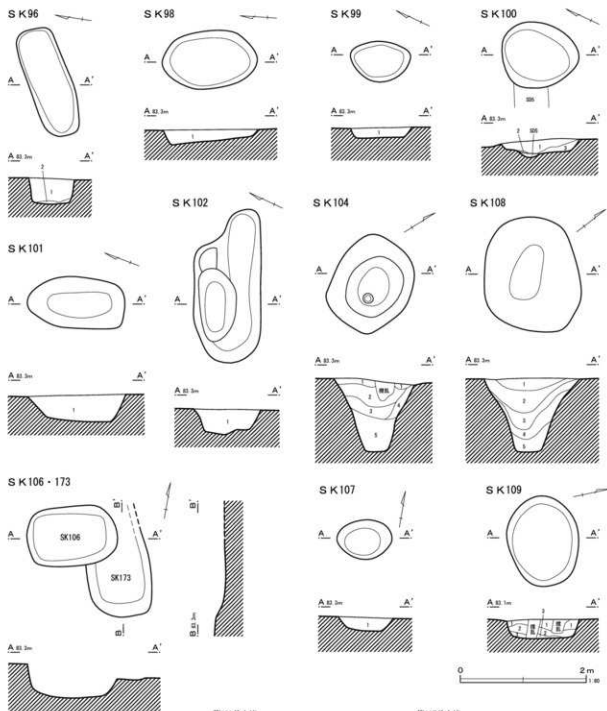
第103号土坑 (第32図)

AE-12グリッドに位置する。第71号土坑と重複し、本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸1.67m、短軸0.74m、深さは0.29mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。覆土は2層で、何れもロームブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

第104号土坑 (第34図)

AD-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.56m、短径1.34m、深さは1.28mである。長軸方位はN-55°-Wを指す。出土遺物はないが、落とし穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第105号土坑 欠番



- 第96号土坑
1 褐色土 ロームブロック(φ2~10mm)極多量
2 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 第98号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第99号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第100号土坑
1 暗褐色土 粘性弱く粒子細かい 炭化物少量
2 黄褐色土 ロームブロック
3 褐色土 粒子細かく粘性強 縄文の地山

- 第101号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第102号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第104号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり弱
2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
白色粒子 しまり強
3 褐色土 ロームブロックを含む暗褐色土 しまり強
4 暗褐色土 ローム主体 しまり弱
5 黄褐色土 ローム主体 ブロック多量 しまりやや強

- 第107号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量 やわらかい
- 第108号土坑
1 暗褐色土 しまり弱 さらさらした土質
2 暗褐色土 しまりやや強
3 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりやや強
4 黄褐色土 ローム主体 炭色粒子微量 しまりやや強
5 暗褐色土 ローム粒子と黒土が均一に混ざる ややざらついた土質 しまり弱
- 第109号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量
2 黒褐色土 ロームブロック
3 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

第34図 土坑(6)

第106号土坑 (第34図)

AD-4グリッドに位置する。第173号土坑と重複し、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.46m、短軸0.92m、深さは0.65mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第107号土坑 (第34図)

AC-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.90m、短径0.62m、深さは0.18mである。長軸方位はN-78°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。縄文土器とこぶし大の鏝が出土した。

第107号土坑出土土器 (第28図9)

風化した爪形文施文の小片を1点図示できすぎない。

第108号土坑 (第34図)

AA-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.90m、短径1.60m、深さは1.13mである。長軸方位はN-82°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、落とし穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第109号土坑 (第34図)

AD-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.44m、短径1.14m、深さは0.29mである。長軸方位はN-86°-Wを指す。覆土は3層で、何れも黒褐色土でロームブロックを含んでいた。最下層の第3層にのみローム粒子が確認された。遺物は出土しなかった。

第110号土坑 (第35図)

AB-4グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.62m、深さは0.21mである。遺物は出土しなかった。

第111号土坑 (第35図)

AA-16グリッドに位置する。第112号土坑と重複するが新旧関係は不明である。平面形はやや角ばった円形で、直径1.14m、深さは0.22~0.36mである。底面東端にピットが検出された。遺物は出土しなかった。

第112号土坑 (第35図)

AA-16グリッドに位置する。第111号土坑と重複するが新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径0.94m、短径0.78m、深さは0.11mである。長軸方位はN-9°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第113号土坑 (第35図)

AA-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.24m、短径0.68m、深さは0.16mである。長軸方位はN-37°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第114号土坑 (第35図)

AB-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.10m、短径0.76m、深さは0.13mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

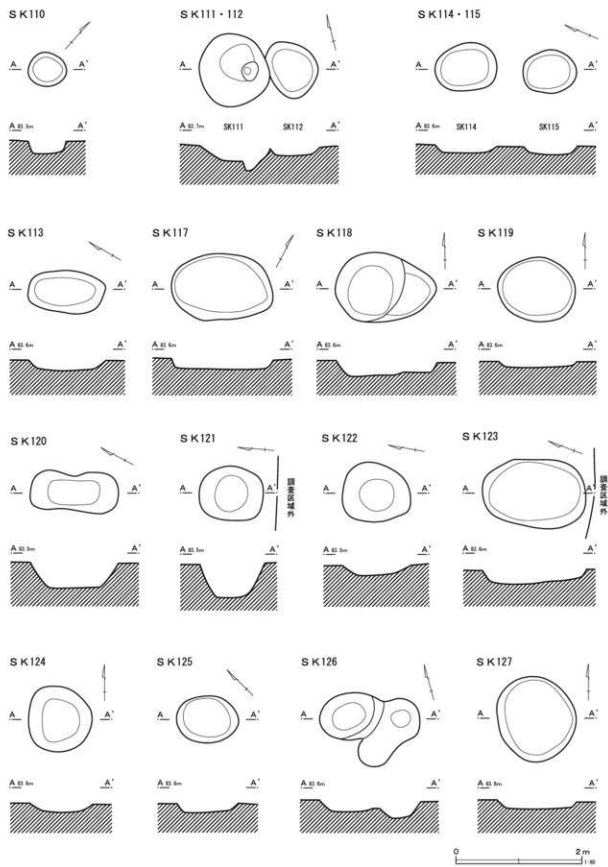
第115号土坑 (第35図)

AB-16グリッドの第114号土坑の南側に位置する。平面形は楕円形で、長径0.86m、短径0.68m、深さは0.14mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第116号土坑 欠番

第117号土坑 (第35図)

AA-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.60m、短径1.12m、深さは0.16mである。



第35圖 土坑(7)

長軸方位はN-82°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第118号土坑 (第35図)

AA-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、東側は小さな段を持って浅くなっていた。長径1.60m、短径1.10m、深さは0.23~0.25mである。長軸方位はN-88°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第119号土坑 (第35図)

AA-16・17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.26m、短径1.04m、深さは0.10mである。長軸方位はN-80°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第120号土坑 (第35図)

AA-17グリッドに位置する。平面形は中央がくぼんだ隅丸長方形で、長軸1.42m、短軸0.66m、深さは0.40mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第121号土坑 (第35図)

AB-17グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.03m、深さは0.52mである。遺物は出土しなかった。

第122号土坑 (第35図)

AA・AB-17グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形で、長径1.10m、短径0.94m、深さは0.16mである。遺物は出土しなかった。

第123号土坑 (第35図)

AB-17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.64m、短径1.10m、深さは0.21mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第124号土坑 (第35図)

AA-17グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形で、長径1.10m、短径1.04m、深さは0.16mである。遺物は出土しなかった。

第125号土坑 (第35図)

AA-17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.10m、短径0.74m、深さは0.14mである。長軸方位はN-45°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第126号土坑 (第35図)

AA-17グリッドに位置する。平面形は不整形で、東側が深くなっている。東西1.60m、南北1.14m、深さは0.19~0.28mである。遺物は出土しなかった。

第127号土坑 (第35図)

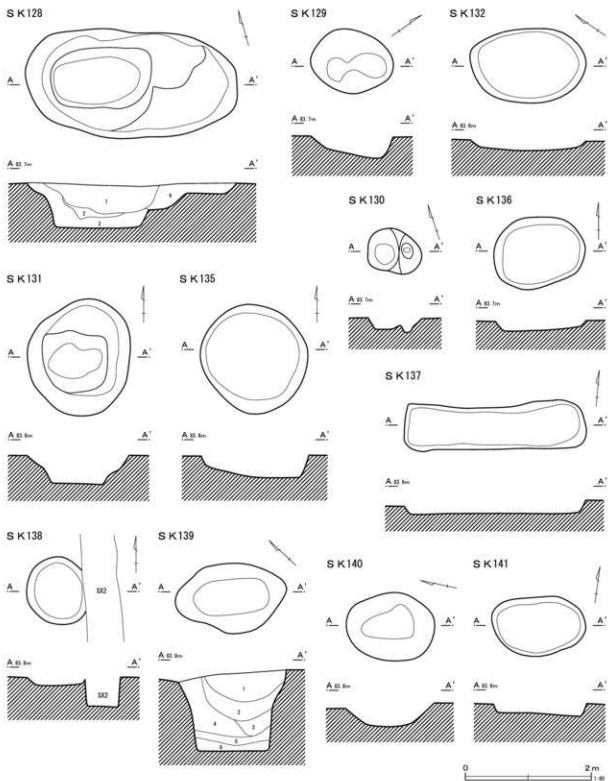
AA-17グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径1.36m、短径1.24m、深さは0.11mである。遺物は出土しなかった。

第128号土坑 (第36図)

Z・AA-17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、西側が深く、東側に段を持ち浅くなっている。長径3.40m、短径1.74m、深さは0.16~0.70mである。長軸方位はN-72°-Wを指す。覆土は4層で、第2層は焼土ブロックが主体で、それより上層の第1層、第4層には焼土粒子が少量含まれていた。遺物は出土しなかった。

第129号土坑 (第36図)

AA-16・17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面はひょうたん状に中央がくびれている。長径1.34m、短径1.02m、深さは0.37mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



- 第128号土坑
- 1 黒褐色土 焼土粒子少量
 - 2 赤褐色土 焼土ブロック主体
 - 3 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm程)少量
 - 4 暗褐色土 黒土・焼土粒子少量

- 第139号土坑
- 1 黒褐色土 しまりあり ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)
 - 4 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)多量
 - 5 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm程)・黒色粒子多量
 - 6 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm以上)多量

第36回 土坑(8)

第130号土坑 (第36区)

Z・AA-17グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ楕円形で、東側がピット状に深くなっている。長径0.86m、短径0.72m、深さは0.16-0.22mである。長軸方位はN-74°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第131号土坑 (第36区)

Z・AA-16グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ円形で、中に段を持っている。長径1.88m、短径1.64m、深さは0.45mである。遺物は出土しなかった。

第132号土坑 (第36区)

AA-15・16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.88m、短径1.16m、深さは0.23mである。長軸方位はN-29°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第133・134号土坑 欠番

第135号土坑 (第36区)

Y-16グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.74m、深さは0.36mである。遺物は出土しなかった。

第136号土坑 (第36区)

Y-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.48m、短径1.14m、深さは0.17mである。長軸方位はN-71°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第137号土坑 (第36区)

X-16・17グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.92m、短軸0.79m、深さは0.22mである。長軸方位はN-82°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第138号土坑 (第36区)

X-15・16グリッドに位置する。第2号性格不明遺構と重複し、新旧関係は判断できなかった。平面形は円形で、直径1.10m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第139号土坑 (第36区)

X-15グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径1.80m、短径1.14m、深さは1.40mである。長軸方位はN-51°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、落とし穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第140号土坑 (第36区)

X-15・16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.42m、短径1.08m、深さは0.37mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第141号土坑 (第36区)

X-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.50m、短径0.98m、深さは0.20mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第142号土坑 (第37区)

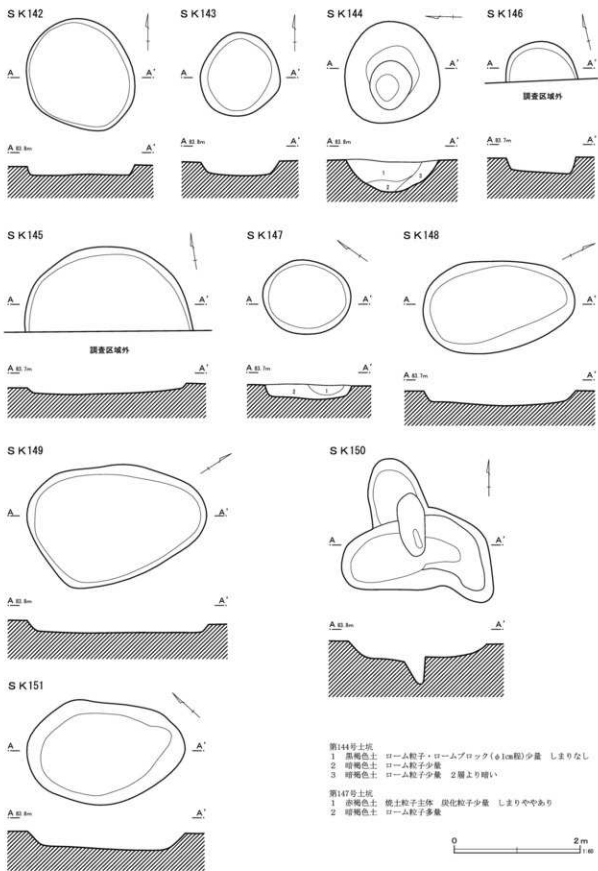
X-16・17グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径1.88m、短径1.68m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第143号土坑 (第37区)

X-16グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.34m、深さは0.21mである。遺物は出土しなかった。

第144号土坑 (第37区)

W・X-16グリッドに位置する。平面形は円形



第37図 土坑(9)

で、直径1.66m、深さは0.50mである。遺物は出土しなかった。

第145号土坑 (第37図)

W-16・17グリッドに位置する。南半は調査区域外にある。平面形は円形あるいは楕円形と考えられる。検出された規模は東西2.68m、南北1.34m、深さは0.12mである。遺物は出土しなかった。

第146号土坑 (第37図)

W-16グリッドに位置する。南半は調査区域外にある。平面形は円形あるいは楕円形と考えられる。検出された規模は東西1.16m、南北0.64m、深さは0.23mである。遺物は出土しなかった。

第147号土坑 (第37図)

W-16グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径1.42m、短径1.18m、深さは0.20mである。遺物は縄文土器が出土した。覆土の状況から、縄文時代の所産の可能性が考えられる。

第147号土坑出土土器 (第28図10)

小片であるが、波状沈線2条と最下位の横位沈線が認められることから、幅広い口縁部文様帯に肋骨文系譜の波状文が展開する構成であると想定できる。

第148号土坑 (第37図)

W-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.42m、短径1.48m、深さは0.24mである。長軸方位はN-24°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第149号土坑 (第37図)

W-15・16グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、長径2.88m、短径1.88m、深さは0.13mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第150号土坑 (第37図)

W-15グリッドに位置する。平面形は不整形で、歪んだ逆T字型で、中央にビットがある。東西2.36m、南北2.32m、深さは0.25~0.62mである。遺物は出土しなかった。

第151号土坑 (第37図)

W-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.52m、短径1.60m、深さは0.24mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第152号土坑 (第38図)

V・W-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径3.44m、短径2.04m、深さは0.19mである。長軸方位はN-38°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第153号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.70m、短径1.40m、深さは0.14mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。縄文土器の極小片が1点出土した。

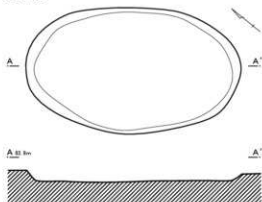
第154号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。南半は調査区域外にある。平面形は楕円形になるかと思われ、東側が溝状に深くなっている。検出された規模は東西2.12m、南北1.00m、深さは0.27~0.62mである。遺物は出土しなかった。

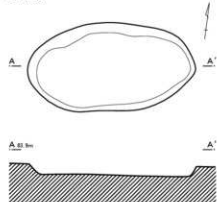
第155号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。南半は調査区域外にある。平面形は楕円形になるかと思われ、北端はビット状に落ち込む。検出された規模は東西1.60m、南北1.29m、深さは0.13~0.28mである。遺物は出土しなかった。

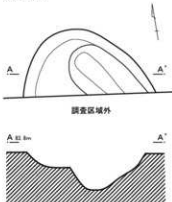
S K 152



S K 153



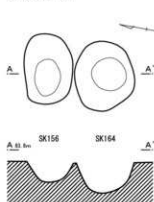
S K 154



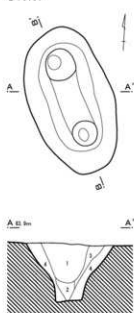
S K 155



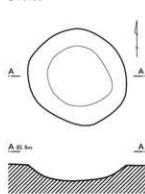
S K 156・164



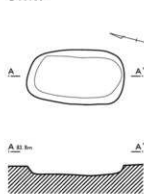
S K 157



S K 158



S K 160



第157号土坑

- 1 褐色土 ローム粒子少量 しまり非常に強
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量 粘性高い しまり非常に強
- 3 暗褐色土 炭色粒子、しまり弱
- 4 暗褐色土 ローム土の崩れたもの、しまり弱



第156号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。第164号土坑と隣接する。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径0.74m、深さは0.34mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第157号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面の両端がピット状になっている。長径2.38m、短径1.36m、底面の深さは0.90mである。ピットの深さは底面から32cmと47cmである。長軸方位はN-14°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、落とす穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第158号土坑 (第38図)

V-15グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径1.66m、短径1.46m、深さは0.27mである。遺物は出土しなかった。

第159号土坑 (第39図)

U・V-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.50m、短径1.44m、深さは0.19mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第160号土坑 (第38図)

U・V-16グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.54m、短軸0.96m、深さは1.60mである。長軸方位はN-15°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第161号土坑 (第39図)

T・U-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.34m、短径1.82m、深さは0.16mである。長軸方位はN-88°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第162号土坑 (第39図)

T-15グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形で、直径1.08m、深さは0.22mである。遺物は出土しなかった。

第163号土坑 (第39図)

T-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径3.28m、短径1.86m、深さは0.17mである。長軸方位はN-59°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第164号土坑 (第38図)

V-16グリッドに位置する。第156号土坑の南側に接する。第156号土坑とは重複する可能性もあるが、土層観察が出来なかったため不明である。平面形は歪んだ円形で、直径1.10m、深さは0.46mである。遺物は出土しなかった。

第165号土坑 (第39図)

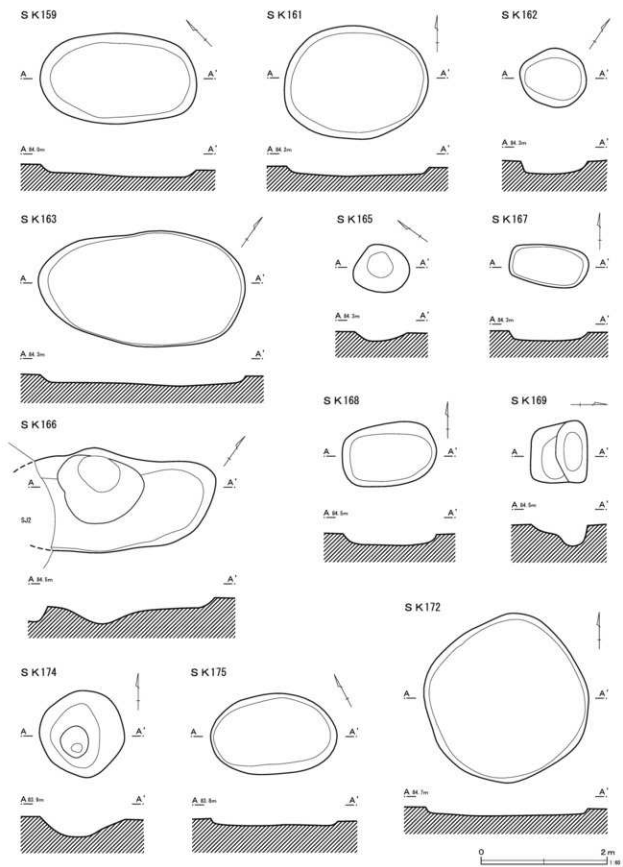
T-16グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形で、直径0.91m、深さは0.14mである。遺物は出土しなかった。

第166号土坑 (第39図)

R・S-15グリッドに位置する。第2号住居跡と重複し、本土坑が新しいが重複部分は検出できなかった。平面形は歪んだ楕円形で、中央付近に落ち込みが見られる。検出された規模は、長径2.88m、短径1.68m、深さは0.17-0.40mである。長軸方位はN-63°-Eを指す。縄文土器の小片が1点出土した。

第167号土坑 (第39図)

S-16グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.25m、短軸0.66m、深さは0.14mである。長軸方位はN-79°-Wを指す。遺物は出土しなかった。



第39图 土坑 (11)

第168号土坑 (第39図)

R-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.50m、短径1.00m、深さは0.18mである。長軸方位はN-88°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第169号土坑 (第39図)

S-15グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、北側が一段深くなっている。一辺0.90m、深さは0.15~0.33mである。縄文土器の極小片が1点出土した。

第170・171号土坑 欠番

第172号土坑 (第39図)

W-15グリッドに位置する。平面形は円形に近く、直径2.70m、深さは0.17mである。遺物は縄文土器が出土した。

第172号土坑出土土器 (第28図11)

単節斜縄文RLのみが観察できる小片が図示できたにすぎない。節が細かく整然としていることから、竹管文系でも前半の破片と考えられる。

第173号土坑 (第34図)

AD-4グリッドに位置する。第106号土坑と重複しているが、土層観察が出来なかったため新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形になるかと思われるが、北半は検出できなかった。検出された規模は南北1.32m、東西1.04m、深さは0.10mである。長軸方位はN-18°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第174号土坑 (第39図)

V-12グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ円形で、中位に緩やかな段が2箇所見られた。直径1.38m、深さは1.41mである。遺物は出土しなかった。

第175号土坑 (第39図)

W-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.04m、短径1.26m、深さは0.12mである。長軸方位はN-63°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第176号土坑 (第40図)

W-12グリッドに位置する。平面形は円形で、中心部がビット状に深くなっている。直径0.86m、深さは0.46mである。遺物は出土しなかった。

第177号土坑 (第40図)

W-12グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形で、直径1.44m、深さは0.20mである。遺物は出土しなかった。

第178号土坑 (第40図)

Y-11・12グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.80m、短軸0.56m、深さは0.23mである。長軸方位はN-16°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第179号土坑 (第40図)

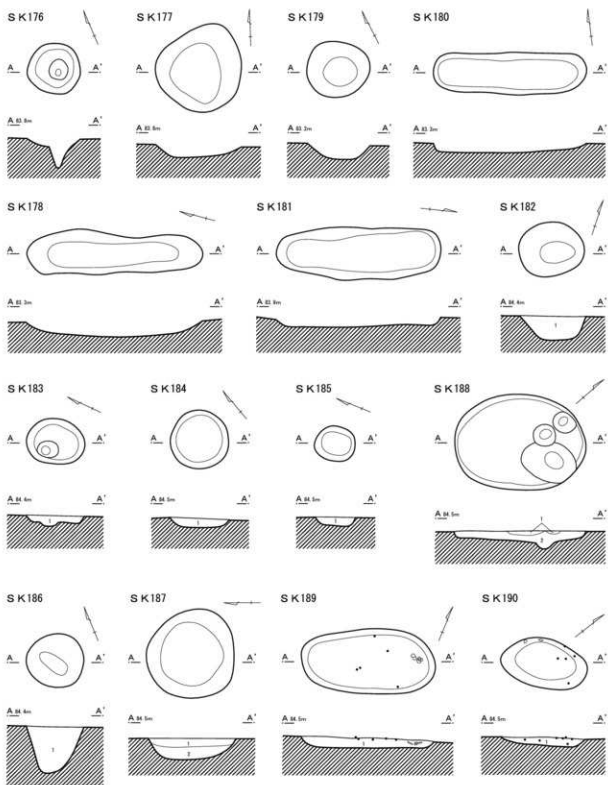
Y-12グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.00m、深さは0.25mである。遺物は出土しなかった。

第180号土坑 (第40図)

Y-12グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.40m、短軸0.70m、深さは0.15mである。長軸方位はN-82°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第181号土坑 (第40図)

U-12グリッドに位置する。第20号溝跡と重複し、本土坑が新しい。平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、長軸2.64m、短軸0.88m、深さは0.13mで



第182・183・184・185・186・189・190号土坑
 1 緑褐色土 粘性なし 炭化粒子少量 珪一性の高い層

第187・188号土坑
 1 緑褐色土 炭土粒子少量
 2 緑褐色土 コーア粒子多量

0 2m
 1:10

第40図 土坑 (12)

ある。長軸方位はN-8°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第182号土坑 (第40図)

R-16・17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.10m、短径0.88m、深さは0.36mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第183号土坑 (第40図)

R-17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面にピットが検出された。長径0.90m、短径0.70m、深さは0.14mである。ピットの深さは底面から17cmである。長軸方位はN-12°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第184号土坑 (第40図)

Q・R-17グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.94m、深さは0.14mである。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第185号土坑 (第40図)

Q-17グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.64m、深さは0.13mである。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第186号土坑 (第40図)

Q-17グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.88m、深さは0.74mである。覆土は暗褐色

土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第187号土坑 (第40図)

Q-17グリッドに位置する。平面形はやや歪んだ円形で、直径1.46m、深さは0.30mである。覆土は2層で、上層に焼土粒子を含んでいた。遺物は縄文土器が出土した。覆土の状況や出土遺物から、縄文時代の所産と考えられる。

第187号土坑出土土器 (第28図12)

竹管による集合鋸歯文を構成している。鋸歯の角度から、単位幅の短い構成が展開すると想定できる。

第188号土坑 (第40図)

Q-17グリッドに位置する。平面形は楕円形で、北端に3基のピットが検出された。長径2.10m、短径1.52m、深さは0.13mである。ピットの底面からの深さは北側から37cm、10cm、8cmである。長軸方位はN-35°-Eを指す。覆土は2層で、上層に焼土粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から、縄文時代の所産と考えられる。

第189号土坑 (第40図)

Q-18グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.10m、短径1.02m、深さは0.18mである。長軸方位はN-66°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。縄文土器がやや多く出土した。出土遺物や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第189号土坑出土土器 (第28図13~17)

5点を図示したが、縦斜位の集合沈線を施した13を除く他の4点は同一個体である。15~17の他にも破片が出土しているが、接合がなわなかった。無節Iを押捺するが、2原体を結束している。ま

た、17に見られるように、自縛部の回転痕も結束部と同様な効果を期待して強調施文されている。

第190号土坑 (第40図)

Q-18グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.38m、短径0.76m、深さは0.09mである。長軸方位はN-40°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、炭化粒子を含んでいた。縄文土器がやや多く出土した。出土遺物や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第190号土坑出土土器 (第28図18-24)

7点の無彫斜縄文施文片を示したが、19・21を除き、他は同一個体である。同一個体の5点は、結束された1段原体を回転し、幅の狭い横帯の繰り返して個体全面を覆うものと想定できる。逆旋りの2本の原体は結束されているものの、その部分の圧痕はあまり目立たず、拓図では横一線の凹線のように見える。

第191号土坑 (第41図)

Q-18グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.80m、短径0.50m、深さは0.12mである。長軸方位はN-7°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第192号土坑 (第41図)

AB-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.12m、深さは0.47mである。遺物は出土しなかった。

第193号土坑 (第41図)

AB-15グリッドに位置する。第7号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径0.68m、短径0.53m、深さは0.36mである。覆土は2層で、何れの層にもローム粒子が含まれていた。遺物は出土しなかった。

第194号土坑 (第41図)

AC-15グリッドに位置する。第8号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径0.84m、短径0.62m、深さは0.16mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。覆土は黒色土とロームの混土層である。遺物は出土しなかった。

第195号土坑 (第41図)

AB・AC-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.08m、短径0.86m、深さは0.18mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第196号土坑 (第41図)

AB-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.74m、深さ0.31mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第197号土坑 (第41図)

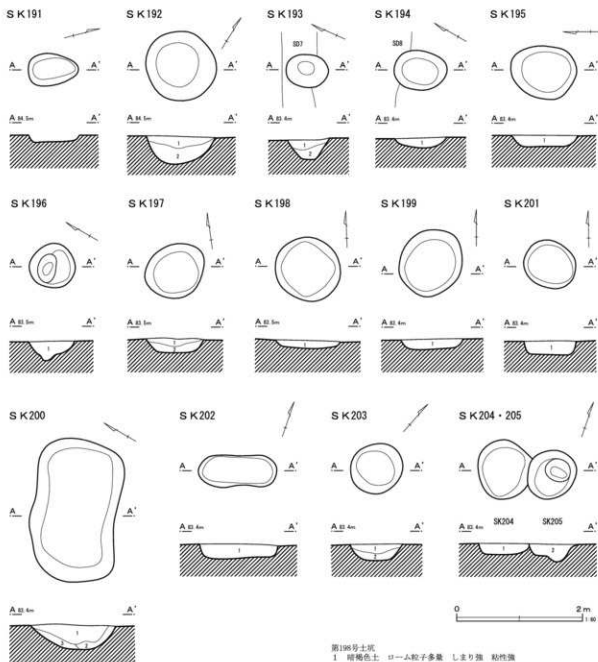
AB-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.91m、深さは0.20mである。覆土は2層で、何れもローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第198号土坑 (第41図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.06m、深さは0.14mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第199号土坑 (第41図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.00m、深さは0.17mである。覆土は黒色土の単一層で、ローム粒子を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。



- 第192号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子微量 しまりなし
2 暗褐色土 ロームブロック(φ10cm)少量
- 第193号土坑
1 赤褐色土 しまりあり 炭化・ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子 しまりなし
- 第194号土坑
1 褐色土 黒色土とロームの混土 しまり弱 恐らく近世の所産
- 第195号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱
- 第196号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり弱 粘性強
- 第197号土坑
1 暗褐色土 ローム・炭化粒子多量
2 暗褐色土 ローム粒子多量

- 第198号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり強 粘性強
- 第199号土坑
1 黒色土 ローム粒子微量 しまりやや強 粘性なし
- 第200号土坑
1 黒褐色土 純土・ローム粒子多量 しまりあり
2 暗褐色土 ローム粒子多量
3 暗褐色土 炭色粒子少量
- 第201号土坑
1 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱
- 第202号土坑
1 黒色土 ローム粒子微量 しまりやや強 粘性なし
- 第203号土坑
1 赤褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
- 第204・205号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 2層よりやや暗色 しまり強 粘性弱
2 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱

第41図 土坑 (13)

第200号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.22m、短軸1.49m、深さは0.40mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第201号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.83m、深さ0.21mである。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を多量、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第202号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.25m、短径0.51m、深さは0.25mである。長軸方位はN-69°-Eを指す。覆土は黒色土の単一層で、ローム粒子を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第203号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.83m、深さは0.23mである。遺物は出土しなかった。

第204号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。第205号土坑と重複し、本土坑が古い。平面形は歪んだ円形で、直径0.80m、深さは0.17mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第205号土坑 (第41図)

AC-16グリッドに位置する。第204号土坑を僅かに壊している。平面形は円形で、北側が深くなっている。直径0.77m、深さは0.16-0.25mである。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第206号土坑 (第42図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径0.82m、短径0.72m、深さは0.22mである。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第207号土坑 (第42図)

AC-15グリッドの第208号土坑の南側に近接する。平面形は円形で、直径0.77m、深さは0.35mである。覆土は2層で、共にロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

第208号土坑 (第42図)

AC-15グリッドの第207号土坑の北側に位置する。平面形は円形で、直径0.69m、深さは0.13mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第209号土坑 (第42図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.79m、深さは0.18mである。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第210号土坑 (第42図)

AC-14・15グリッドに位置する。第8号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は円形で、直径1.26m、深さは0.11mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第211号土坑 (第42図)

AC-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.38m、短径1.02m、深さは0.36mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。覆土は褐色土の

単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第212号土坑 (第42図)

AD-14グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径1.15m、短径0.90m、深さは0.06mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。縄文土器の小片が1点出土した。

第213号土坑 (第42図)

AC-14グリッドに位置する。第214号土坑と重複し、本土坑が古い。平面形は楕円形で、長径1.58m、短径1.24m、深さは0.26mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。縄文土器がやや多く出土した。

第213号土坑出土土器 (第28図25~29)

5点を示したが、このうち25~27が曲線構成の爪形文系土器である。爪形間に刺切が充填され、レンズ状文の内部には円形竹管文が加えられるなど、同系土器の中でも装飾性に富んでいる。また、同じレンズ状構成ながら、28は平行沈線でこれを作成している。さらに、29は硬い繊維を素材とした単節LR原体を横位に施文している。

第214号土坑 (第42図)

AC-14グリッドに位置する。第213号土坑を壊している。平面形は円形に近く、長径1.10m、短径0.91m、深さは0.26mである。遺物は出土しなかった。

第215号土坑 (第32図)

AC-14グリッドに位置する。第78号土坑、第6号溝跡と重複し、その何れよりも古いと思われる。平面形は隅丸方形に近く、東西1.66m、南北1.32m、深さは0.52mである。長軸方位はN-33°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第216~218号土坑 欠番

第219号土坑 (第33図)

AC-15グリッドに位置する。北側を第84号土坑に壊される。平面形は楕円形で、長径1.70m、短径1.48m、深さは0.25mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第220号土坑 (第42図)

AC-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.78m、短径0.60m、深さは0.14mである。長軸方位はN-49°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第221号土坑 (第42図)

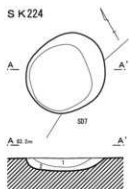
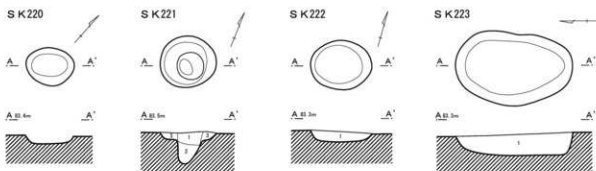
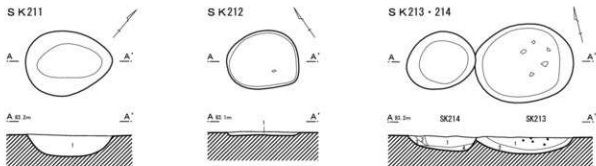
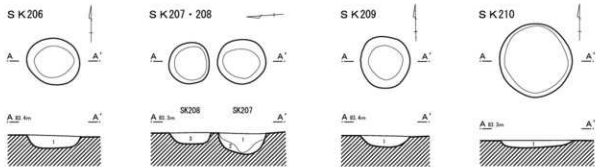
AB-15グリッドに位置する。平面形は円形で、中央がピット状に深くなっている。直径0.89m、深さは0.52mである。覆土は3層で、中心部分の2層にはロームブロックが含まれていた。遺物は出土しなかった。

第222号土坑 (第42図)

AC-14・15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.99m、短径0.77m、深さは0.14mである。長軸方位はN-74°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第223号土坑 (第42図)

AC-14・15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.86m、短径1.16m、深さは0.37mである。長軸方位はN-6°-Eを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を少量、炭化物を微量含んでおり、第1号住居跡の第2層に類似していた。縄文土器が出土した。覆土の状況や出土



第206号土坑
1 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱

第207・208号土坑
1 暗褐色土 ロームブロック(φ30cm程)少量
2 暗褐色土 ロームブロック(φ30cm程)多量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱

第209号土坑
1 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱

第210号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり強 粘性弱

第211号土坑
1 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性弱

第212号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり弱 粘性強

第213号土坑
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量

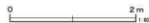
第214号土坑
1 黒褐色土 ローム・焼土粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子 1層より若干平面的い
3 暗褐色土 ロームA粒子
4 暗褐色土 ロームブロック(φ10cm程)少量

第215号土坑
1 黒褐色土 ロームブロック多量
2 黒褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 ロームA粒子少量

第220号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり・粘性強

第223号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 しまり強 溝文付層礫土に近い

第224号土坑
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量



第42回 土坑 (14)

遺物から、縄文時代の所産と考えられる。

第223号土坑出土土器 (第28図30)

1点のみが図示できた。中間区画が入り二段構成となる平縁の爪形文施文土器である。

第224号土坑 (第42図)

AC-14グリッドに位置する。第7号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径1.34m、短径1.17m、深さは0.19mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。遺物は縄文土器が出土し、覆土の状況も合わせて、縄文時代の所産と考えられる。

第224号土坑出土土器 (第28図31~33)

3点の爪形文施文土器を示したが、それぞれ別個体である。各片とも曲線的な構成を描出するようだが、詳しい構成は不明である。32の凹部は器面の剥落である。

第225号土坑 (第43図)

AD-14グリッドに位置する。第7号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径1.00m、短径0.74m、深さは0.24mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第226号土坑 (第43図)

W-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.07m、短径0.78m、深さは0.16mである。長軸方位はN-14°-Wを指す。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に、炭化物を微量含んでいた。縄文土器がまとめて出土した。縄文時代の所産と考えられる。

第226号土坑出土土器 (第28図34~39)

図示した6片はすべて同一個体で、他にも破片が出土しているものの、接合できなかった。短くて細い無節L原体をまばらに横位施文しているが、乱雑な造りであるとともに、縄文施文後に余計な

粘土粒がつかのを意に介さなかったようで、拓影には縄文の一部しか表現できていない。

第227号土坑 欠番

第228号土坑 (第43図)

AD-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.23m、短径1.01m、深さは0.38mである。覆土は2層で、ローム粒子、ロームブロックを含んでいた。縄文土器が出土した。覆土の状況と出土遺物から、縄文時代の所産と考えられる。

第228号土坑出土土器 (第28図40・41)

2点を図示した。40は弧状平行沈線の組み合わせを口縁部文様帯に充填する構成のものだと思うが、弧線が深い。41は単節R Lを施文する破片である。

第229号土坑 (第43図)

AD-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.33m、短径0.78m、深さは0.18mである。長軸方位はN-50°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

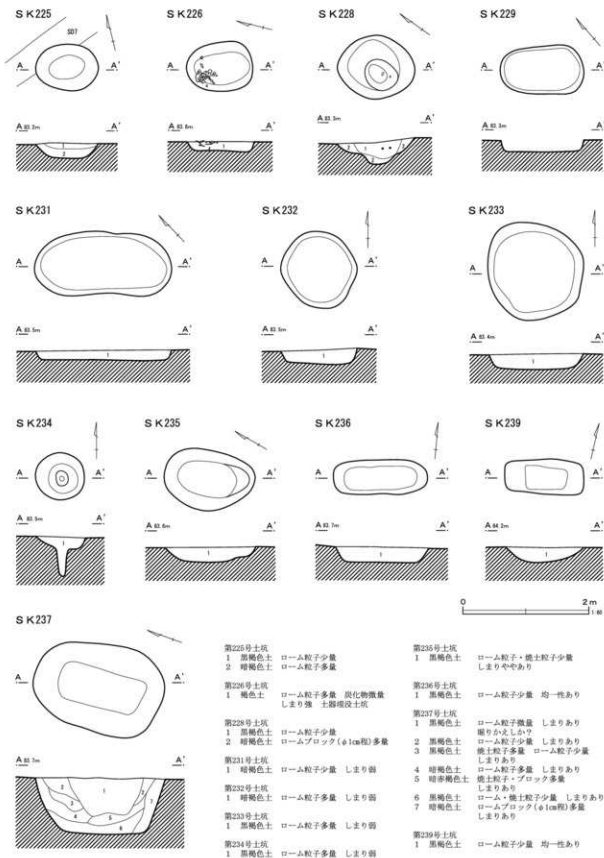
第230号土坑 欠番

第231号土坑 (第43図)

Z-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径2.18m、短径1.00m、深さは0.19mである。長軸方位はN-46°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第232号土坑 (第43図)

Z-14グリッドに位置する。平面形はいびつな円形で、直径1.26m、深さは0.26mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。



第43図 土坑 (15)

第233号土坑 (第43図)

Y-14グリッドに位置する。平面形はいびつな円形で、直径1.62m、深さは0.26mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第234号土坑 (第43図)

X・Y-14グリッドに位置する。平面形は円形で、中央がピット状に深くなっている。直径0.78m、深さは0.62mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を多量に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第235号土坑 (第43図)

X・Y-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、南側に段を持ち浅くなっていた。長径1.45m、短径0.98m、深さは0.15~0.22mである。長軸方位はN-29°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子、焼土粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第236号土坑 (第43図)

W-14グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.50m、短軸0.57m、深さは0.24mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。縄文土器の極小片が1点出土した。

第237号土坑 (第43図)

W-14グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.07m、短軸1.43m、深さは0.87mである。長軸方位はN-4°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、落とし穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第238号土坑 欠番

第239号土坑 (第43図)

U-14グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸1.27m、短軸0.56m、深さは0.24mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第240号土坑 (第44図)

U-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.32m、短径1.08m、深さは0.62mである。長軸方位はN-57°-Eを指す。覆土は2層で、第1層の暗赤褐色土には焼土粒子、ローム粒子を含んでいた。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第241号土坑 (第44図)

AB-12グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、南半が深くなっている。長径1.95m、短径1.28m、深さは0.39~0.52mである。長軸方位はN-21°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいる。遺物は出土しなかった。

第242号土坑 (第44図)

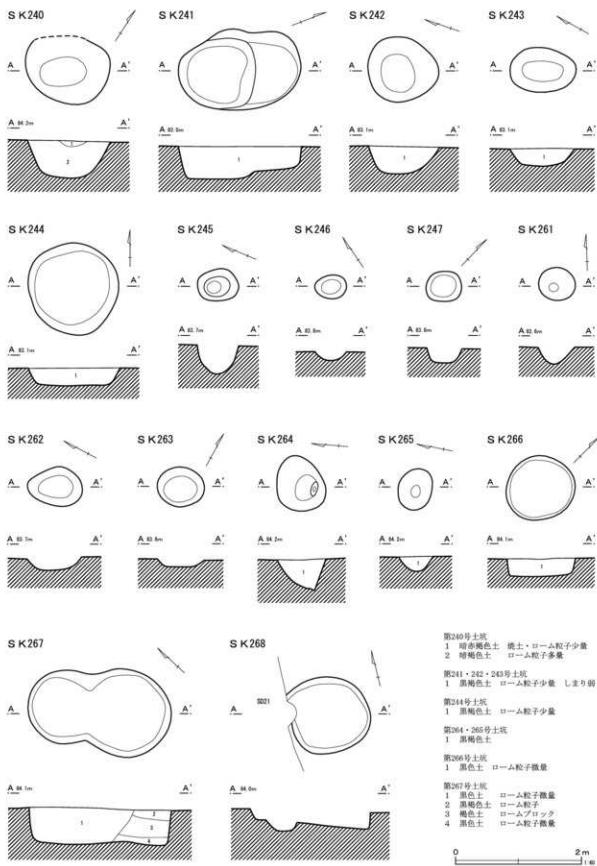
AB-11グリッドに位置する。平面形は円形に近く、直径1.13m、深さは0.44mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいる。遺物は出土しなかった。

第243号土坑 (第44図)

AB-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.06m、短径0.71m、深さは0.27mである。長軸方位はN-29°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいる。遺物は出土しなかった。

第244号土坑 (第44図)

AB-13グリッドに位置する。平面形は円形で、



第44图 土坑 (16)

直径1.50m、深さは0.28mである。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいる。遺物は出土しなかった。

第245号土坑 (第44図)

W-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.66m、短径0.52m、深さは0.45mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第246号土坑 (第44図)

W-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.50m、短径0.38m、深さは0.15mである。長軸方位はN-57°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第247号土坑 (第44図)

W-14グリッドに位置する。平面形は円形に近く、直径0.56m、深さは0.23mである。遺物は出土しなかった。

第248～260号土坑 欠番

第261号土坑 (第44図)

X-14グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.59m、深さは0.29mである。遺物は出土しなかった。

第262号土坑 (第44図)

W-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.87m、短径0.63m、深さは0.20mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第263号土坑 (第44図)

W-15グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.76m、短径0.63m、深さは0.11mである。遺

物は出土しなかった。

第264号土坑 (第44図)

T-13グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.90m、短径0.76m、深さは0.52mである。覆土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

第265号土坑 (第44図)

T-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.67m、短径0.54m、深さは0.24mである。長軸方位はN-89°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

第266号土坑 (第44図)

T-11・12グリッドに位置する。平面形は円形で、直径1.09m、深さは0.28mである。覆土は黒色土の単一層で、ローム粒子を微量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第267号土坑 (第44図)

T-11・12グリッドに位置する。平面形はひょうたん形で、長軸2.27m、短軸1.39m、深さは0.56mである。長軸方位はN-43°-Wを指す。覆土の観察から2基の土坑が重なったものと判断した。遺物は出土しなかった。

第268号土坑 (第44図)

S-15グリッドに位置する。第21号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形で、東西1.26m、南北1.23m、深さは0.26mである。遺物は出土しなかった。

第269号土坑 (第45図)

U-16グリッドに位置する。平面形は円形で、北東側にビットがある。直径0.91m、深さは0.19mで、ビットの深さは底面から29cmである。遺物は出土しなかった。

第270号土坑 (第45図)

T・U-16グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.90m、深さは0.32mである。遺物は出土しなかった。

第271号土坑 (第45図)

AA-16グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、長径2.10m、短径1.43m、深さは0.26mである。長軸方位はN-79°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第272号土坑 (第45図)

R-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.38m、短径1.15m、深さは0.54mである。長軸方位はN-15°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第273号土坑 (第45図)

AA-9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、北側コーナーが深くになっている。長軸1.87m、短軸0.89m、深さは0.65mである。長軸方位はN-21°-Wを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第274号土坑 (第45図)

Z・AA-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径0.58m、深さは0.16mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。覆土は黒色土の単一層で、ローム粒子が混入していた。遺物は出土しなかった。

第275号土坑 (第45図)

Z・AA-8グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.96m、深さは0.48mである。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームを斑状に含んでいた。遺物は出土しなかった。

第276号土坑 欠番

第277号土坑 (第45図)

Z-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.28m、短径0.96m、深さは0.48mである。長軸方位はN-76°-Eを指す。覆土は黒褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含んでいた。遺物は出土しなかった。

第278号土坑 (第45図)

Y-8グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、北西コーナー付近は検出できなかった。検出された規模は東西1.68m、南北0.73m、深さは0.26mである。長軸方位はN-77°-Eを指す。覆土は黒色土の単一層で、ローム粒子を含んでいた。遺物は出土しなかった。

第279号土坑 (第45図)

Y-9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.50m、短径0.97m、深さは0.34mである。長軸方位はN-0°-Wを指す。覆土は暗褐色土の単一層で、ロームを斑状に含んでいた。遺物は出土しなかった。

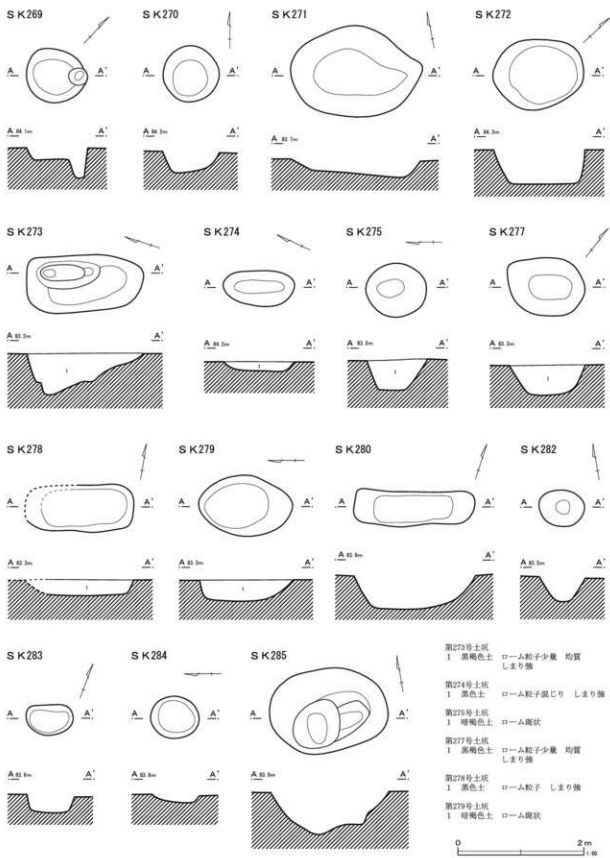
第280号土坑 (第45図)

V-11グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸1.93m、短軸0.58m、深さは0.53mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第281号土坑 欠番

第282号土坑 (第45図)

W・X-11グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長径0.72m、短径0.58m、深さは0.36mである。遺物は出土しなかった。



第45図 土坑 (17)

第283号土坑 (第45図)

W-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.75m、短径0.50m、深さは0.29mである。長軸方位はN-76°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第284号土坑 (第45図)

W-11グリッドに位置する。平面形は円形で、直径0.78m、深さは0.11mである。遺物は出土しなかった。

第285号土坑 (第45図)

AC-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面に起伏がある。長径1.89m、短径1.33m、深さは0.53-0.66mである。長軸方位はN-81°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第286号土坑 (第46図)

AC-3グリッドに位置する。第2号溝跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は楕円形で、西側が低くなっている。長径2.57m、短径1.30m、深さは0.70mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。覆土は2層で、ロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

第287号土坑 (第46図)

AC-15・16グリッドに位置する。東側と南側は調査区域外にある。平面形は楕円形と思われる。検出された規模は、東西0.55m、南北1.30m、深さは0.12mである。長軸方位はN-22°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第288号土坑 (第46図)

AE-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、北側がやや低くなっている。長径1.11m、短径0.50m、深さは0.10mである。長軸方位はN-0°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第289号土坑 (第46図)

V-8グリッドに位置する。第1号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、北側が土坑状に深くなっている。長軸1.64m、短軸0.93m、深さは0.68-0.75mである。長軸方位はN-21°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第290号土坑 (第46図)

V-8グリッドに位置する。第1号溝跡と重複し、本土坑が古い。平面形は長方形で、長軸1.98m、短軸0.84m、深さは0.51mである。長軸方位はN-81°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第291号土坑 (第46図)

W-8グリッドに位置する。第1号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.47m、短軸1.09m、深さは0.52mである。長軸方位はN-54°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第292号土坑 (第46図)

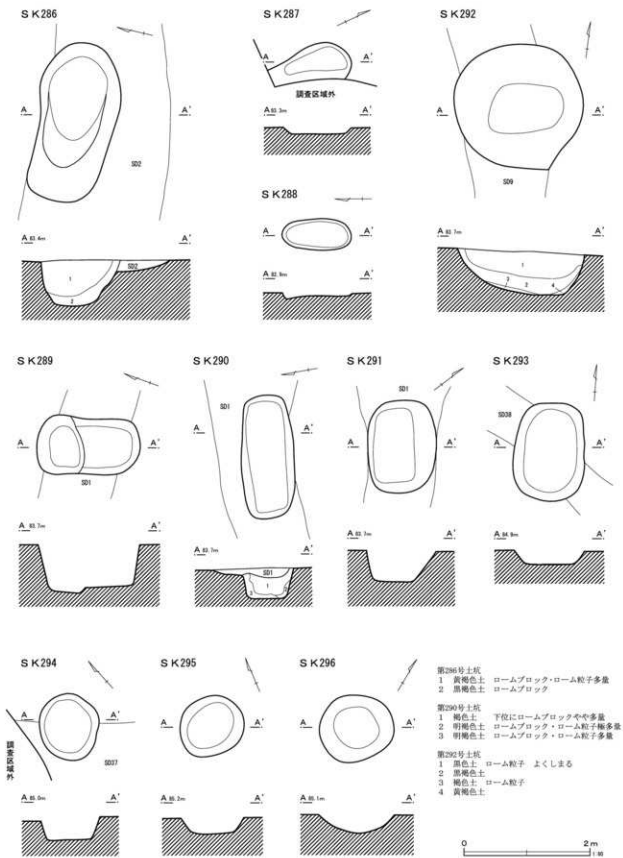
W-11グリッドに位置する。第9号溝跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は楕円形で、長径2.08m、短径1.96m、深さは0.62mである。覆土は4層に分けられ、第1層は硬くしまっていた。遺物は出土しなかった。

第293号土坑 (第46図)

I-19グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第1号土坑である。第38号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.56m、短軸1.12m、深さは0.22mである。長軸方位はN-4°-Wを指す。縄文土器が出土した。

第293号土坑出土土器 (第28図42)

小片1点のみが示せたにすぎない。集合沈線で曲直線文を描くようだが、全体の構成は不明である。



第46図 土坑 (18)

第294号土坑 (第46図)

I-18グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第2号土坑である。第37号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は円形に近く、長径1.10m、短径1.00m、深さは0.44mである。縄文土器が出土した。

第294号土坑出土土器 (第28図43)

無節糸縄文RとLが押捺され、羽状を構成しているが、両者を結束した形跡はない。あるいは原体間の部分にあたるかも知れない。

第295号土坑 (第46図)

I-18グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第3号土坑である。平面形は円形で、直径1.05m、深さは0.27mである。遺物は出土しなかった。

第296号土坑 (第46図)

I-18グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第4号土坑である。平面形は楕円形に近く、長径1.20m、短径1.07m、深さは0.31mである。遺物は出土しなかった。

第297号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第5号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸0.90m、短軸0.62m、深さは0.23mである。長軸方位はN-60°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第298号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第6号土坑である。平面形は円形で、ピットが2基合体した形である。直径0.44m、深さは0.30~0.35mである。遺物は出土しなかった。

第299号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り

り第7号土坑である。平面形は楕円形で、北西コーナーにピットがある。長径1.00m、短径0.68m、深さは0.11mである。ピットの深さは底面から18cmである。長軸方位はN-81°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第300号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第8号土坑である。第301号土坑と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径2.06m、短径1.30m、深さは0.08mである。長軸方位はN-8°-Wを指す。鉄釘片が1点出土した(第53図4)。

第301号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第9号土坑である。第300号土坑と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径0.72m、短径0.54m、深さは0.38mである。遺物は出土しなかった。

第302号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第10号土坑である。2基の土坑が重なったような平面形である。長軸1.44m、短軸1.06m、深さは0.28~0.35mである。長軸方位はN-82°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第303号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第11号土坑である。平面形は楕円形で、長径2.38m、短径0.82m、深さは0.15mである。長軸方位はN-90°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第304号土坑 (第47図)

I-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第12号土坑である。平面形は楕円形に近く、長

径1.18m、短径1.03m、深さは0.11mである。遺物は出土しなかった。

第305～307号土坑 欠番

第308号土坑 (第47図)

H-16グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第16号土坑である。平面形は楕円形で、東に向かって深くなっている。長径1.06m、短径0.64m、深さは0.78mである。長軸方位はN-80°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第309号土坑 欠番

第310号土坑 (第47図)

H-15グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第18号土坑である。平面形は楕円形で、長径0.58m、短径0.44m、深さは0.34mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第311号土坑 (第47図)

H-16グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第19号土坑である。平面形はいびつな円形で、直径0.60m、深さは0.25mである。遺物は出土しなかった。

第312～314号土坑 欠番

第315号土坑 (第47図)

H-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第23号土坑である。平面形は円形で、直径0.68m、深さは0.12mである。遺物は出土しなかった。

第316号土坑 (第47図)

G-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第24号土坑である。平面形は円形で、直径1.22m、深さは0.27mである。遺物は出土しなかった。

第317・318号土坑 欠番

第319号土坑 (第47図)

E-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第27号土坑である。平面形は隅丸長方形で、南端は調査区域外にある。検出された規模は、南北2.64m、東西0.54m、深さは0.56mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。近代あるいは現代と思われる瓦が出土した。

第320号土坑 (第47図)

I-14・15グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第28号土坑である。平面形は隅丸方形で、東西1.22m、南北1.34m、深さは0.14mである。遺物は出土しなかった。

第321・322号土坑 欠番

第323号土坑 (第47図)

P-6グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第31号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.63m、短径1.18m、深さは0.20mである。長軸方位はN-56°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第324号土坑 (第48図)

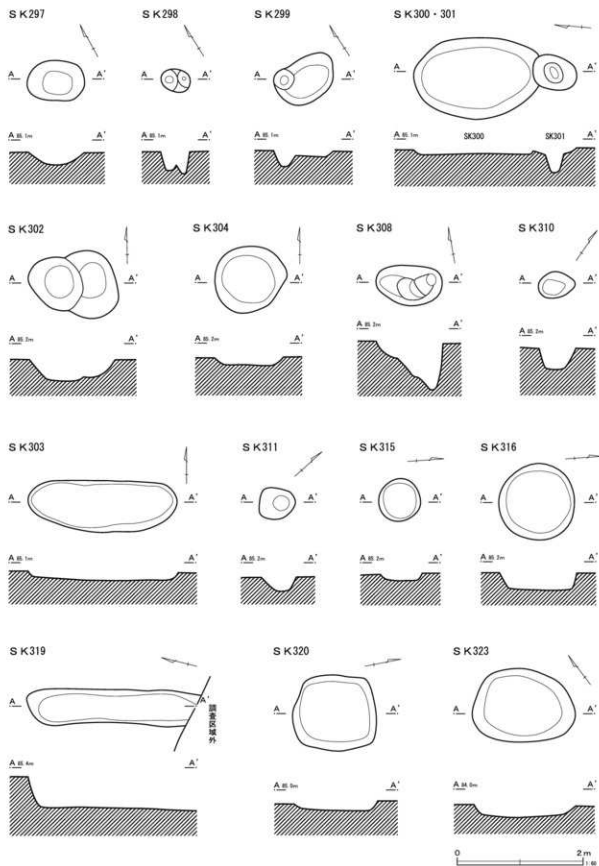
O-7グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第32号土坑である。平面形は楕円形に近く、長径0.96m、短径0.83m、深さは0.07mである。遺物は出土しなかった。

第325号土坑 (第48図)

O-7グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第33号土坑である。平面形は円形で、直径0.98m、深さは0.12mである。遺物は出土しなかった。

第326号土坑 (第48図)

O-7グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り



第47图 土坑 (19)

り第34号土坑である。平面形は楕円形で、南側はテラス状に浅くなっている。長径1.18m、短径0.77m、深さは0.23mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第327号土坑 (第48図)

O-7グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第35号土坑である。平面形は円形で、直径1.26m、深さは0.09mである。遺物は出土しなかった。

第328号土坑 (第48図)

O-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第36号土坑である。平面形は楕円形で、西側に段を持っている。長径1.21m、短径0.92m、深さは0.79mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第329号土坑 (第48図)

N-7・8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第37号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.30m、短径1.07m、深さは0.15mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第330号土坑 (第48図)

N-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第38号土坑である。平面形は隅丸方形で、東西0.64m、南北0.70m、深さは0.09mである。遺物は出土しなかった。

第331号土坑 (第48図)

N-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第39号土坑である。平面形は不整形で、長軸1.00m、短軸0.78m、深さは0.08mである。遺物は出土しなかった。

第332号土坑 欠番

第333号土坑 (第48図)

O-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第41号土坑である。平面形は円形で、直径0.90m、深さは0.09mである。遺物は出土しなかった。

第334号土坑 (第48図)

M-7・8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第42号土坑である。第335号土坑と重複し、本土坑が新しい。平面形は楕円形で、長径1.15m、短径0.86m、深さは0.17mである。長軸方位はN-17°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第335号土坑 (第48図)

M-7グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第43号土坑である。南側を第334号土坑に壊される。平面形は隅丸長方形で、長軸2.35m、短軸1.27m、深さは0.81mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。遺物は出土しなかったが、落とし穴状の土坑で、形態や覆土の状況から縄文時代の所産と考えられる。

第336号土坑 (第48図)

N-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第44号土坑である。平面形は楕円形で、長径0.76m、短径0.58m、深さは0.13mである。長軸方位はN-29°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

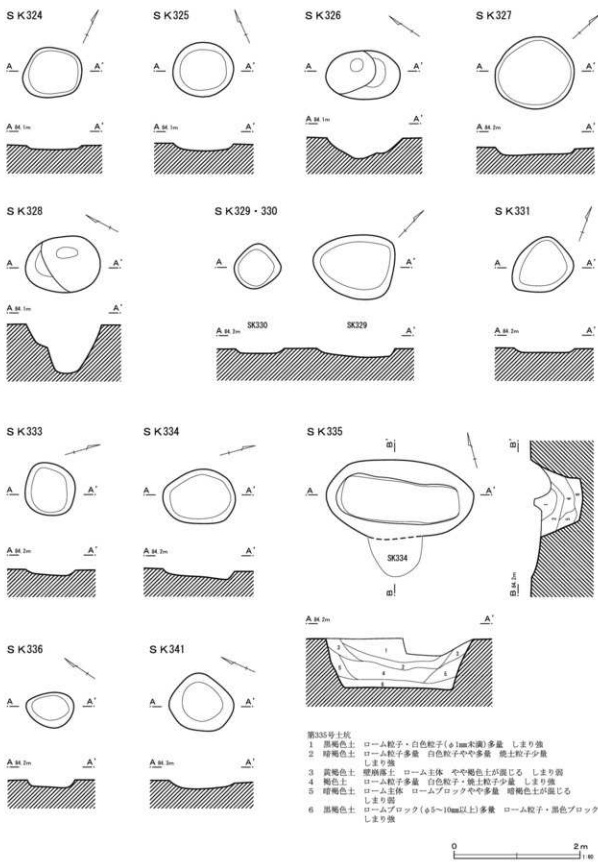
第337号土坑 欠番

第338号土坑 S C-4に変更

(発掘調査時は外廻り第46号土坑)

第339号土坑 (第49図)

M-8、N-8・9グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第47号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸2.32m、短軸0.98m、深さは0.44mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。遺物は



第48図 土坑 (20)

出土しなかった。

第340号土坑 欠番

第341号土坑 (第48図)

M-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第49号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.04m、短径0.90m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第342号土坑 (第49図)

M-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第50号土坑である。平面形は長方形で、長軸1.53m、短軸0.84m、深さは0.39mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。須恵器高台付塊の小片が出土した。

第343号土坑 (第49図)

M-9グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第51号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径0.99m、深さは0.18mである。長軸方位はN-86°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第344号土坑 (第49図)

L-9グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第52号土坑である。平面形は円形で、直径0.81m、深さは0.09mである。遺物は出土しなかった。

第345号土坑 (第49図)

L-9グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第53号土坑である。南西側は調査区域外にある。平面形は円形で、直径1.30m、深さは0.29mである。遺物は出土しなかった。

第346号土坑 (第49図)

M-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第54号土坑である。平面形は楕円形に近く、長

径1.35m、短径1.19m、深さは0.21mである。遺物は出土しなかった。

第347号土坑 (第49図)

M-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第55号土坑である。平面形は長方形で、長軸1.26m、短軸0.62m、深さは0.32mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第348号土坑 (第49図)

L-8グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第56号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.92m、短軸0.72m、深さは0.25mである。長軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第349～352号土坑 欠番

第353号土坑 (第49図)

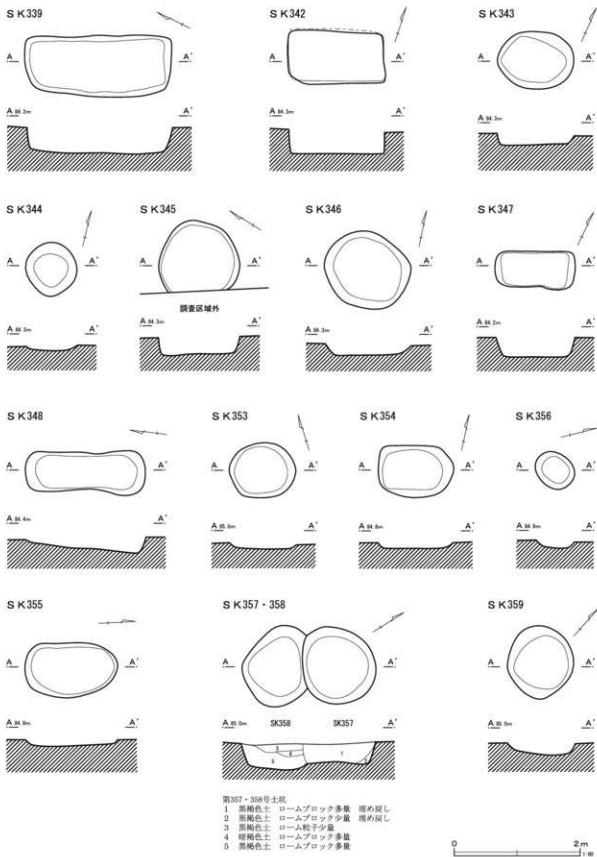
J-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第61号土坑である。平面形は楕円形に近く、長径1.07m、短径0.89m、深さは0.11mである。遺物は出土しなかった。

第354号土坑 (第49図)

L-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第62号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.22m、短軸0.82m、深さは0.08mである。長軸方位はN-78°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第355号土坑 (第49図)

J-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第63号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.47m、短径0.86m、深さは0.10mである。長軸方位はN-3°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



第49図 土坑 (21)

第356号土坑 (第49図)

J-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第64号土坑である。平面形は円形で、直径0.66m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第357号土坑 (第49図)

J-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第65号土坑である。第358号土坑と重複し、本土坑が新しい。平面形は円形で、直径1.22m、深さは0.32mである。覆土は埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第358号土坑 (第49図)

J-12・13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第66号土坑である。北側を第357号土坑に壊されている。平面形は円形で、直径1.29m、深さは0.41mである。遺物は出土しなかった。

第359号土坑 (第49図)

I-12・13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第67号土坑である。平面形は円形で、直径1.07m、深さは0.18mである。遺物は出土しなかった。

第360号土坑 (第50図)

I-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第68号土坑である。平面形は楕円形で、中に段を持っている。長径1.26m、短径0.79m、深さは0.48mである。長軸方位はN-73°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第361号土坑 (第50図)

I-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第69号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.80m、短径1.39m、深さは0.48mである。長軸方位はN-34°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第362号土坑 (第50図)

I-14グリッドに位置する。第41号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。発掘調査時は外廻り第70号土坑である。平面形は歪んだ楕円形で、長径1.14m、短径0.95m、深さは0.40mである。長軸方位はN-75°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第363号土坑 欠番

第364号土坑 (第50図)

G-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第72号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.25m、短径0.89m、深さは0.27mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第365号土坑 (第50図)

F-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第73号土坑である。平面形は円形で直径1.25m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第366号土坑 (第50図)

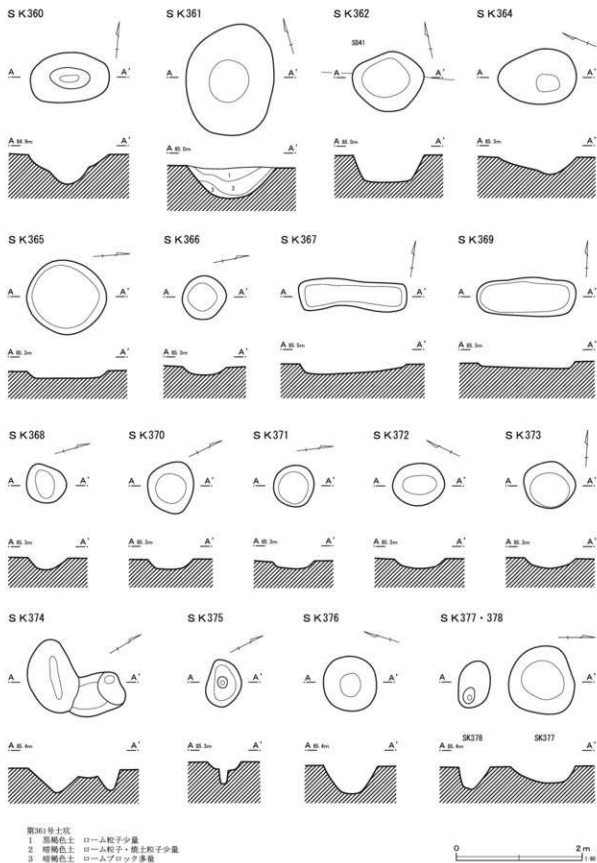
F-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第74号土坑である。平面形は円形で、直径0.70m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第367号土坑 (第50図)

F-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第75号土坑である。平面形は長方形で、長軸1.72m、短軸0.48m、深さは0.14mである。長軸方位はN-81°-Eを指す。縄文土器片と陶器片が出土した。

第367号土坑出土土器 (第28図44~46)

小片だが、3点が図示できた。44・45は縦位に近い集合沈線(線)を施文するもので、44では縦位線を連結するような横位短沈線が見える。また、46は無節Rを横位に施文するものである。施文帯間に



第50回 土坑 (22)

残るアクセントは他白縛痕のようにも見えるが、特定できない。

第368号土坑 (第50図)

G-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第76号土坑である。平面形は歪んだ円形で、直径0.62m、深さは0.19mである。遺物は出土しなかった。

第369号土坑 (第50図)

G-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第77号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.58m、短軸0.62m、深さは0.10mである。長軸方位はN-87°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第370号土坑 (第50図)

G-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第78号土坑である。平面形は円形に近く、直径0.83m、深さは0.15mである。遺物は出土しなかった。

第371号土坑 (第50図)

F・G-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第79号土坑である。平面形は円形で、直径0.65m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第372号土坑 (第50図)

F-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第80号土坑である。平面形は楕円形で、長径0.83m、短径0.67m、深さは0.17mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第373号土坑 (第50図)

F-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第81号土坑である。平面形は円形に近く、長径

0.84m、短径0.74m、深さは0.18mである。遺物は出土しなかった。

第374号土坑 (第50図)

F-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第82号土坑である。平面形はL字形で、2基の土坑が重複したような形だが、土層観察が出来なかった。南北1.46m、東西1.15m、深さは0.32~0.35mである。陶器片が出土した。

第375号土坑 (第50図)

E-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第83号土坑である。平面形は楕円形で、中央部がピット状に深くなっている。長径0.76m、短径0.56m、深さは0.34mである。長軸方位はN-66°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第376号土坑 (第50図)

E-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第84号土坑である。平面形は円形で、直径0.86m、深さは0.44mである。遺物は出土しなかった。

第377号土坑 (第50図)

E-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第85号土坑である。平面形は歪んだ円形で、直径1.10m、深さは0.27mである。遺物は出土しなかった。

第378号土坑 (第50図)

E-12グリッドの第377号土坑の南側に位置する。発掘調査時は外廻り第86号土坑である。平面形は楕円形で、長径0.76m、短径0.50m、深さは0.37mである。長軸方位はN-77°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第379号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り

り第87号土坑である。平面形は円形で、直径1.51m、深さは0.31mである。縄文土器が出土した。

第379号土坑出土土器 (第28図47)

竹管による集合銅貫文を構成している。銅貫の角度から、単位幅の短い構成が展開すると想定できる。

第380号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第88号土坑である。平面形は円形に近く、長径1.62m、短径1.43m、深さは0.20mである。遺物は出土しなかった。

第381号土坑 (第51図)

E-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第89号土坑である。平面形は円形に近く、直径0.94m、深さは0.22mで、南側が深くなっている。遺物は出土しなかった。

第382号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第90号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸2.20m、短軸0.51m、深さは0.26mである。長軸方位はN-79°-Eを指す。縄文土器、天目茶碗片が出土した。

第382号土坑出土土器 (第28図48・第53図1)

48は、無筋RとLを横位施文するが、中間に見える結節回転痕は上位施文原体の自縛痕のようである。

1は、瀬戸・美濃の天目茶碗である。下半部のみで上半部は出土しなかった。近世前半のものと思われる。

第383号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第91号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.64m、短軸0.77m、深さは0.16mである。長軸

方位はN-89°-Wを指す。ごく僅かだが東半が深くなっている。縄文土器が出土した。

第383号土坑出土土器 (第28図49)

乱雑な集合沈線が多方向に施された49のみが図示できた。破片左上には小浮線が横位に貼付されているように見えるが、器面の荒れと見分けがつかなかった。

第384号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第92号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.36m、短径0.76m、深さは0.08mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。縄文土器極小片が出土した。

第385号土坑 (第51図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第93号土坑である。平面形は円形で、中位に緩やかな段を持つ。直径1.38m、深さは0.64mである。遺物は出土しなかった。

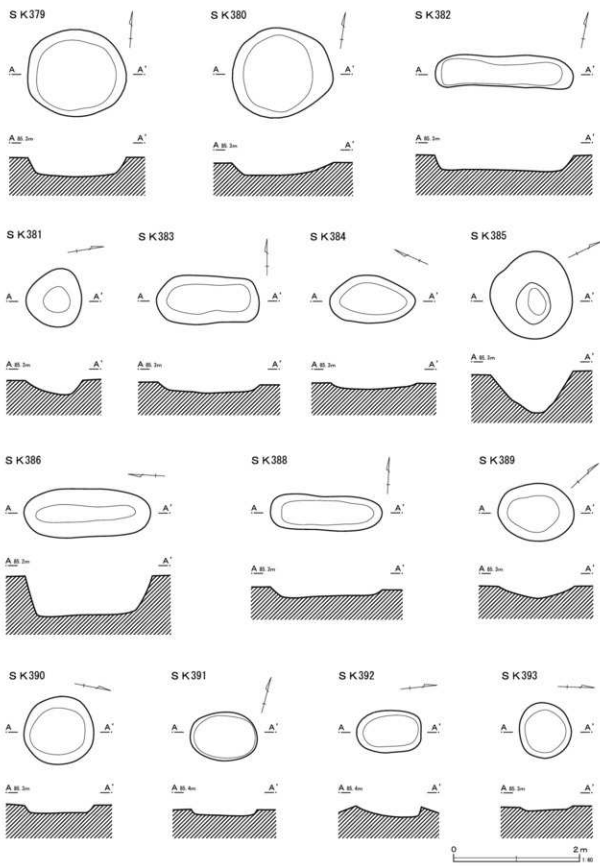
第386号土坑 (第51図)

F-10・11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第94号土坑である。平面形は楕円形で、長径2.02m、短径0.78m、深さは0.64mである。長軸方位はN-4°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第387号土坑 欠番

第388号土坑 (第51図)

E・F-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第96号土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸1.78m、短軸0.56m、深さは0.15mである。長軸方位はN-87°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



第51图 土坑 (23)

第389号土坑 (第51図)

E-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第97号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.21m、短径0.92m、深さは0.19mである。長軸方位はN-43°-Eを指す。床面は浅いすり鉢状で、中央付近が最も深くなっていた。遺物は出土しなかった。

第390号土坑 (第51図)

E-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第98号土坑である。平面形は円形で、直径1.10m、深さは0.12mである。遺物は出土しなかった。

第391号土坑 (第51図)

F-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第99号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.06m、短径0.77m、深さは0.08mである。長軸方位はN-75°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第392号土坑 (第51図)

F-11・12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第100号土坑である。平面形は楕円形で、長径1.30m、短径0.67m、深さは0.16mである。長軸方位はN-6°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第393号土坑 (第51図)

E-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第101号土坑である。平面形は円形で、直径0.86m、深さは0.06mである。遺物は出土しなかった。

第394号土坑 (第52図)

F-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第102号土坑である。平面形は円形で、直径1.17m、深さは0.40mである。遺物は出土しなかった。

第395号土坑 欠番

第396号土坑 (第52図)

F-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第104号土坑である。平面形は楕円形で、西側がピット状に深くなっている。長径1.07m、短径0.74m、深さは0.65mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第397号土坑 (第52図)

F-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第105号土坑である。平面形は楕円形で、底面は西側に偏っている。長径0.68m、短径0.51m、深さは0.32mである。長軸方位はN-61°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第398号土坑 (第52図)

F-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第106号土坑である。平面形は円形で、直径0.44m、深さは0.07mである。遺物は出土しなかった。

第399号土坑 (第52図)

H-13・14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第107号土坑である。平面形は歪んだ円形で、長径1.48m、短径1.36m、深さは0.22mである。縄文土器片がやや多く出土した。

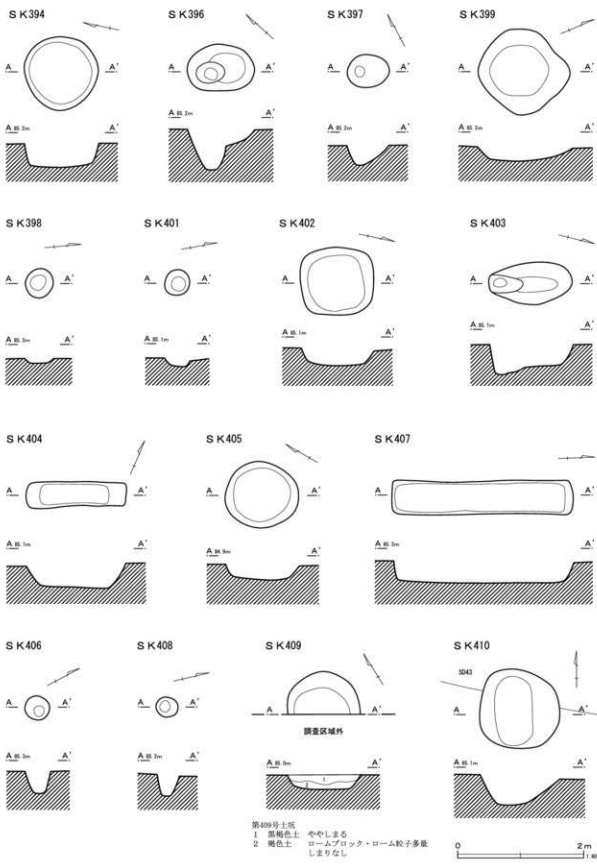
第400号土坑 欠番

第401号土坑 (第52図)

H-12グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第109号土坑である。平面形は円形で、直径0.40m、深さは0.13mである。遺物は出土しなかった。

第402号土坑 (第52図)

G-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第110号土坑である。平面形は隅丸方形で、東西・南北共に1.19m、深さは0.29mである。遺物は出土しなかった。



第52図 土坑 (24)

第403号土坑 (第52図)

G-10・11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第111号土坑である。平面形は楕円形で、南側が深くくなっている。長径1.32m、短径0.64m、深さは0.37～0.47mである。長軸方位はN-14°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第404号土坑 (第52図)

G-11、H-10・11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第112号土坑である。平面形は長方形で、長軸1.58m、短軸0.43m、深さは0.39mである。長軸方位はN-67°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第405号土坑 (第52図)

H-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第113号土坑である。平面形は円形で、直径1.12m、深さは0.25mである。遺物は出土しなかった。

第406号土坑 (第52図)

F-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第114号土坑である。平面形は円形で、直径0.40m、深さは0.34mである。遺物は出土しなかった。

第407号土坑 (第52図)

G-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第115号土坑である。平面形は長方形で、長軸2.89m、短軸0.53m、深さは0.34mである。長軸方位はN-2°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第408号土坑 (第52図)

G-13グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第116号土坑である。平面形は円形で、直径0.34m、深さは0.33mである。遺物は出土しなかった。

第409号土坑 (第52図)

C・D-13、D-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第117号土坑である。平面形は円形と思われ、南半は調査区域外にある。直径1.15m、深さは0.20mである。遺物は出土しなかった。

第410号土坑 (第52図)

G-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第118号土坑である。第43号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径1.28m、短径1.22m、深さは0.49mである。長軸方位はN-0°-Wを指す。遺物は出土しなかった。



第53図 土坑出土遺物

第8表 土坑出土遺物観察表(第29区)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	(3.0)	(5.0)	30	白・黒	良	淡黄	SK382	近世前半
2	鉄製品	釘	長さ(3.5)	幅0.5	厚さ0.4	重さ2.6				SK32	
3	鉄製品	釘	長さ(2.1)	幅0.3	厚さ0.3	重さ1.9				SK96	
4	鉄製品	釘	長さ(2.7)	幅0.5	厚さ0.5	重さ2.8				SK300	

4. 溝跡

溝跡は発掘調査時、内廻り地区で36条、外廻り地区で13条に遺構番号が付けられ、それぞれの地区が第1号溝跡から開始していた。整理作業時に改めて溝跡の番号を付ける際に、内廻り地区は発掘調査時に付けられた番号をそのまま使用し、続けて外廻り地区の溝跡に新たな番号を付けた。ただし混乱を避けるため、外廻り地区の溝跡の順序は変更せず、両地区共に欠番はそのままとした。したがって、第1号溝跡から第36号溝跡は内廻り地区で検出されたもので、第37号溝跡以降は外廻り地区で検出されたものである。

内廻り地区の第24・25・30～36号溝跡は、発掘調査時は道路跡(その1～9)として調査されており、溝跡の組み合わせで道路跡となる可能性が高い。しかし、硬化面や溝跡の組み合わせ等が明瞭ではないため、それぞれを溝跡として記載する。

第1号溝跡(第54・55区)

内廻り地区の北西側U・V・W-8、W-9、W・X-10グリッドに位置する。第289・290・291号土坑、第10号溝跡と重複し、第10号溝跡より古く、第290号土坑より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。U-8グリッドから東進

し、V-8グリッドで直角に曲がり、南進する。さらにW-10グリッド内で直角方向に曲がり、東進する。この曲がり角付近から第10号溝跡に切られるため、詳細は不明瞭となる。外廻り地区にある第46・47・48・50号溝跡と同一方向にある。検出された規模は全長20.8m、幅0.3～1.3m、確認面からの深さは0.15～0.35mである。底面の標高は西端が83.1m、南北ラインの中央が82.2m、南端が82.3mである。

遺物は近世以降と思われる陶器、磁器が各1点出土した。

第2号溝跡(第54・57区)

内廻り地区の北東端AB・AC・AD・AE-3グリッドに位置する。第286号土坑・2基のグリッドビットと重複し、その何れよりも新しい。東西方向に僅かに蛇行しながら延びるが、両端が調査区域外に続いたため、詳細は不明である。検出された規模は全長20.0m、幅1.2～2.2m、確認面からの深さは0.09～0.56mである。底面の標高は西端が83.0m、東端が82.4mである。

遺物は出土しなかった。

第3号溝跡 欠番

第4号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区のAA-13・14、AB・AC・AD-13グリッドに位置する。第24・25・32・33号溝跡と重複し、第24・25号溝跡より古く、第32号溝跡より新しい。第33号溝跡との関係は不明瞭である。西端は第33号溝跡の南端と直交し、途中で第25号溝跡に切られる。さらにAD-13グリッドで直角方向に曲がり、南走するが、すぐに第24号溝跡に切られる。第24号溝跡の東西方向の溝跡と並行する。検出された規模は全長36.0m、幅0.9～1.3m、確認面からの深さは0.54～0.60mである。底面の標高は西端が82.3m、南端が81.9mである。

遺物は出土しなかった。

第5号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の南東側AA・AB・AC-14グリッドに位置する。東端を第100号土坑に壊されている。東西方向に直線的に伸び、西端は第36号溝跡と接している。第6・7・8号溝跡と並行する。検出された規模は全長20.1m、幅0.3～0.5m、確認面からの深さは0.17～0.25mである。底面の標高は西端が82.9m、東端が83.8mである。

遺物は出土しなかった。

第6号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の南東側AB・AC-14グリッドに位置する。第78・94・215号土坑と重複し、第78号土坑よりも古く、第215号土坑より新しい。他の土坑との新旧関係は不明である。東西方向に緩やかに蛇行しながら延びる。第5・7・8号溝跡と並行する。検出された規模は全長15.1m、幅0.3～0.7m、確認面からの深さは0.08～0.22mである。底面の標高は西端が83.1m、東端が83.0mである。

遺物は出土しなかった。

第7号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の南東側AC・AD-14、AB・AC-15グリッドに位置する。第193・224・225号土坑と重複し、新旧関係は不明である。東西方向に緩やかに蛇行しながら走る。AD-14グリッド付近より東側は不明瞭となっている。第5・6・8号溝跡と並行する。検出された規模は全長27.3m、幅0.3～0.7m、確認面からの深さは0.04～0.13mである。底面の標高は西端が83.2m、東端が82.9mである。

遺物は出土しなかった。

第8号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の南東側AB・AC-15、AC・AD-14グリッドに位置する。第194・210号土坑と重複し、新旧関係は不明である。東西方向に走る。AC-14グリッドでいったん途切れ、AD-14グリッドで再び検出された。AD-14グリッドより先は検出できなかった。第5・6・7号溝跡と並行する。検出された規模は全長23.3m、幅0.3～0.6m、確認面からの深さは0.10～0.13mである。底面の標高は西端が83.2m、東端が83.1mである。

遺物は出土しなかった。

第9号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の中央部W-11・12、X-12・13グリッドに位置する。第292号土坑と重複し、本溝跡が古い。北西から南東方向に直線的に走る。検出された規模は全長26.0m、幅0.8～1.3m、確認面からの深さは0.14～0.36mである。底面の標高は北端が83.4m、南端が83.1mである。

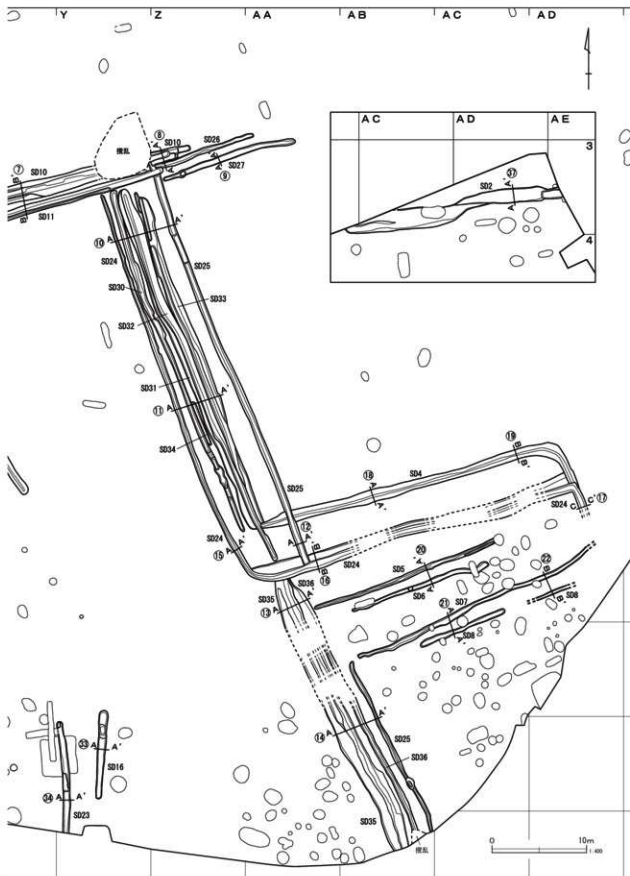
遺物は近代以降の陶磁器小片が出土した。

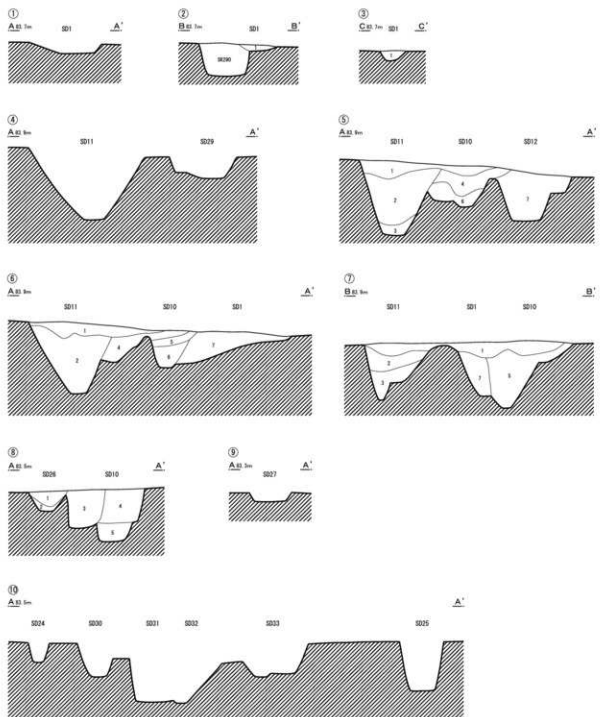
第10号溝跡 (第54・55図)

内廻り地区の北側Z-9、U・V・W・X・Y・Z-10、T・U-11グリッドに位置する。第1・11・12・25・26・29号溝跡と重複し、第11・



第54图 内廻り地区溝跡位置图





第1号横断 ②③

1 暗褐色土 ロームブロック(φ3~4cm)

第1・10・11・12号横断 ④⑤⑥

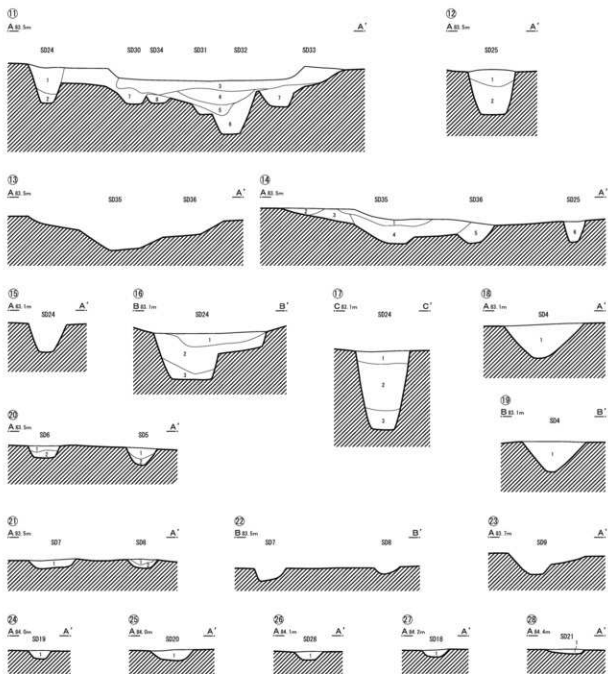
- 1 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm程)少量
 2 暗褐色土 ロームブロック(φ3~4cm)多量 しまりなし
 3 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)多量 しまりややあり
 4 暗褐色土 2層に広がるロームブロック少量
 5 暗褐色土 ローム粒子多量 均一的層 粘性ややあり
 6 暗褐色土 ロームブロック主体 しまりあり
 7 暗褐色土 ロームブロック(φ3~4cm)

第10・20号横断 ⑦

- 1 黒色土 ローム粒子
 2 褐色土 ロームブロック・黒色土
 3 暗褐色土 ロームブロック少量
 4 暗褐色土 ローム粒子多量 均一的層 粘性ややあり
 5 暗褐色土 ロームブロック主体 しまりあり
 理め戻しと考えられる

0 2m 1:50

第55図 溝路上層断面図(1)



- 第24・30・31・32・33・34号横断 ①
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりなし
 2 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm程)少量 しまりなし
 3 暗褐色土 ロームブロック(φ1-2cm)少量 しまりなし
 4 暗褐色土 ロームブロック(φ1-2cm)多量 しまりなし
 5 暗褐色土 ロームブロック(φ3-4cm)多量 しまりなし
 6 暗褐色土 ロームブロック主体 黒色土少量
 7 黄褐色土 ロームブロック少量 しまりややあり
 8 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

- 第25号横断 ②
 1 黒褐色土 ローム粒子
 2 黒褐色土 ロームブロック

- 第26・35・36号横断 ③
 1 暗褐色土 ロームブロック(φ2m程)少量
 2 黒色土 黄褐色粒子
 3 褐色土 フタロームブロック
 4 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)多量
 5 暗褐色土 ローム粒子(φ2cm程)
 6 黒褐色土 ロームブロック

- 第24号横断 ④⑤
 1 黒色土 ローム粒子・ロームブロック多量 かわらぬ
 2 黒色土 ロームブロック少量 かわらぬ
 3 褐色土 ロームブロック多量

- 第4号横断 ⑥⑦
 1 黒色土 ローム粒子少量 しまり強

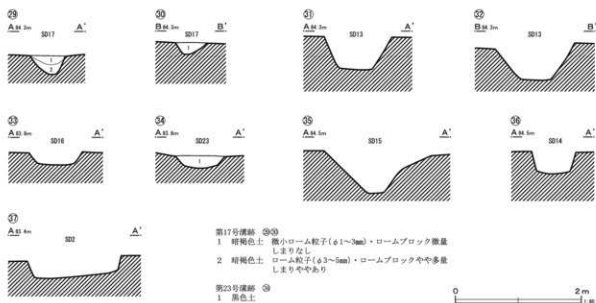
- 第5・6号横断 ⑧
 1 黒褐色土 ローム粒子少量 かわらぬ
 2 黒褐色土 ローム粒子

- 第7・8号横断 ⑨
 1 黒褐色土 ローム粒子少量 かわらぬ
 2 黄褐色土 ローム主体 ブロック多量

- 第18・19・20・21・28号横断 ⑩⑪⑫⑬⑭
 1 暗褐色土 微小ローム粒子(φ1-3mm) ロームブロック少量 しまりなし

0 2m 1m

第56図 溝土層断面図(2)



第57図 溝跡土層断面図(3)

26・29号溝跡より古く、第1・12号溝跡より新しい。他の溝跡との関係は不明である。西端は第29号溝跡に切られている。東西方向に延びるが、第11・12号溝跡に切られる。第1号溝跡の屈曲角部分を横切り、その東側は攪乱で壊されている。東端は第26号溝跡と接するようである。検出された規模は全長63.9m、幅0.7~1.9m、確認面からの深さは0.18~0.87mである。底面の標高は西端が83.3m、東端が82.1mである。

遺物は出土しなかった。

第11号溝跡(第54・55図)

内廻り地区の北側U・V・W・X・Y・Z-10、S・T・U・V-11グリッドに位置する。部分的に第10・25・29号溝跡と重複し、その何れよりも新しい。第10・12・26・29号溝跡と並行し、やや北東方向に延びる。途中、第1号溝跡の屈曲方向に沿うように蛇行する。西端は調査区域外に続き、東端は第26号溝跡に接する。検出された規模は全長68.0m、幅0.9~2.0m、確認面からの深さは0.43~1.14mである。底面の標高は西端が82.8m、東端が82.4mである。

遺物は出土しなかった。

第12号溝跡(第54・55図)

内廻り地区の北西側U・V・W-10グリッドに位置する。一部が第10号溝跡と重複し、本溝跡が古い。東西方向に延びるが、第10号溝跡に沿うように近接する。検出された規模は全長21.9m、幅1.0~1.7m、確認面からの深さは0.70~0.79mである。底面の標高は西端が82.5m、東端が82.5mである。

遺物は出土しなかった。

第13号溝跡(第54・57図)

内廻り地区の南側R・S・T-16グリッドに位置する。第2号住居跡、第17・21号溝跡と重複し、その何れよりも新しい。ほぼ東西方向に直線的に延びるが、両端が調査区域外へ続くため、詳細は不明である。検出された規模は全長22.3m、幅0.9~1.4m、確認面からの深さは0.42~0.56mである。底面の標高は西端が83.7m、東端が83.5mである。

遺物は出土しなかった。

第14号溝跡(第54・57図)

内廻り地区の南西側R-16・17グリッドに位置する。南北方向に延びるが、両端が調査区域外へ

続くため、詳細は不明である。検出された規模は全長2.0m、幅0.6～0.7m、確認面からの深さは0.32～0.37mである。底面の標高は84.0mである。

遺物は出土しなかった。

第15号溝跡（第54・57図）

内廻り地区の南西側P・Q-19グリッドに位置する。東西方向に伸びるが、両端が調査区域外へ続くため、詳細は不明である。検出された規模は全長7.8m、幅1.5～1.9m、確認面からの深さは0.54～0.70mである。底面の標高は西端が83.6m、東端が83.5mである。

遺物は出土しなかった。

第16号溝跡（第54・57図）

内廻り地区の南側Y-15・16グリッドに位置する。南北方向に走り、第23号溝跡と並行する。検出された規模は全長9.8m、幅0.6～0.8m、確認面からの深さは0.12～0.19mである。底面の標高は北端共に83.4mである。

遺物は出土しなかった。

第17号溝跡（第54・57図）

内廻り地区の南西側S・T・U-13、S-14・15・16グリッドに位置する。S-16グリッドから北進し、S-13グリッド内で直角に曲がり東進する。第13号溝跡と重複し、本溝跡が古い。南端は調査区域外へと続く。南北方向の溝跡が第21号溝跡と並行する。検出された規模は東西溝跡が全長21.1m、幅0.5～0.8m、南北溝跡が全長28.0m、幅0.5～0.7m、確認面からの深さは東西溝跡が0.18～0.30m、南北溝跡が0.11～0.20mである。底面の標高は両端が83.9m、屈曲部分が84.0mである。

遺物は出土しなかった。

第18号溝跡（第54・56図）

内廻り地区の南西側S-12、T-12・13、U-

13グリッドに位置する。S-12グリッドから東進し、T-12グリッド内で直角に曲がり、南走する。検出された規模は全長19.8m、幅0.3～0.4m、確認面からの深さは0.08～0.14mである。底面の標高は西端、南端共に83.9mである。

遺物は出土しなかった。

第19号溝跡（第54・56図）

内廻り地区の南西側U-12・13グリッドに位置する。南北方向に直線的に伸び、第20号溝跡と並行する。検出された規模は全長9.4m、幅0.3～0.5m、確認面からの深さは0.10～0.15mである。底面の標高は83.7mである。

遺物は出土しなかった。

第20号溝跡（第54・56図）

内廻り地区の南西側U-12・13、V-12・13グリッドに位置する。北端を第181号土坑に壊されている。南北方向に伸び、第19号溝跡と並行する。検出された規模は全長14.3m、幅0.7～0.8m、確認面からの深さは0.11～0.15mである。底面の標高は北端が83.6m、南端が83.7mである。

遺物は出土しなかった。

第21号溝跡（第54・56図）

内廻り地区の南西側S-14・15・16グリッドに位置する。第13号溝跡、第268号土坑と重複し、第13号溝跡より古く、第268号土坑との関係は不明である。南北方向に走り、南端は調査区域外へと続く。第17号溝跡の南北方向の溝跡と並行する。検出された規模は全長22.8m、幅0.3～0.7m、確認面からの深さは0.08～0.11mとかなり浅い。底面の標高は北端共に84.1mである。

遺物は出土しなかった。

第22号溝跡 欠番

第23号溝跡 (第54・57図)

内廻り地区の南側Y-16・17グリッドに位置する。第1・3号性格不明遺構と重複し、その第1号性格不明遺構よりも新しく、第3号性格不明遺構との新旧関係は不明である。第16号溝跡と並行する。南北方向に直線的に伸び、南端は調査区域外へと続く。検出された規模は全長11.8m、幅0.6～0.7m、確認面からの深さは0.16～0.32mである。底面の標高は北端が83.3m、南端が83.2mである。遺物は出土しなかった。

第24号溝跡 (第54～56図)

内廻り地区のY-10・11・12、Z-12・13・14、AB・AC・AD-13、AA・AB・AC-14グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その1であった。第25号溝跡とは東西方向の溝跡で、第4号溝跡とは最後の曲がり角部分で重複し、これらの溝跡よりも新しい。第11号溝跡と直角にやや南東側に走る。AA-14グリッド付近で直角方向に曲がり、東進する。途中は断続的に検出されているが、1条の溝跡と考えられる。AB-13グリッドで再び直角方向に曲がり南進するが、その先は不明瞭であり検出できなかつた。南北方向の溝跡が第25・30・31・32・33・34号溝跡と並行し、東西方向の溝跡が第4号溝跡と並行する。検出された規模は全長60.9m、幅0.3～1.9m、確認面からの深さは北端が0.22m、屈曲部分が0.57m、南端が1.25mである。底面の標高は北端が82.6m、南端が81.2mである。遺物は出土しなかった。

第25号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区のZ-10・11、Z・AA-12、AA-13・14、AB-15・16・17グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その9であった。第4・10・11・24号溝跡と重複し、第10・11・24号溝跡より古く、第4号溝跡より新しい。第24・30・31・

32・33・34・35・36号溝跡と並行し、最も東側に位置する。北端は、第10・11号溝跡と重複しているため不明である。そこからやや南東側に走り、第24号溝跡に切られるように途切れてしまうが、AB-15グリッドで再び検出され、第35・36号溝跡と並行し、南端は調査区域外まで続いている。検出された規模は全長76.2m、幅0.3～0.9m、確認面からの深さは0.47～0.84mである。底面の標高は北端が82.2m、南端が82.3mである。

遺物は出土しなかった。

第26号溝跡 (第54・55図)

内廻り地区の北東側Z-9・10、AA-9グリッドに位置する。第10・11・25号溝跡と重複し、その何れよりも古い。西端は第10・11・25号溝跡と接し、第27号溝跡と並行する。検出された規模は全長13.3m、幅0.4～0.8m、確認面からの深さは0.05～0.32mである。底面の標高は西端が82.7m、東端が83.0mである。

遺物は出土しなかった。

第27号溝跡 (第54・55図)

内廻り地区の中央Z-9・10、AA-9・10グリッドに位置する。やや北東方向に走り、第26号溝跡と並行する。検出された規模は全長14.5m、幅0.4～0.8m、確認面からの深さは0.07～0.13mである。底面の標高は82.9mである。

遺物は出土しなかった。

第28号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区の南西側U-13・14、V-13・14グリッドに位置する。南北方向に走り、第20号溝跡と並行する。検出された規模は全長9.5m、幅0.3～0.5m、確認面からの深さは0.09～0.11mである。底面の標高は83.7mである。

遺物は出土しなかった。

第29号溝跡 (第54・55図)

内廻り地区のS・T・U-11グリッドに位置する。第10・11・12号溝跡と重複し、第11・12号溝跡より古く、第10号溝跡より新しい。東西方向に伸び、東端は第11号溝跡に切られる。検出された規模は全長16.8m、幅0.8～1.1m、確認面からの深さは0.26～0.74mである。底面の標高は西端が82.9m、第11号溝跡との交差付近で82.8mである。

遺物は出土しなかった。

第30号溝跡 (第54～56図)

内廻り地区のY-10・11、Z-11・12・13・14グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その2であった。北端は第11号溝跡と接している。第24・25・31・32・33・34号溝跡と並行し、左右を第24号溝跡と第31・34号溝跡に挟まれる。検出された規模は全長38.4m、幅0.5～0.9m、確認面からの深さは0.38～0.49mである。底面の標高は北端が82.3m、南端が82.3mである。

遺物は出土しなかった。

第31号溝跡 (第54～56図)

内廻り地区のY-10・11、Z-11・12・13、AA-13・14グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その4であった。第32・34号溝跡と重複し、第34号溝跡より新しい。第24・25・30・32・33・34号溝跡と並行し、左右を第32号溝跡と第30・34号溝跡に挟まれる。検出された規模は全長38.4m、幅0.2～0.6m、確認面からの深さは溝跡の中央で0.75mである。底面の標高は北端が82.2mである。

遺物は出土しなかった。

第32号溝跡 (第54～56図)

内廻り地区のY-10・11、Z-11・12・13、AA-13・14グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その5であった。第4・31・33号溝跡と

重複し、第31号溝跡より新しく、第4・33号溝跡より古い。第24・25・30・31・33・34号溝跡と並行し、左右を第31号溝跡と第33号溝跡に挟まれる。第4号溝跡を切りながら南走する。検出された規模は全長42.2m、幅0.5～1.3m、確認面からの深さは0.38～1.04mである。底面の標高は北端が82.0m、南端が82.3mである。

遺物は出土しなかった。

第33号溝跡 (第54～56図)

内廻り地区のY-10・11、Z-10・11・12・13、AA-13グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その6であった。第4・32号溝跡と重複し、第32号溝跡より古く、第4号溝跡より新しい。第24・25・30・31・32・34号溝跡と並行する。検出された規模は全長37.2m、幅1.0～1.3m、確認面からの深さは0.29～0.56mである。底面の標高は北端が82.5m、南端が82.6mである。

遺物は出土しなかった。

第34号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区のZ-12・13グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その3であった。左右を第30・31号溝跡に挟まれ、その何れよりも古い。第24・25・30・31・32・33号溝跡と並行する。検出された規模は全長5.1m、幅0.3m、確認面からの深さは0.50mである。底面の標高は中央部で82.3mである。

遺物は出土しなかった。

第35号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区のAA-14・15・16、AB-15・16・17グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その7であった。第24・36号溝跡と重複し、第24号溝跡より古く、第36号溝跡より新しい。第24号溝跡から南北方向に伸び、南端は調査区域外に続いている。第24号溝跡の南北方向の溝跡や第25・

30・31・32・34号溝跡と直線方向に伸び、第25・36号溝跡と並行する。検出された規模は全長30.9m、幅2.1～2.5m、確認面からの深さは0.36～0.60mである。底面の標高は北側が82.6m、南側が82.7mである。

遺物は出土しなかった。

第36号溝跡 (第54・56図)

内廻り地区のAA-14・15、AB-15・16・17グリッドに位置する。発掘調査時には道路跡その8であった。第24・35号溝跡と重複し、その何れよりも古い。第25・35号溝跡と並行し、その間に位置する。第24号溝跡の南側から南北方向に伸び、南端は調査区域外まで続いている。第25・30・31・32・33号溝跡の直線方向に伸びる。検出された規模は全長29.8m、幅0.6～0.9m、確認面からの深さは0.33～0.36mである。底面の標高は北端が82.7m、南側が82.7mである。

遺物は出土しなかった。

第37号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区の南端I-18・19グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第1号溝跡である。第294号土坑と重複し、新旧関係は不明である。両端が調査区域外へ続いたため、詳細は不明である。第38号溝跡と並行する。検出された規模は全長5.4m、幅1.7m前後、確認面からの深さは0.19～0.27mである。底面の標高は84.4mである。

遺物は出土しなかった。

第38号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区の南端H・I-18・19グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第2号溝跡である。第293号土坑と重複し、新旧関係は不明である。両端が調査区域外へ続いたため、詳細は不明である。第37号溝跡と並行する。検出された規模は全長4.5m、幅0.6～0.9m、確認面からの深さは0.10～

0.15mである。底面の標高は84.6mである。

遺物は出土しなかった。

第39号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区のG-15、H-15・16、I-16・17、J-17グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第3号溝跡である。北端は第42号溝跡に切られている。G-15グリッド付近で直角に曲がり、南東方向に伸びる。東端は調査区域外まで続いている。第2次～第5次調査の溝跡の中に本溝跡と一直線となるものがあり、同一の溝跡と考えられる。検出された規模は全長38.5m、幅1.9～2.9m、確認面からの深さは0.11～0.35mである。底面の標高は北端が84.6m、東壁で84.5mである。

遺物は近世以降と考えられる天目茶碗、陶磁器、内耳鍋、瓦のほかにも須恵器片、土師器片等が出土した。

第40号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区のD-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第4号溝跡である。第41号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。D-14グリッドの南壁から南北方向に走る。北端は攪乱で壊されている。検出された規模は全長5.2m、幅1.6～1.7m、確認面からの深さは0.27～0.52mである。底面の標高は84.8mである。

遺物は出土しなかった。

第41号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区のD・E-14、F-13・14、G・H・I・J-14グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第5号溝跡である。第362号土坑、第40・43号溝跡と重複する。第43号溝跡より古く、他の遺構との新旧関係は不明である。D-14グリッドの西壁より東西方向に伸びるが、調査区域外に伸び、F-14グリッドで再び検出される。東端は攪乱で壊されている。第2次～第5次調査の溝

跡にこれと一直線となるものがあり、同一の溝跡と考えられる。検出された規模は全長65.0m、幅0.7~1.3m、確認面からの深さは0.24~0.26mである。底面の標高は西端が85.1m、東端が84.4mである。

遺物は周辺からの混入と思われる縄文土器、石器が出土した。

第42号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区のE-14、F-14・15、G-14・15、H・I-15、I-16、J-15・16グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第6号溝跡である。第39号溝跡と重複し、これよりも新しい。第43号溝跡と並行するように東西方向に伸びる。西端は直角方向に屈曲し、調査区域外に続いている。東端は攪乱で壊されていた。検出された規模は全長45.0m、幅2.8~4.0m、確認面からの深さは0.65~0.70mである。底面の標高は西端が84.4m、東端が84.1mである。

遺物は周辺からの混入と思われる縄文土器が1点出土した。

第43号溝跡 (第59・60図)

外廻り地区のB・C・D-13、E-13・14、F・G-14、H-14・15、I-14・15、J-15グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第7号溝跡である。第5号集石土坑、第41号土坑、第41号溝跡と重複する。第5号集石土坑、第41号溝跡

より新しく、第41号土坑との新旧関係は不明である。B-13グリッドの調査区西壁から僅かに蛇行しながら東進する。東端は攪乱で壊されていた。第2次~第5次調査の溝跡に本溝跡と一直線となるものがあり、同一の溝跡と考えられる。検出された規模は全長79.2m、幅1.5~3.8m、確認面からの深さは0.29~1.03mである。底面の標高は西端が84.9m、東端が83.7mである。

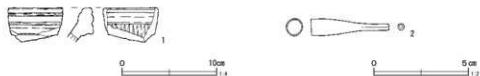
遺物は周辺からの混入と思われる備前の摺鉢(第58図1)や須恵器製の破片などが出土した。

第44・45号溝跡 欠番

第46号溝跡 (第59・61図)

外廻り地区のG-9・10・11、H・I・J-11、K-10・11、M・N-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第10号溝跡である。第47・48・49・50号溝跡と複雑に重複しつつ並行する。G-9グリッドから南進し、G-11グリッド付近で直角方向に曲がり東に伸びる。途中、第47・48号溝跡によって切られ、未調査部分で途切れるが、東側の調査区で再び検出される。東側の調査区では第47号溝跡と第48号溝跡に扶まれ、一部攪乱で壊される部分もあるが、東西方向に伸び、調査区域外まで続く。検出された規模は全長94.5m、幅0.4~1.1m、確認面からの深さは0.18~0.95mである。底面の標高は北端が84.9m、東端が83.1mである。

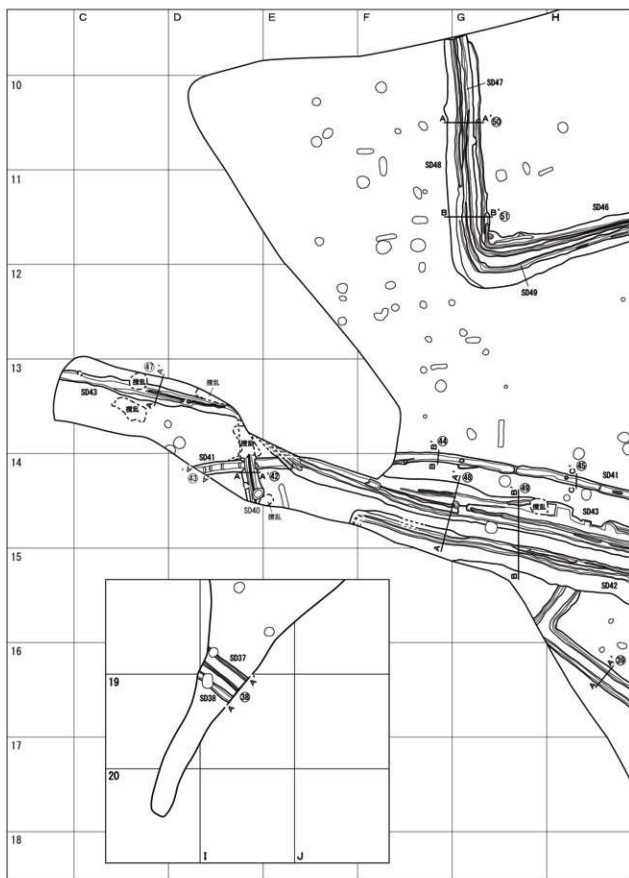
遺物は、第46号溝跡から第49号溝跡までが一括



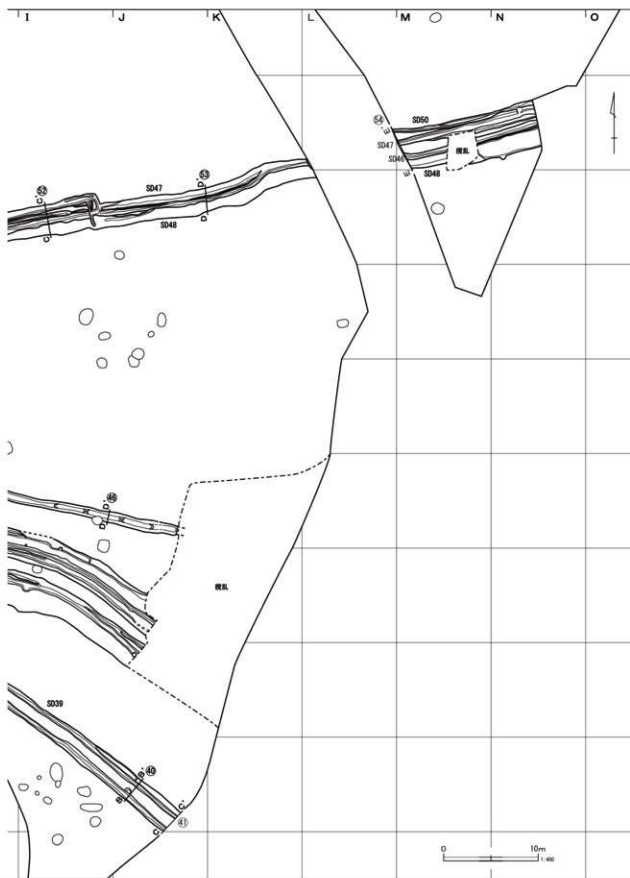
第58図 溝跡出土遺物

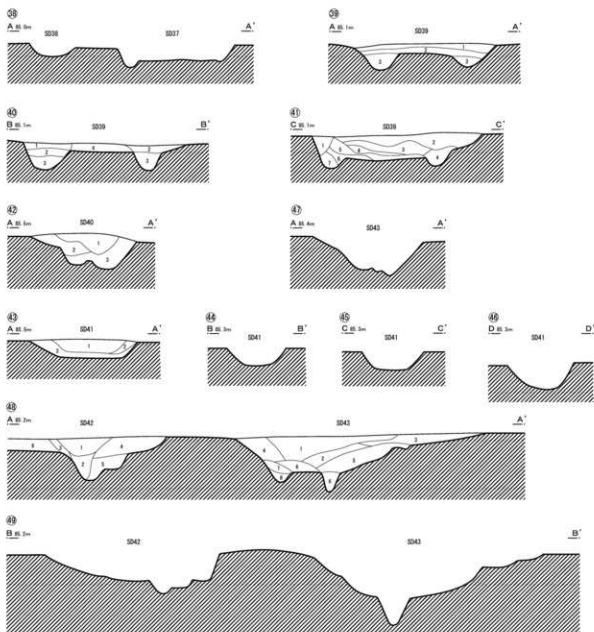
第9表 溝跡出土遺物観察表 (第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	備前	摺鉢	—	3.0	—	—	石・長白・黒	良	暗赤褐色(鉄物)	SD43	近世前半
2	銅製品	煙管吸口	径0.9	長さ4.1	重さ2.8					SD46~49	全体に緑青



第59图 外堀り地区清跡位置图





第39号溝跡 ㊦

- 1 黄褐色粘土 プロック・粒子・褐色土混層
- 2 褐色土 ハードロームブロックやや多量
- 3 褐色土 ロームブロック極多量

第39号溝跡 ㊧

- 1 黄褐色粘土 ハードロームブロック主体層 褐色土少量
- 2 褐色土 ハードロームブロックやや多量
- 3 黄褐色粘土 ハードロームブロック混層 褐色土混入
- 4 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

第39号溝跡 ㊨

- 1 褐色土 ソフトローム粒子少量 ハードロームブロック微量
- 2 褐色土 ソフトローム粒子少量 ハードロームブロック微量
- 3 褐色土 ソフトローム混成土 ハードロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ソフトローム粒子少量 ハードロームブロック微量
- 5 褐色土 ソフトローム粒子・ハードロームブロックやや多量
- 6 黄褐色土 ハードロームブロック多量 ソフトローム粒子少量
- 7 褐色土 ソフトローム粒子多量 ハードロームブロックやや多量

第40号溝跡 ㊩

- 1 黄褐色土 ローム粒子多量 炭化粒子少量 しまりあり
- 2 黄褐色土 1層に比べやや色が薄い ローム粒子(φ3mm程度)多量 しまりあり
- 3 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm程度)多量 しまりなし

第41号溝跡 ㊪

- 1 黄褐色土 ややしまる
- 2 暗褐色土 ローム粒子やや多量 しまりなし
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまりなし

第42号溝跡 ㊫

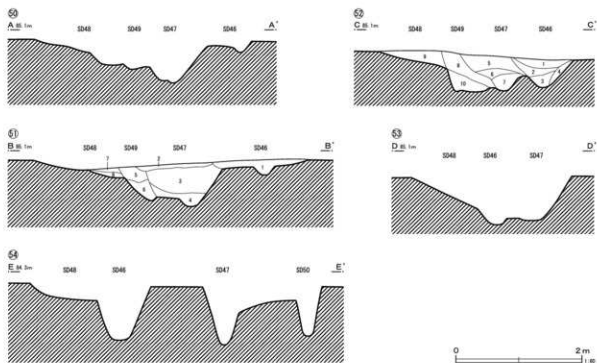
- 1 黒色土 ローム粒子少量 しまりなし
- 2 黒色土 ローム粒子少量(1層より多い) しまりなし
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりなし
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量 しまりややあり
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量 しまりややあり
- 6 黄褐色土 ローム粒子少量 しまりややあり

第43号溝跡 ㊬

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ハードロームブロック多量
- 7 黄褐色土 ローム粒子少量 暗一性の高い層
- 8 暗褐色土 ローム粒子多量



第60図 溝路土層断面図(4)



第46～49号溝跡 ⑤

- 1 褐色土 ローム層ほとんど含まず
- 2 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量 黒色土少量
- 3 明褐色土 非常に固くしまった土
- 4 明褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子多量
- 5 褐色土 ローム粒子多量
- 6 明褐色土 ローム粒子多量 ブロック少量
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子多量
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量

第48～49号溝跡 ⑥

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 粘性なし
- 2 褐色土 ローム粒子極少量 粘性なし
- 3 褐色土 ローム粒子やや多量 粘性なし
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 5 黒褐色土 ロームブロック少量 粘性なし
- 6 黒褐色土 ロームブロックやや少量
- 7 暗褐色土 ローム粒子
- 8 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック多量
- 10 褐色土 ロームブロック多量

第61図 溝跡土層断面図(5)

で取り上げられており、各々の溝跡に区別することが出来ない。煙管吸口(第58図2)、天目茶碗片、陶器片のほかには厩辺からの混入と思われる縄文土器、石器などが出土した。

第47号溝跡 (第59・61図)

外廻り地区のG-9・10・11、H・I・J-11、K-10・11、M・N-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第11号溝跡である。第46・48・49・50号溝跡と重複しつつ並行し、左右を第49号溝跡と第46号溝跡に挟まれる。ほぼ第46号溝跡と同様な流路を辿る。東側の調査区では第46号溝跡と第50号溝跡に挟まれ、途中で攪乱に壊され、調査区域外まで続く。検出された規模は全長96.7m、幅0.4～0.8m、確認面からの深さは0.55～1.03mで

ある。底面の標高は北端が84.3m、東端が83.1mである。

第48号溝跡 (第59・61図)

外廻り地区のF-9・10・11、G-9・10・11・12、H-11・12、I・J-11、K・L-11・12、M・N-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第12号溝跡である。第46・47・49・50号溝跡と重複しつつ並行し、その一番外側を通る。ほぼ第46・47号溝跡と同様な流路を辿る。東側の調査区では途中で攪乱に壊され、調査区域外まで続く。検出された規模は全長100.5m、幅0.4～2.3m、確認面からの深さは0.10～0.46mである。底面の標高は北端が84.6m、東端が83.7mである。

第49号溝跡 (第59・61図)

外廻り地区のF-9、G-9・10・11・12、H・I-11グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第13号溝跡である。第46・47・48号溝跡と複雑に重複しつつ並行する。ほぼ第46・47・48号溝跡と同様な流路を辿るが、東端は第47・48号溝跡によって切られるため不明である。検出された規模は全長50.0m、幅0.3~1.0m、確認面からの深さは0.59~0.75mである。底面の標高は北端が84.3m、東西溝跡の中央部が84.1mである。

5. 性格不明遺構

第1号性格不明遺構 (第62図)

内廻り地区のX・Y-16グリッドに位置する。第23号溝跡、第2号性格不明遺構と重複し、その何れよりも古い。平面形は北辺と南辺に段を持つ長方形で、西辺側約0.8m部分が深くなっている。土層観察ではこの部分は後から掘り込まれていた。南北4.23m、東西3.60m、深さ0.16~0.34mである。遺物は出土しなかった。

第2号性格不明遺構 (第62図)

内廻り地区のX-15・16グリッドに位置する。第138号土坑、第1・3号性格不明遺構と重複し、

6. ピット

検出されたピットは合計30基である。規則性は認められず、建物跡を構成するようなものは確認できなかった。いずれのピットからも遺物の出土

第50号溝跡 (第59・61図)

外廻り地区の東側の調査区のL・M・N-10グリッドに位置する。発掘調査時は外廻り第14号溝跡である。第47号溝跡と重複し、新旧関係は不明である。第46・47・48号溝跡と並行し、東西方向に延びる。両端が調査区域外に延びているため詳細は不明である。検出された規模は全長14.9m、幅0.3~0.4m、確認面からの深さは0.78~0.93mである。底面の標高は西端が83.2m、中央部が83.1mである。

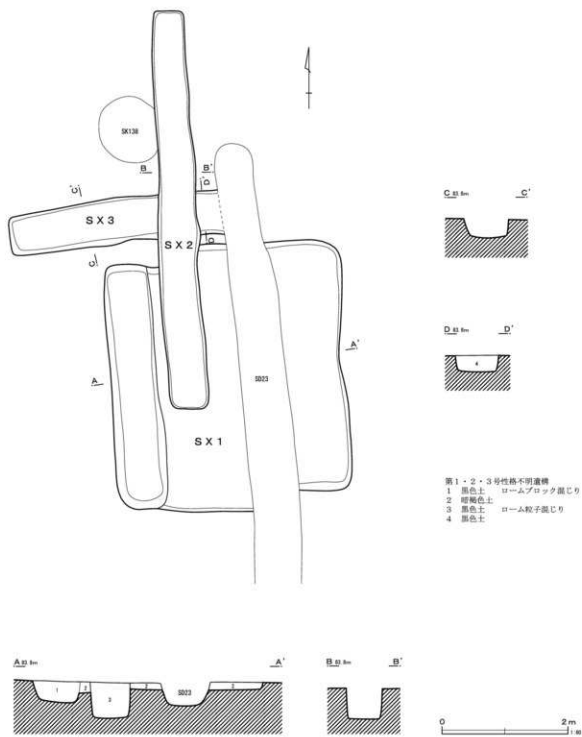
遺物は出土しなかった。

第1号性格不明遺構より新しく、第138号土坑、第3号性格不明遺構との新旧関係は不明である。平面形は南北に長い溝状で、南北6.30m、東西0.56m、深さ0.49mである。遺物は出土しなかった。

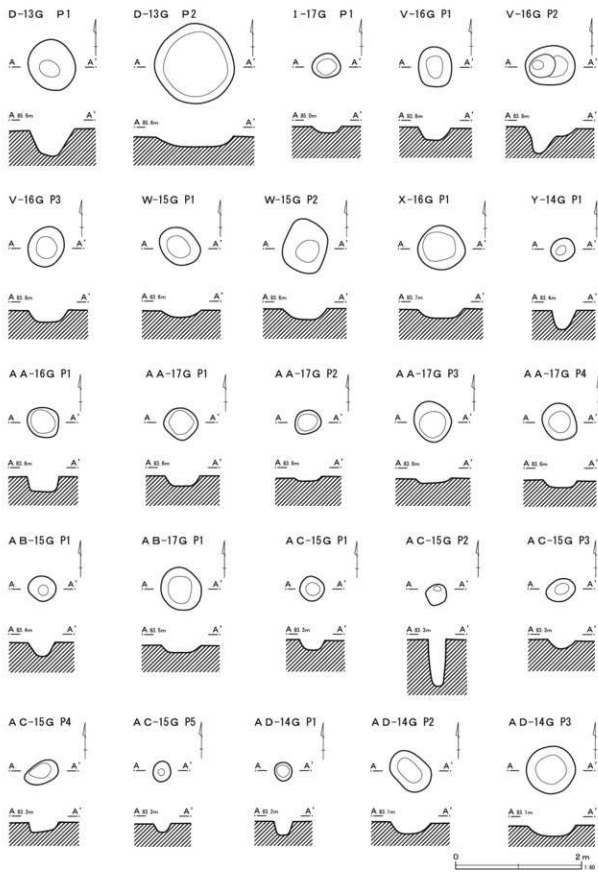
第3号性格不明遺構 (第62図)

内廻り地区のX・Y-16グリッドに位置する。第23号溝跡、第2号性格不明遺構と重複し、新旧関係は不明である。平面形は東西に長い溝状で、東西3.40m、南北0.70m、深さ0.28mである。遺物は出土しなかった。

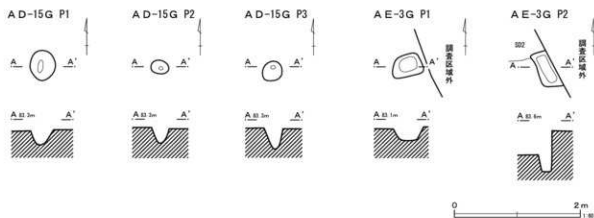
はなく、時期を確定できるものはなかったが、覆土の状況から近世以降のものと思われる。



第62図 性格不明遺構



第63図 ピット (1)



第64図 ビット (2)

第10表 ビット計測表

グリッド	ビットNo.	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
D-13	1	0.80	0.71	0.45	外廻り地区
	2	1.27		0.18	外廻り地区
I-17	1	0.46	0.38	0.10	外廻り地区
V-16	1	0.56	0.54	0.20	内廻り地区
	2	0.80	0.62	0.13~0.42	内廻り地区
	3	0.66	0.55	0.19	内廻り地区
W-15	1	0.66	0.53	0.13	内廻り地区
	2	0.88	0.74	0.19	内廻り地区
X-16	1	0.76	0.72	0.16	内廻り地区
Y-14	1	0.38	0.36	0.37	内廻り地区
AA-16	1	0.54	0.48	0.24	内廻り地区
AA-17	1	0.55	0.50	0.19	内廻り地区
	2	0.42	0.36	0.06	内廻り地区
	3	0.66	0.57	0.07	内廻り地区
	4	0.60	0.50	0.12	内廻り地区
AB-15	1	0.45	0.40	0.21	内廻り地区
AB-17	1	0.71	0.64	0.13	内廻り地区
AC-15	1	0.40		0.17	内廻り地区
	2	0.36	0.34	0.74	内廻り地区
	3	0.47	0.34	0.16	内廻り地区
	4	0.56	0.34	0.20	内廻り地区
	5	0.33	0.28	0.15	内廻り地区
AD-14	1	0.30	0.28	0.22	内廻り地区
	2	0.72	0.52	0.18	内廻り地区
	3	0.78	0.76	0.17	内廻り地区
AD-15	1	0.48	0.38	0.24	内廻り地区
	2	0.28	0.22	0.25	内廻り地区
	3	0.34	0.32	0.34	内廻り地区
AE-3	1	0.52	0.42	0.22	内廻り地区
	2	0.70	0.29	0.29	内廻り地区

7. グリッド出土遺物

グリッド出土遺物は、グリッド単単位で取り上げで遺構に帰属できなかった遺物と、溝跡等からの出土だがその遺構には伴わないと判断された遺物も含まれている。

土器 (第65・66図)

遺構外より出土した縄文土器は、すべて前期に属するものである。大半は後半にあたる竹管文系から、前期末にかけてのものだが、1～3は中葉の黒浜期の所産である。

1は単節RLにLを2条順方向に附加しており、1段4条の効果を得ている。これに対し、2は無節L、3は単節LRの破片である。

竹管文系から前期末葉の土器群に関しては、諸磯a初前期から十三菩提期の破片が少数ずつ出土しており、その間も間断なく人々が八木上遺跡に立ち寄った痕跡を残す。そのため、とくに縄文施文土器については、それぞれの時期を特定できない。有文土器の比率からすると、諸磯a後半と諸磯cの後半に主体があると考えられる。

4は竹管文系初前期の肋骨文が平行沈線化した構成である。また、5～47は爪形文を文様描線とするもので、出土土器の中でもっとも比率の高い系統の器種である。

爪形文は、曲線文が多く、5～7のような波状口縁と組になり、15・18のような大区画の口縁部文様帯を形成するものが多い。また、13・14のように、間隔をかけた平行沈線のみが観察できるものは、もっぱら縄文地文が入り込み、おそらく平縁であるものが多いだろう。

これに対し、平行沈線を施すものは、レンズ状文を基調としているものの、56・57のような単発の沈線施文も存在する。また、58・59のような浮線文系統の個体はわずかしか出土していない。

60～82は縦斜位の集合沈線で文様構成するもので、60～66は耳たぶ状やボタン状・ミミズ腫れ状の小貼付を加えるものである。口縁部は平縁が

もっぱらで、65は一際密に貼付が加えられる。また、67はミミズ腫れの貼付が省略され刺突のみが施されたもの、80～82は東関東系の押上文が口縁部に並列化したもの、83は破片内では押上文のみが観察できるものである。

集合沈線を施文するものうち、75～79は線が太く深く印されており、これらに貼付文は伴わないと考えられる。また、84は三角印刻文が加えられており、十三菩提式にあたるだろう。

85～131は縄文のみが観察できるものである。このうち、85～94は羽状の構成をとるものと、それらと同一個体のもので、もっぱら無節斜縄文が施文されている。擦りの異なる原体間を結束した痕跡は87・89などの短い原体で認めることができる。一方、95～113は無節の単方向施文が観察できるものである。口縁部が内屈する95～97は基本的に波状口縁となるが、単純反の98も同形状の口縁部となる。原体はLの横位施文がすべてで、99のように結束痕を、さらに100のように結節痕を残すものもある。114～131は単節斜縄文を施すもので、116と底部の131が左右擦りの原体を併用する他は、114～124がRL、125～130がLRの縄を押捺している。129は条間に附加縄のような痕跡が残るが、肉眼では特定できなかった。

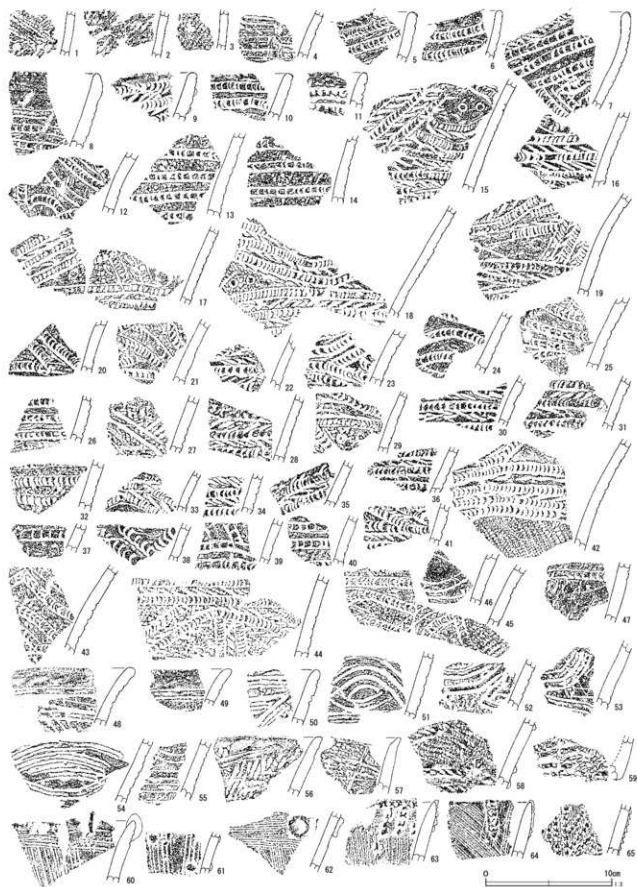
石器 (第67～68図)

1は黒曜石製の石鎌である。半分欠損しているが、幅広になるようである。基部の挟りが浅く、全面に押玉剥離が行われている。

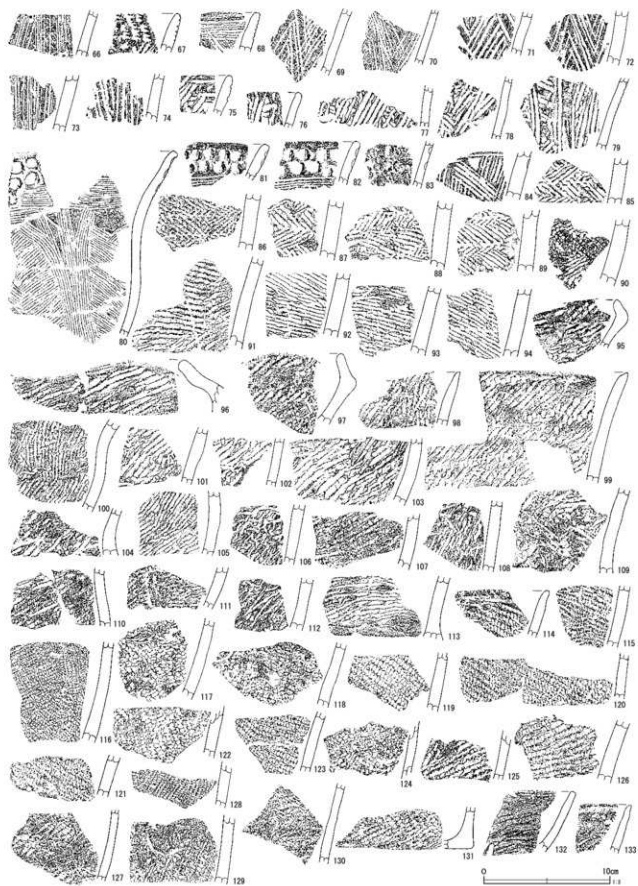
2は石錐である。小形な砂岩の垂門礫の両端に挟りが入っている。

3～17までは、打製石斧である。3～8・14・15は傍形、10～13・16は短筒形である。

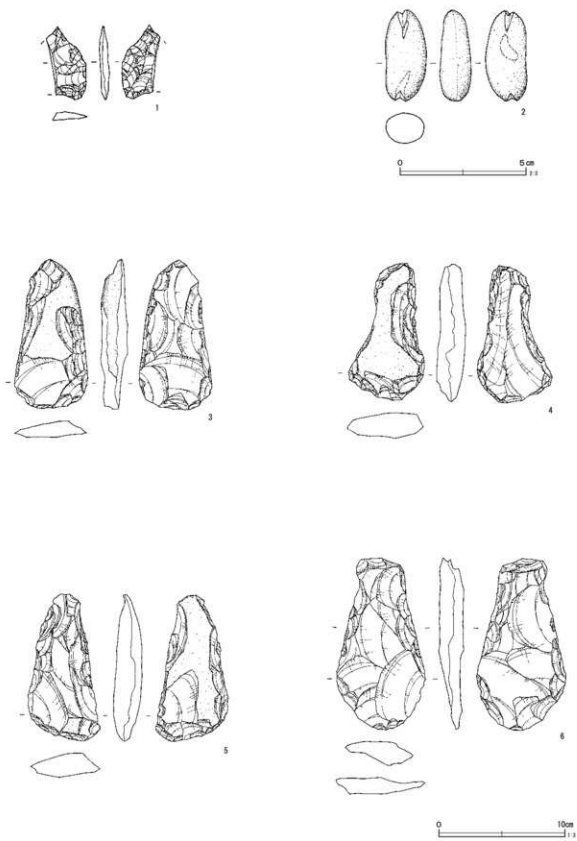
3は厚めの分節隙を使用する。刃部は片凸刃である。4は分節隙を用い、左右非対称である。基部が細く造り出しており、刃部が緩い曲線の両凸刃をもつ。5は大型剥片を使用し、主に主要剥離



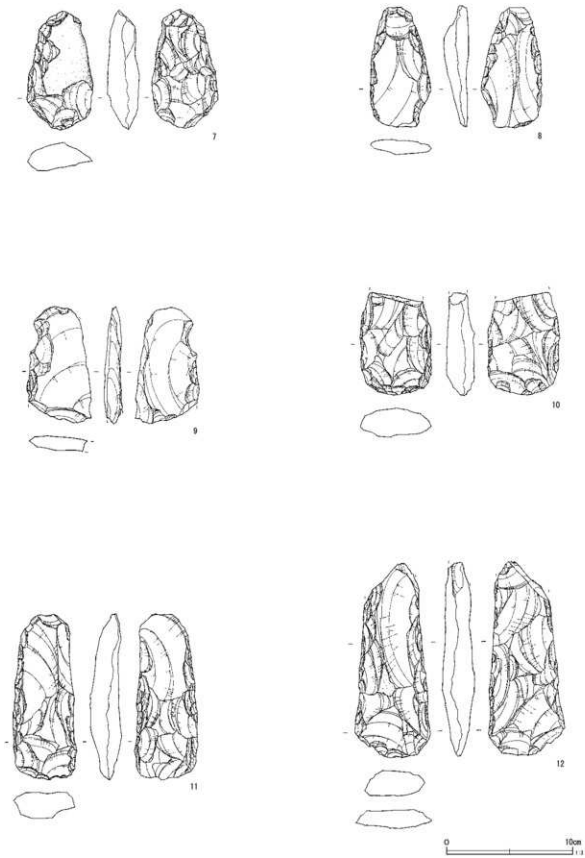
第65図 グリッド出土遺物(1)



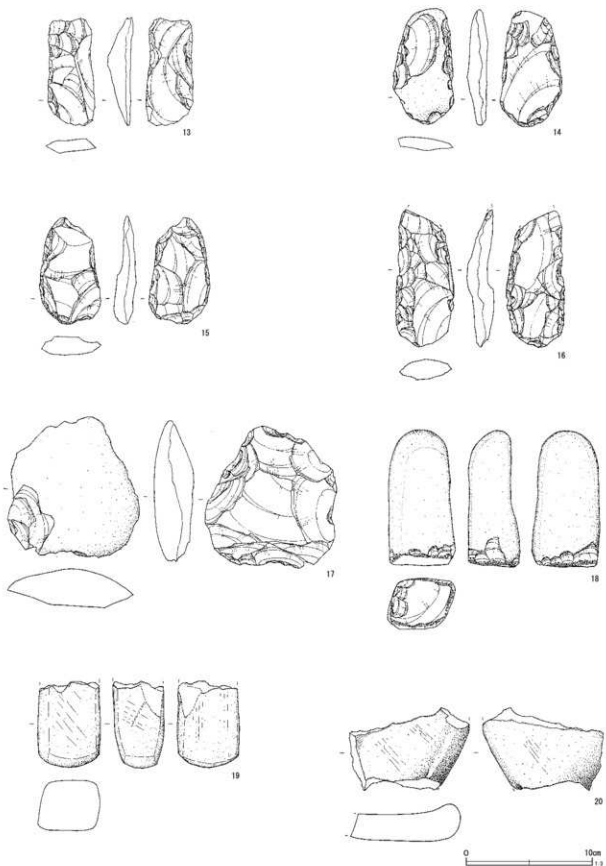
第66図 グリッド出土遺物(2)



第67図 グリッド出土石器（1）



第68図 グリッド出土石器(2)



第69図 グリッド出土石器(3)

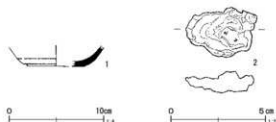
面側から調整加工が施されている。左右非対称で刃部が緩い曲線の両凸刃をもつ。6は13cmと大形であり、両面に入念な調整加工が施されている。刃部はかなり薄く、円刃である。7はやや楕円形に近い楕形である。刃部は円刃である。8は剥片を使用し、周縁部のみ調整加工が施されている。刃部は平刃である。9は基部の一部のみが残存するため、全体の形状は不明である。10は上半部が欠損するが、両側縁が平行で、刃部が平刃のため、短冊形に近いようである。11は入念な調整加工によって、13cmと大形の短冊形を作り上げている。刃部は平刃である。12は基部を一部欠損するが、15cmと大形の短冊形である。13は剥片を横位に用いるが、主に側面に調整加工が施されている。14は分割線を用いるが、周縁部のみ調整加工が施されている。刃部は円刃をもつ。15は側縁部に調整加工を施し、やや楕円形に近い楕形をしている。16は基部が一部欠損し、刃部は円刃である。17は分割線を素材として、主要剥離面に調整を加えた第11表 グリッド出土石器観察表 (第67～69図)

いわゆる礫斧である。

18はスタンプ形石器である。側面に敲打等の調整はなく、底面付近に敲打痕がみられるのみである。棒状の礫を分割したか、折れた叩石等を転用したと考えられる。

19は上半部が欠損した磨石である。安山岩の棒状礫を使用し、断面形が角柱状である。風化が激しく、磨面は顕著には残っていないが、端部に敲打痕が明確にみられないため、磨石と考えた。平面形からは叩石と兼用した可能性もある。

20は安山岩を用いた石皿の破片である。片面に使用した痕跡がみられる。



第70図 グリッド出土遺物 (3)

第11表 グリッド出土石器観察表 (第67～69図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	石鎌	黒曜石	2.9	(1.6)	0.3	1.1	表採
2	石鎌	砂岩	3.6	1.7	1.3	10.8	SD46-49
3	打製石斧	砂岩	11.7	5.8	2.0	141.6	SD42
4	打製石斧	砂岩	10.8	6.0	2.2	118.4	SD46-49
5	打製石斧	黒色頁岩	11.6	5.7	2.4	137.3	Q-18
6	打製石斧	安山岩	13.5	7.1	2.0	163.1	AD-15
7	打製石斧	ホルンフェルス	9.4	5.2	2.6	129.5	SD43
8	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	4.9	2.0	78.6	SD42
9	打製石斧	黒色頁岩	(9.2)	(5.0)	1.5	71.7	SD 1
10	打製石斧	ホルンフェルス	(8.1)	5.8	2.3	123.5	AD-14
11	打製石斧	ホルンフェルス	13.0	5.0	2.5	159.1	SD43
12	打製石斧	砂岩	(15.3)	6.0	2.6	228.2	R-15
13	打製石斧	ホルンフェルス	8.5	3.8	2.0	53.5	表採
14	打製石斧	ホルンフェルス	10.2	4.8	1.6	61.7	AC-14
15	打製石斧	黒色頁岩	8.4	4.9	1.8	61.3	SD46-49
16	打製石斧	黒色頁岩	(10.6)	3.6	2.1	85.5	SD40
17	打製石斧	黒色頁岩	11.1	10.4	3.1	354.1	表採
18	スタンプ形石器	砂岩	10.7	5.3	4.0	368.6	D-14
19	磨石	安山岩	(6.7)	5.0	4.0	257.5	SD43
20	石皿	安山岩	(6.5)	(9.5)	3.0	181.3	SD46-49

第12表 グリッド出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	—	(2.1)	(6.0)	25	白・黒	良	灰黄	AC-14	東金子窯
2	鉄滓	桶形鍛冶滓	長径7.2	短径5.2	厚さ2.2	重さ87.4				AD-14	

V 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

埼玉県狭山市八木上遺跡の集石土坑より検出された炭化オニグルミ核の試料1点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料調整は、山形秀樹、瀬谷薫、Zaur Lomtadze、Ineza Jorjolianiが、測定は小林絃一、丹生越子、伊藤茂が行い、本文は伊藤、佐々木由香が作成した。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第13表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（ノバ

オ・ラボ、コンパクトAMS：NE製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

試料は第3号集石土坑から出土した炭化オニグルミ核で、密集して出土した集石下の2層炭化物層中に数10個体のオニグルミ核がまとめて出土した（種実同定の詳細については別項参照）。これらは堆積状況から一括性が高いと考えられたため、炭化オニグルミ核のうち、下部に堆積した1個を測定試料として抽出した。

第13表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-6614	遺構：SC3（集石土坑） 遺物No：一括 層位：2層炭化物層	試料の種類：炭化物・種実（オニグルミ核） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）

(3) 結果

第14表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、

暦年較正に用いた年代値を、第71図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

第14表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-6614	-23.14 \pm 0.14	4481 \pm 23	4480 \pm 25	3330BC (49.9%) 3210BC 3180BC (7.9%) 3150BC 3120BC (10.4%) 3090BC	3340BC (94.3%) 3080BC 3050BC (1.1%) 3030BC

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、

¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測

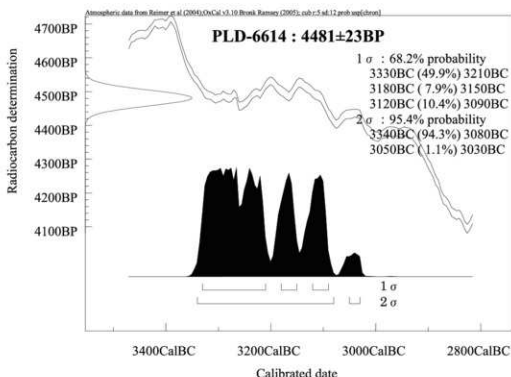
定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40yr）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。



第71図 暦年較正結果

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定試料の炭化オニグルミ核の¹⁴C年代値は、4,480±25yrBPであった。暦年較正した1σ（68.2%の確率）の暦年代範囲は3,330–3,210calBC（49.9%）、2σの暦年代範囲は3,340–3,080（94.3%）が最も確率高い年代範囲であった。この年代範囲

は土器付着炭化物の年代と比較すると、縄文時代中期前半、特に勝坂式期に相当することが考えられる。

勝坂式は、土器付着炭化物の年代測定事例が少なく、東京都の多摩ニュータウンNo.520遺跡で勝坂1式（新道式）期の住居跡から検出された炭化材の¹⁴C年代値が、4,490±50yrBP（Beta-171629）である（小林ほか2004）。勝坂2式では、東京都の多摩ニュータウンNo.520遺跡と向郷遺跡（小林・今村2002）、神奈川県の高山遺跡（小林2004）で、合計9点の土器付着炭化物が測定されている。¹⁴C年代値は4,590±40yrBP～4,370±40yrBPまでや

やばらつくものの、4,500～4,400yrBPの間の年代範囲を示す試料が多い。勝坂3式では、神奈川県の慶応SFC遺跡（小林2004）、千葉県南作遺跡（小林2004）で各1点の土器付着炭化物の年代測定事例があり、それぞれ¹⁴C年代で、4,370±40yrBP（Beta-163299）、4,410±40yrBP（Beta-161099）という測定結果が得られている。勝坂式の細別形式の年代は、相互に年代測定結果が重なる部分が多く、厳密に区分するのは難しい。当遺跡では中期の遺物は出土していないが、測定したオニグルミの年代は中期の範疇と考えられる。

引用・参考文献

- 小林謙一 2004「縄紋社会研究の新視点：炭素14年代測定の利用」六一書房
- 小林謙一・今村肇雄 2002「向郷遺跡出土試料の炭素年代測定」『向郷遺跡Ⅱ』立川市埋蔵文化財調査報告12 立川市教育委員会 pp.88-92
- 小林謙一・今村肇雄・坂本 稔 2004「多摩ニュータウンNo.520遺跡出土試料の炭素年代測定」『多摩ニュータウンNo.520遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第137集 東京都埋蔵文化財センター
- 中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』pp.3-20
- Ramsey, C.B. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, pp.425-430
- Ramsey, C.B. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, pp.355-363
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, pp.1029-1058

2. 八木上遺跡から出土した炭化種実

(1) はじめに

八木上遺跡は、埼玉県狹山市に所在する。本遺跡では、縄文時代の集石土坑が5基検出され、そのうち第3号集石土坑では集石下に目視で判別可能な炭化種実が比較的まとまって遺存していた。ここでは、この土坑内から出土した炭化種実を検討した。なお、資料採取は佐々木由香および埼玉県埋蔵文化財調査事業団、同定は新山雅広が行い、

本文は新山と佐々木がまとめた。

(2) 試料と方法

炭化種実とは、集石土坑の集石下2層炭化物層中に含まれていた。炭化種実とは比較的まとまって出土しており、堆積物からみて一括性が高い。取り上げ方法は、形状を壊さないように注意しながら、肉眼観察可能な大きさのものを取り上げた。炭化

種実の検討は、アルミホイルに便宜的に分けて取り上げた4袋について行った（A～Dとした）。これを水洗洗浄して乾燥後、肉眼および実体顕微鏡下で同定を行った。なお、これらの試料とは別に、放射性炭素年代測定用試料として、種実が堆積していた部分の下方から任意のオニグルミ炭化核（1個体）を採取した。年代測定の結果、縄文時代中期中葉、勝坂式期の年代が得られた（詳細は年代測定の項参照）。

（3）出土した炭化種実

検討した結果、炭化種実は、全てオニグルミ炭

化核であった。核は、埋没以前から入っていたと推定されるクラックが多く、非常に脆かったため洗浄などの過程で割れてしまったものもある。しかし、完形のものではなく、元々全て破片であったと考えられる。破片の大きさは、2～3mm程度の微小なものから大きなものでは1/2程度である。破片であるため、各試料の完形換算個数は、重量により算出した。基準としたのは、試料A中に含まれていた1/4片程度の破片（0.88g）である。各試料の重量と個数は第15表に示したが、全体としては約45.5g（完形13個分、半割では26個分）の破片が出土したことになる。

第15表 出土した炭化種実

分類群・部位、試料名		A	B	C	D
オニグルミ	炭化核	23.16g	3.71g	13.97g	4.64g
		6.6個	1.1個	4.0個	1.3個

数字の上段は乾燥重量、下段は重量換算による推定個数

（4）形態記載

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 炭化核

オニグルミ核の核壁は緻密で硬いが、非常に強い火を受けたせいか、出土核は脆く、表面は摩擦して状態の悪いものもある。状態の良いものは、表面に浅い溝状の彫線が認められる。炭化状態が良いものは割れ口に光沢が見られ、割れ口の断面には空隙が見られるものもある。

（5）考察

第3号集石土坑からオニグルミ炭化核が出土したことから、縄文時代中期中葉に当遺跡でオニグルミが利用されていたと考えられる。ただし、当該期の他の遺構や遺物は検出されていない。出土部位は食用部分の子葉ではなく、核の破片であることから、破碎後の残滓を燃料として集石土坑に入れられたと考えられる。取り上げ直後の観察で

は、オニグルミの上下端が欠損し、人為的な打撃痕をもつ1/2程度の大きさのものが比較的多く確認できた。そのため石器や礫を用いて、上下方向に加撃して割った状態のものが集石に入っていたと考えられる。こうした割れ方は他の遺跡とも共通し、東京都東村山市下宅部遺跡の中期中葉から後葉のクルミ塚から出土したオニグルミ核でも同様な割れ方を示している（佐々木・工藤2006）。

佐々木ほか（2006）は、縄文時代中期の集石土坑から、微量ながらオニグルミ炭化核の微細破片が出土したことから、偶発的に混入した可能性も踏まえ、材と共に燃料とされていたことを指摘している。本遺跡の第3号集石土坑からは、比較的大型な破片がまとまって出土し、炭化材も共存していたことから、破碎後の残滓をまとめて廃棄し燃やしたか、意図的に燃やした可能性がある。

(6) おわりに

縄文時代中期中葉の第3号集石土坑からオニグルミ炭化核が出土したことから、オニグルミの利用が考えられた。出土核は比較的大型な破片であ

り、まとまった出土量であることから、まとめて廃棄し燃やしたか、意図的に燃やしたものと考えられた。

引用・参考文献

- 佐々木由香・工藤雄一郎 2006「大型植物遺体」 『下宅部遺跡Ⅰ(1)』 東村山市遺跡調査会 pp.183-222
- 佐々木由香・新山雅広・植田弥生・小林結一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・瀬谷 薫 2006「明治大学調布付属校用地の遺跡(仮称)における集石土坑内での植物利用と年代」 『年報3(2006年度)』 明治大学校地内遺跡調査団 pp.57-60

3. 集石土坑内土壌の炭素・窒素同位体比測定

(1) はじめに

埼玉県狭山市に位置する八木上遺跡から検出された縄文時代に位置づけられる集石土坑の用途を推定するため、4基の集石土坑内の集石下に堆積した土壌を用いて、炭素・窒素同位体比測定を行った。集石内にはいずれも黒色が強く、粘性はないが、非常に油っぽい土壌が堆積していたことから、この黒色土に由来する食物資源を推定することを目的とした。集石土坑内には炭化材が含まれ、特に第3号集石土坑には炭化オニグルミ核が多量に含まれていた(種実同定の項目参照)。このオニグルミ核を用いて放射性炭素年代測定が行われ、 2σ (95.4%の確率)の暦年代範囲で5,290-5,030calBPの値が得られている(放射性炭素年代測定の項目参照)。その他の集石土坑では、肉眼で用途を推定するものは遺存していなかった。測定および本文作成は佐々木由香、村山雅史(高知大学海洋コア総合研究センター)が行った。

(2) 試料と方法

試料は第1号集石土坑の1層、第3号集石土坑の2層、第4号集石土坑の炭として取り上げられた土壌、第5号集石土坑の2層から採取した土壌4点(便宜的に試料No.1-4とした)である。測

定試料は、それぞれの集石土坑内覆土で黒色が良好に堆積している部分から、約3-5gを取り出した。

試料はバイアル瓶に入れ、60℃の恒温乾燥機で2日乾燥させた後、500mgをガラス選洗管に入れ、塩酸(1N)を入れて反応が収まるまで添加した(塩酸処理)。その後、遠心分離機にかけ、上澄みを捨てた。次に、蒸留水を入れて遠心分離機にかけ塩酸を除き、この作業を3回繰り返した後、60℃で乾燥させた。完全に乾燥した後、1mgを計りとりて錫カップに包んで空気を抜き、Thermo Finnigan社製の元素分析計オンライン質量分析計(EAMS)と安定同位体比質量分析計(IRMS)を使用して、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ と $\delta^{15}\text{N}_{\text{org}}$ 、C/N比を測定した。同位体測定値は、炭素の場合、PDB標準体の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比との偏差を $\delta^{13}\text{C}$ (%)値として、窒素の場合は、大気中の窒素の $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ 比との偏差を $\delta^{15}\text{N}$ (%)値として表示した。

(3) 測定結果

第16表および第72図に測定結果を示す。試料No.1(第1号集石土坑)の炭素含有率は11.60%、炭素の同位体比は -22.78% 、窒素含有率は0.38%、窒素の同位体比は6.96%であった。同様に、試料

№2（第3号集石土坑）の炭素含有率は20.90%、炭素の同位体比は-24.95%、窒素含有率は0.31%、窒素の同位体比は5.73%であった。試料№3（第4号集石土坑）の炭素含有率は11.05%、炭素の同位体比は-24.38%、窒素含有率は0.28%、窒素の同位体比は7.36%であった。試料№4（第5号集石土坑）の炭素含有率は15.29%、炭素の同位体比は-24.08%、窒素含有率は0.38%、窒素の同位体比は6.80%であった。

(4) 考察

現代食品の炭素・窒素同位体比では、一般的に陸上動物のうちシカ、ウサギなどの草食動物の平

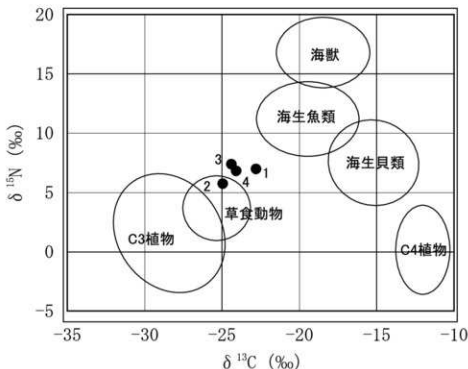
均は、 $\delta^{13}\text{C}$ が-24～-21‰で $\delta^{15}\text{N}$ が3～6‰、イヌ、キツネなどの肉食動物の平均は、 $\delta^{13}\text{C}$ が-22～-19‰で $\delta^{15}\text{N}$ が5～8‰、C3植物（イネ、コムギなど）は $\delta^{13}\text{C}$ が-29～-25‰、 $\delta^{15}\text{N}$ が-2～6‰である（南川2003）。

今回測定された炭素同位体比-24.95～-22.78‰、窒素同位体比5.73～7.36‰は、現生の食料資源と比較すると、C3植物もしくは草食動物の範囲に含まれるか、あるいはその周辺の値を示した。

ただし、土壌中の成分は現生のコンタミネーションの影響を受けたり、複数の食料資源に由来したりする場合に値が変化するため、解釈にあたっては堆積状況などをあわせて考える必要がある。

第16表 炭素・窒素同位体比測定結果

遺構名	試料№	処理量 (g)	酸処理後乾燥重量 (mg)	含有率 (%)		C/N比	同位体測定値 (‰)	
				$\delta^{13}\text{C}_{\text{Org.}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Org.}}$		$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$
SC-1	1	3.8	209	11.60	0.38	30.48	-22.78	6.96
SC-3	2	3.3	211	20.90	0.31	66.69	-24.95	5.73
SC-4	3	3.6	174	11.05	0.28	39.43	-24.38	7.36
SC-5	4	4.6	156	15.29	0.38	40.73	-24.08	6.80



第72図 炭素・窒素同位体測定比のプロット図
(図中の代表的な食物群の安定同位体比はYoneda, et al. (2002), 米田)

引用・参考文献

- 赤澤 威・南川雅男 1989 「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生活の復元」 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』 クバプロ pp.132-143
- 南川雅男 2003 「炭素・窒素同位体比による食性解析」 『文化財科学の事典』 朝倉書店 pp.460-462
- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa 2002 Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. *Radiocarbon*, 44(2), pp.549-557
- 米田 稔 2004 「炭素・窒素同位体による古食性復元」 『環境考古学ハンドブック』 朝倉書店 pp.411-418

4. 黒曜石の蛍光X線分析

八木上遺跡出土の黒曜石22点について、蛍光X線による産地推定を行った。

黒曜石はその大半が内廻り地区で出土し、第2号住居跡からの出土が多く、ほかには内廻り地区のQ-18・S-16グリッド、外廻り地区のF-11グリッドから出土している。なかでもQ-18・S-16グリッド出土のものは位置的に第2号住居跡との関連が考えられる。

分析結果は第17表に示したとおりである。

男女倉群が12点と多く、和田峠群、星ヶ台群が各1点、男女倉群または星ヶ台群1点、不明7点であった。資料数が少なく、製品も数点なため詳細な分析は出来ないが、産地の大部分が男女倉群と推定され、これらも含めた全てが信州系とされたことは、黒曜石の流通を考える上で貴重な分析結果である。

なお、分析の詳細は『研究紀要』に掲載予定である。

第17表 八木上遺跡黒曜石産地推定表

分析No.	地点	遺構	図版番号	器種	誤差の目安	産地推定結果	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	内廻り	SJ2	第21回3	石鎌		不明	2.00	(1.20)	0.30	0.4	
2	内廻り	SJ2	非掲載	剥片		不明	(0.61)	11.65	0.15	0.2	
3	内廻り	SJ2	非掲載	剥片	m-m±3σ	男女倉群	2.55	1.65	0.40	1.4	
4	内廻り	SJ2	非掲載	剥片	m-m±5σ	男女倉群	1.85	2.35	0.55	1.5	
5	内廻り	SJ2	非掲載	剥片	m-m±3σ	男女倉群	3.02	3.70	1.40	11.9	
6	内廻り	SJ2	非掲載	楔形石器	m-m±3σ	男女倉群	4.75	1.90	0.85	4.5	
7	内廻り	SJ2	非掲載	碎片		不明	0.62	1.56	0.53	0.3	
8	内廻り	SJ2	非掲載	碎片		不明	1.08	(0.71)	0.07	0.1	
9	内廻り	SJ2	非掲載	碎片		不明	(1.13)	(0.43)	0.04	0.1	
10	内廻り	SJ2	非掲載	剥片	m-m±4σ	男女倉群	2.25	(1.85)	0.50	2.0	
11	内廻り	SJ2	非掲載	石核	m-m±2σ	男女倉群	2.12	3.88	1.00	4.7	
12	内廻り	SJ2	非掲載	剥片	m-m±3σ	男女倉群 星ヶ台群	(2.74)	(2.94)	0.95	6.5	
13	内廻り	SJ2	非掲載	楔形石器	m-m±3σ	男女倉群	3.08	2.75	1.07	7.3	
14	内廻り	SJ2が内	非掲載	碎片		不明	0.59	0.64	0.12	0.1	
15	内廻り	表採	第67回1	石鎌	m-m±2σ	星ヶ台群	2.90	(1.60)	0.30	1.1	
16	内廻り	Q-18G	非掲載	剥片	m-m±3σ	男女倉群	2.50	(1.43)	0.81	2.6	
17	内廻り	Q-18G	非掲載	剥片	m-m±3σ	男女倉群	(2.23)	2.05	0.49	2.3	
18	内廻り	Q-18G	非掲載	剥片	m-m±2σ	男女倉群	1.31	1.81	0.38	0.9	
19	内廻り	Q-18G	非掲載	碎片		不明	(0.55)	(1.41)	(0.36)	0.3	
20	内廻り	S-16G	非掲載	剥片	m-m±4σ	男女倉群	(1.24)	1.91	0.40	1.1	
21	外廻り	F-11G	非掲載	楔形石器	m-m±3σ	和田峠群	2.57	2.08	1.06	5.3	
22	外廻り	表採	非掲載	剥片	m-m±2σ	男女倉群	1.98	1.45	0.90	2.3	

VI 調査のまとめ

1. 縄文時代の土器 (第7図)

今回の調査では、縄文時代前期中葉の黒浜式から前期末葉の十三菩提式に至る土器群が出土した。以下の分類に従い、概要を述べるとともに、昭和63年の国道299号線建設に関する第1次調査（以下63年調査）、平成2年から4年にかけて実施された、圏央道本線調査の第2次～第5次調査（以下本線調査）の成果と比較検討しておきたい。

第一群土器

前期中葉の黒浜式土器を本群とした。いずれも胎土に繊維を含む。1類は、縄文地上に沈線により菱型状のモチーフが描かれる土器である。上端に横線沈線が描かれることから、口頸部から胴上半部の破片であろう。2類は撚りの粗い原体Lが施文された地文のみの深鉢で、第226号土坑から出土した。第一群土器は、土坑以外に東側調査区から少量が出土した程度である。なお、63年調査では、繊維土器と共に無繊維土器が出土したが、本線調査および今回の調査では無繊維土器は検出できなかった。

第二群土器

前前後半諸磯a式土器を本群とした。1類は、口頸部破片で、垂下する多単位の刺突間に、弧線を対向させたレンズ状のモチーフが描かれた深鉢形土器で、図示した2点は同一個体である。

2類は、平行沈線により上下の三角モチーフを挟んで、菱型状のモチーフが閉塞された単位文として描かれた鉢形土器である。地文に縄文が施文され、モチーフ間が磨り消され、赤彩されていたらしい。文様は口頸部に限定され、胴部との境界には斜位の押玉が施された隆帯が全周するほか、隆帯直上にも対弧のモチーフが施文されている。1・2類はいずれも諸磯a式の新しい部分に相当

しよう。3類は地文のみの粗製土器である。本線調査では、グリッドから2類および3類が出土しており、周辺に諸磯a式新段階の遺構が存在すると思われる。

第三群土器

諸磯b式前半期の土器を本群とした。平行沈線と爪形文を組み合わせて描いたモチーフが基本で、文様構成やモチーフ構成により3分される。

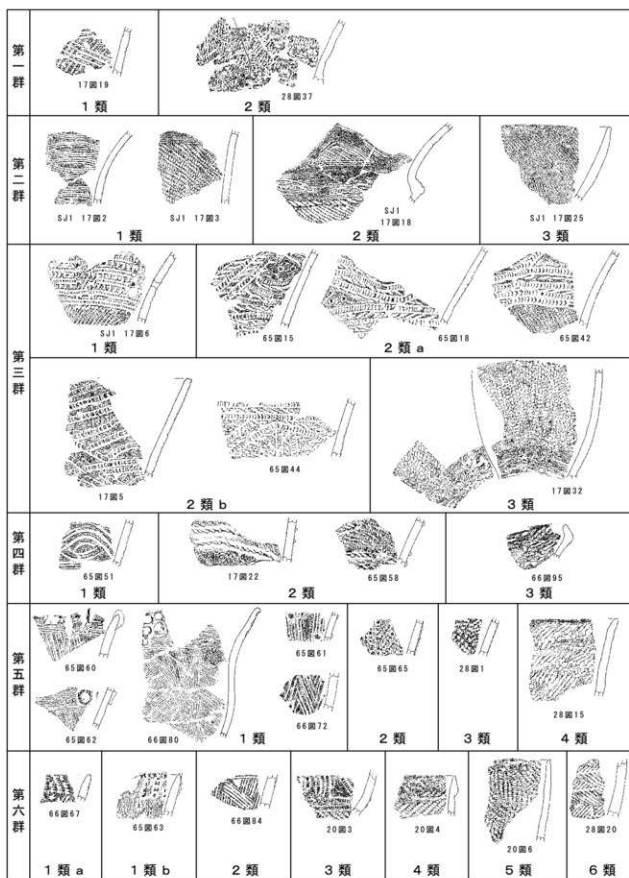
1類は縦区画の多単位刺突文間を連結するように、爪形文列が横走る。2a類は、平行沈線と爪形文による菱型モチーフを基本とし、爪形文間に細い浮線が貼付されるほか、浮線上には、斜位に押玉が施されている。2b単位大波状L深鉢形土器に顕著に認められる浮線と押玉の形態は、第二群2類と類似することから、系統的な連続性が考えられるとともに、本類は、爪形文と浮線の併施文例として定着しており、諸磯b式後半期に主体的となる浮線文の祖形となると考えられる。

2b類は、2a類から浮線が省略された土器で、爪形文の施文間隔も粗い傾向がある。胴部は幅狭い横帯を有する。3類は縄文施文のみの土器である。原体・胎土等の比較から本群に含めた。なお、本線調査では、1類及び、2a類の出土はなく、少量の2b類が出土した程度である。

第四群土器

諸磯b式後半期の土器を本群とした。爪形文から沈線文への施文手法の変化と共に、浮線文の確立化が考えられる。1類のモチーフは第三群2類に共通すると思われるが、やや幅の広い平行沈線に対弧状のモチーフが描かれた土器である。

2類は浮線文の土器を一括したが、掲載資料に見るように、地文の有無がある。地文を持たない

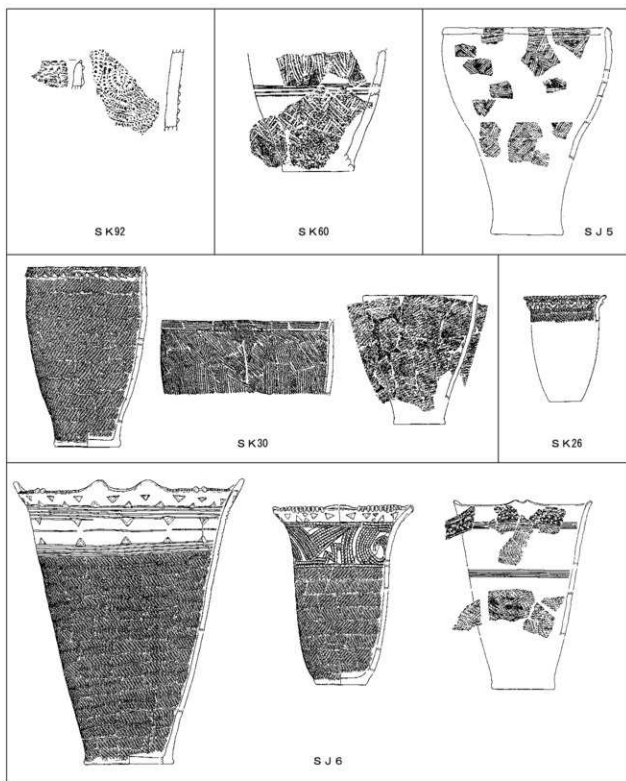


第73図 出土土器の分類

土器で斜位の押玉が施された浮線文は、第三群2
a類に施された浮線と手法に共通性がある。

3類は地文のみの破片だが、口端がくの字状に

屈曲することから、諸磯b式でも終末期の様相と
考えられる。



第74図 八木上遺跡 本線調査時の出土土器

第五群土器

諸磯c式を本群とした。1類は胴部に沈線文が描かれた土器で、施工工具には、半截竹管と共に、多截竹管による密な沈線文が施文されたものがある。通常、口頸部の幅が狭く、図のように、円形刺突が廻るものと、口唇上に貼付文が加えられたものがある。貼付文や口唇部の形態から、諸磯c式でも古い部分ではなく、中葉の様相と考えられる。胴部沈線文上に円形の浮文が貼付されたものもあるが、本例のみである。なお、第2号住居跡から諸磯c式系縦位沈線文の土器が出土していることから、十三菩提式古段階に継続していると看做すべきであろう。

2類は結節浮線でモチーフが描かれた土器で、出土は本例のみである。3類は種類の異なる刺突文によりモチーフが描かれた土器で、内腔部の遺跡から出土する興津式の可能性がある。4類は無節L原体が非結束単方向に施文された粗製土器である。

第六群土器

第六群は十三菩提式と考えられる土器群である。

1 a類は胴部に縦位の沈線文を持ち、口唇部に竹管文が施文された土器、1 b類は1 a類と同様の沈線文で、口唇部に短い結節浮線が垂下する土器である。浮線文上に施文される竹管は、浮線幅を超えない西岡東の様相をもつ。

2類は沈線文間に印刻が施される土器で、横位の多帯構成と推定される。上下対向する印刻文の土器が、本線調査の第6号住居跡から出土しているほか、同住居跡からは、本例と同様の密接した沈線による渦巻き文の土器も出土しており、共時

性を感じさせる部分である。

3類は結節浮線文が施文された鉢形土器と考えられる。現存部位では渦巻き文や銀線状のモチーフが組み合わされた文様構成と推定される。本線部分の第6号住居跡からは、同様の文様が結節沈線で表現された鍋屋町2式風の深鉢形土器が出土している。同様の文様は大木6式にも盛んに採用されているが、本例の屈曲する鉢形土器は、大木6式的な形態に近いと考えられる。

4類は折り返された無文で幅狭い口唇をもち、胴部が縄文のみの深鉢形土器である。折り返しによって段帯部を作出した土器は、本線部分の第5号住居跡や、第30号土坑からも出土しており、第30号土坑出土土器は縄文のみの深鉢だが、折り返し下部に印刻が施されている。以上の土器群は、十三菩提式でも古い段階に相当するものと考えられる。

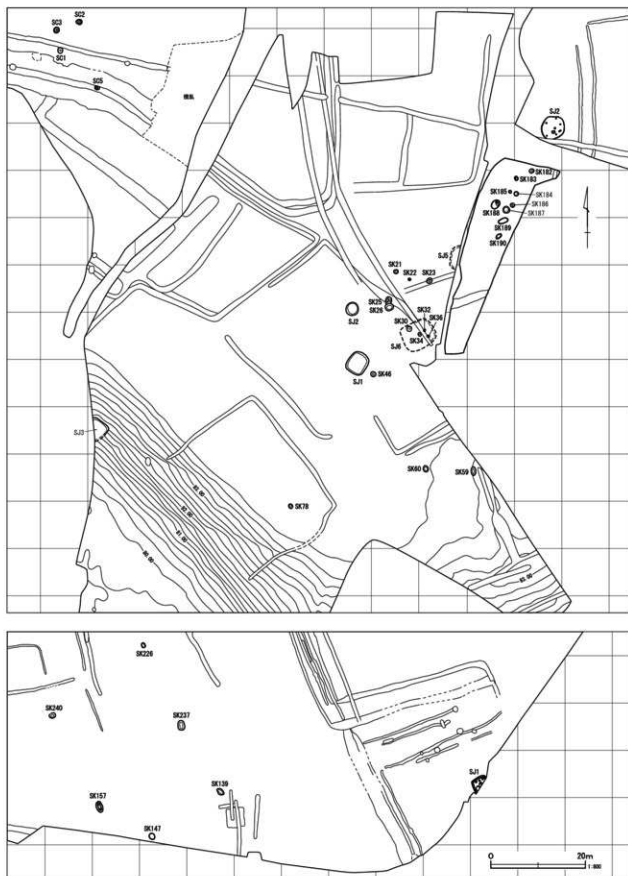
5類は多条のLR原体を、横・斜位に施文することにより、竹管によるモチーフのような施文効果を狙った個体とも考えられる。6類は然りの異なる単筋縄文による羽状縄文土器で、原体は非結束である。

第75図には本線調査で出土した遺構内資料を示した。詳細は本報告(書上・金子1996)を参照されたいが、遺構一括資料を主とした型式論的検討をもとに、十三菩提式土器の新旧2段階の細分案が提示された。今回の調査では第五群1類と3類にややまとまりが認められた。全体に資料が少ないとはいえ、諸磯c式中葉以降、十三菩提式の古段階にかけて新たな資料を追加することができた。

2. 遺構の分布と遺物の出土傾向 (第75図)

八木上遺跡は、現在までに昭和63年度の、国道299号線の建設に係る調査、圏央道本線部分に係る平成2年～4年の調査、狭山パーキングエリア

建設に係る今回の調査などが実施されてきた。以上の調査成果を総括し、遺構の広がりとその形成時期を見てみると、八木上遺跡の性格、とりわけ



第75図 上位段丘面の遺構分布

縄文時代前期集落の動態を推定する大きな手がかりを得ることができた。第75図に示した縄文時代の遺構配置図をもとに、八木上遺跡集落変遷について若干の推定と纏めを行っておきたい。

八木上遺跡の遺構分布は、標高が84～85mの上位段丘面と、上位段丘面から中位段丘面に至る斜面部、標高が80m前後の中位段丘面、および標高77m前後の下位段丘面に分布し、夫々の段丘面で主体となる時期が異なっている。

今回は、主体となる本線部分を挟んで東西に展開する上位段丘面と、斜面部から中位段丘面にかけての一部が調査対象となった。

八木上遺跡で最も古い黒浜式期の遺構は、第226号土坑1基のみで、遺物量も極めて貧弱である。本線調査では、中位段丘面から土坑1基が検出されているが、約400m南西では、63年の調査で、中位段丘面から黒浜期の集落が検出された。集落の面的広がりでは確認できないが、集落を中心とした黒浜期の生活領域を推定する手がかりとなる。

諸磯b式期の第1号住居跡が検出された地点が注目される。位置は調査区の南東端部で、周辺の地形をみると、台地は住居跡の検出位置から、さらに東に伸びていることがわかる。住居跡の標高が約53mの台地平坦部にあり、北西側に緩やかに傾斜していることから、諸磯b式期の小規模な集落の存在が想定されると共に、第1号住居跡は、北西端の住居であった可能性が高い。住居跡覆土内からは、諸磯a式新段階からb式の破片が含まれていたことから、周辺部に複数軒の住居跡が存在する可能性が高いといえよう。

今回の調査では、縄文時代前期終末の諸磯c式中葉から十三菩提式古段階にかけての住居跡や遺物などが検出された。既に本線調査において、当該期の住居跡や土坑が検出され、小規模ながら集落の存在が報告されていたが、今回の調査において、当該期の集落の在り方がほぼ確定したといえ

よう。

諸磯c式期の遺構は、本線調査の中位段丘から下位段丘面において、土坑や土器などが出土した。出土遺物は結節浮線の(双)環状モチーフによるもので、本報告第五群2類に類するものである。また、第2号集石土坑から出土した興津式と考えられる土器が平行する可能性がある。これよりも時間的に遡る1類は、今回の調査において初めて確認された。このことから、八木上遺跡における縄文時代前期終末期の集落形成は、諸磯c式中葉に開始されたと見てよいであろう。

今回の調査では、十三菩提式期と考えられる住居跡と土坑が検出された。いずれも本線調査の上位段丘面で検出された当該期の遺構に隣接しており、時間的にも古段階に比定される。出土土器は本線調査の第6号住居跡に共通する部分もあるが、遺構ごとに組成が異なっており、同一様相を指摘することは難しく、この時期の複雑な様相を端的に示しているといえよう。

瞥見すると、現在までに確認された7軒の住居跡のうち、本線の中位段丘面に位置する第4号住居跡を除く6軒の住居跡は、約120mの範囲に分布し、このうち斜面で検出された第3号住居跡を除く5軒の住居跡は、土坑を挟んで比較的近接した位置関係にあるとも見える。他遺跡をも視野に入れた型式論的な細分段階を念頭に置くと、各々の住居跡は同一時間軸内に収斂されるが、そのなかでも新旧の差異があったことは念頭に置くべきであろう。各住居跡間の新旧関係とともに、土坑や集石土坑等との関係も定かではなく、更に型式論的検討を行う必要がある。

検出された5基の集石土坑は、土器の出土が極めて少ない。このうち第2・3号集石土坑から出土した僅かな資料をみると、諸磯c式新段階から十三菩提式に比定される。また、周辺部の出土土器を診てもこの時期に限られている。第3号集石土坑下部で出土した炭化クミの年代測定結果は、

縄文時代中期前半の値を示しており、遺構の配置状況やグリッド出土土器を含めた遺物の分布状況から導いた所見と整合しない。集落に付随した施設と考えれば、前期終末に設定するのが妥当と考えるが、中期前半の年代を遵守するのであれば、同一段丘面で、八木上遺跡の北東側に展開する、縄文中期の大集落である宮地遺跡との関係も無視できないものとなろう。

遺構が検出された上位段丘面の地形から見ると、平坦部分が南東に広がっていることから、周辺部にはさらに住居跡や土坑等の広がりが期待される。当該期の関東では、諸磯c式期以降、集落そのものの存在が殆ど途絶えてしまうと考えられているが、このような趨勢にあって、八木上遺跡は関東南西部では最も纏まった集落と言えそうである。

引用・参考文献

- 石塚和則 2003『丸山遺跡』 埼玉県狭山市遺跡調査会報告書第13集
入間市 1886『入間市史 原始・古代資料編』
上野真由美 1998『下向沢／中原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第213集
書上元博・金子直行 1996『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
金子直行 1990『八木上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第91集
金子直行 1999『縄文前期終末土器群の関係性—十三菩提式土器と集合沈線式土器群の関係を中心として—』 『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集』 六一書房
川口 潤 1992『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
栗岡潤・西井幸雄 1995『西久保／金井上』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
狭山市 1986『狭山市史 原始・古代資料編』
鈴木秀雄 1996『坂東山・坂東山西・後B』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集
関根慎二 1986『糸井宮前Ⅱ』 『関越自動車道（新羽線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集』 群馬埋蔵文化財調査事業団
並木 隆 1978『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書第35集
細田 勝 1991『在家』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第107集
細田 勝 1992『諸磯c式土器研究への一視点』 『埼玉考古』 第29号 埼玉考古学会
細田 勝 1996『縄文前期終末期の研究—地域差と系統差の統合的解釈に向けて—』 『先史考古研究』 第6号 阿佐ヶ谷先史学研究会
安井智幸 2005『城ノ越遺跡 第15次調査』 埼玉県狭山市遺跡調査会報告書第15集
安井智幸 2005『森ノ上遺跡』 埼玉県狭山市遺跡調査会報告書第14集
山形洋一 1984『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会報告書第9集
古田健司 1985『灰原遺跡—先土器・縄文時代編—』 川口市文化財調査報告書第23集